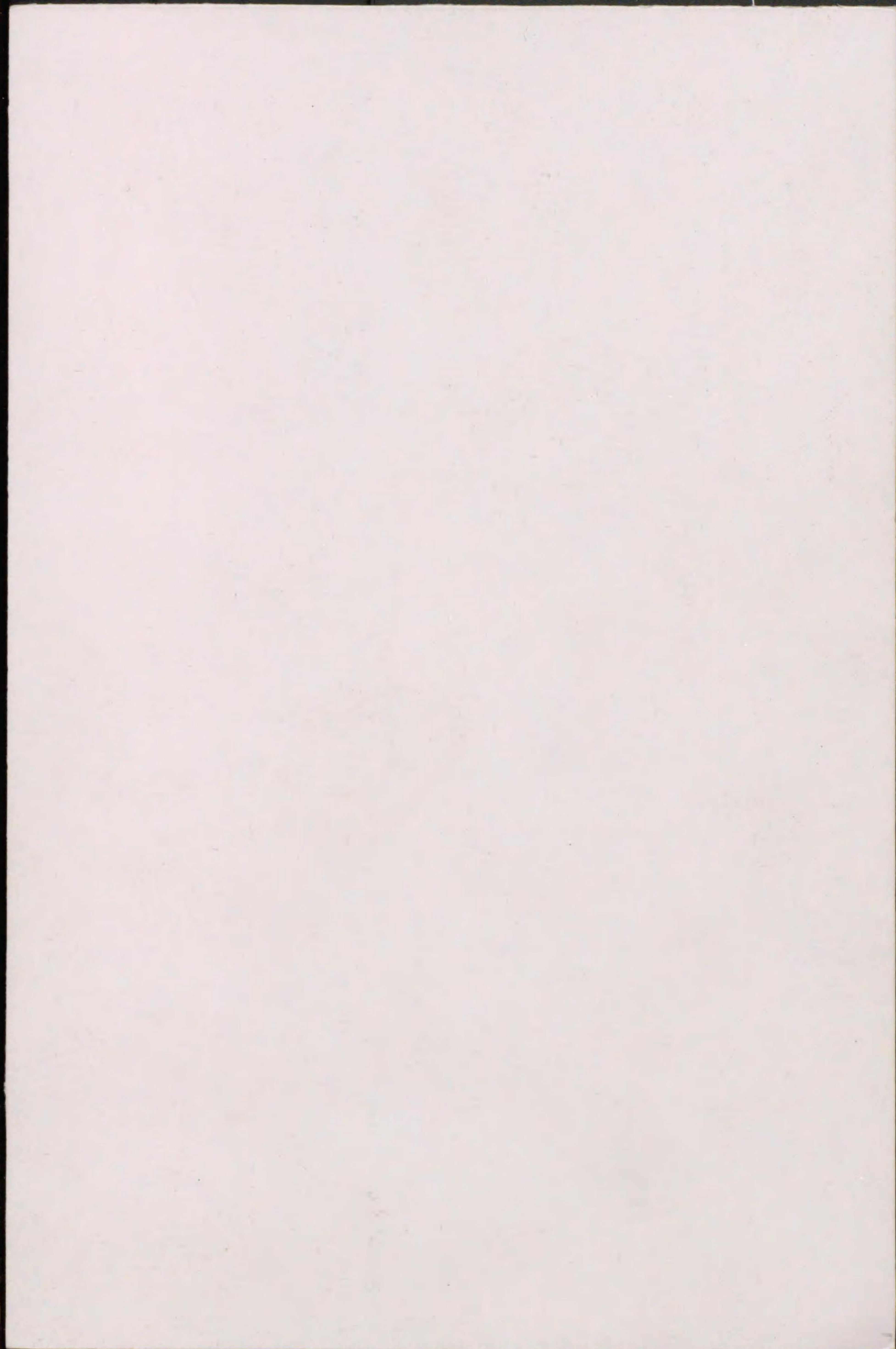


595-412



1200501527615

595
412



8.12.27



路



595-412

御披露

今茲陽春三月、私共旅好きが集りまして、毎月一回、井をつゝきながら旅物語を致し、井會と名づけ、時にはコースを選んで旅行も致して居りました處、淳朴な風を悦ばれて、追々會員が増加し、此頃では二百人程になりましたので、一同から、會名變更の上、廣く天下同好の士と共に清遊することにしたら如何との議が起りました、天高く金風徐ろに吹く秋に當り、協議の上「關東旅行クラブ」と改稱する事となりました。徒らに會員の多きのみを望まざる爲め、未だ小團體では御座いますが、會務を統べるには、矢張り一定の申合せが必要となりましたので左記の通り、清規を作りました。私共の目的は、標語を守つて、唯小兒の如く、嬉々として、一日、或は數日を、愉快に過したいだけで御座います。何卒御援助を御願ひ致します。

關東旅行クラブ清規

一、本會を關東旅行クラブと稱へ、毎月一回以上、主として休日に旅行するを目的とします

- 一、御入會御希望の方は、會員の御紹介を要します
- 一、會費は一ケ年金參圓とし、前以て頂きます
- 一、會計年度は、毎年九月を終期とし、決算の上、翌十月に報告致します
- 一、毎月一回會報を發行して、旅程其他諸般の事項を報告致します

標語 四則

- 一、燐寸や煙草は、よく消してから捨てませう
- 一、花卉や作物を、荒さぬ様に致ませう
- 一、辨當殻や紙屑などを、散らさぬ様に致ませう
- 一、道は餘り急がぬ様、さりとして遅れぬ様に歩るませう

以上

昭和五年九月

關東旅行クラブ同人一同

スタートに際して

菊花燦として咲く時は、一年を通じての旅行の好季節である。吾等は此時が來ると年々歳々同じ様に、山を憶ひ、水を慕ふのである。

由來我國は、世界の何處の國に比しても、一番早く遊戯的旅行が發達しなければならぬ國柄であると信ずる。然るに今日迄遅々として發達しなかつたのは、交通機關の發達せざりしこと、封建時代の行旅者の取締が餘りにも嚴に失したること等々數へ來れば其原因は種々あらうが、翻つて現今の斯界と比較すると實に長足の進歩に驚かざるものはあるまい。乍去之を仔細に吟味するときは、其發達は遺憾ながら過渡期的發達であつて、眞にツーリズムの眞髓に徹したものは云へまい。ツーリズムには、ツーリズムとしての本來の使命もあれば術式もある。然るに現在の多くの徒步行樂者の群を見ると、全くヤブ入の小僧さん式で、歩く所は厭だ、なるべく乗物で通して行ける所であつて欲しいことの、ヤレ歸りには何處かで一杯やるのが樂だ、小人數では淋しいから多人數でワイ／＼騒ぎ立て、行かう、何々八景、何々廿五勝、何々温泉と極めの附た處なら行くが、何だか知れないがい

ヤに屁理屈を附けた風光美とやらに富んだとか云ふ所なら御免を蒙る。と云つた様な、極めて低級愚劣なる考へに支配されてゐる傾向がある。過渡期なるが故に、之も致方なしとするも一つや二つ位世俗に阿諛せず、超然として高きに居り、然も高級に過ぎず、低級に墮せず大衆と俱に歩み、而も何時もそのトップに立ちて、之に適當なる指導と、目標とを與ふる底の旅行團體が産れて然るべしであらう。

新しきものが歓迎せらるゝ時代に、旅行のみが、先人開發の埒外に出せず、「自ら風景を鑑賞する見識」位は養はずして、長い命があると考へてゐるのは、一種の喜劇であつて、悲劇である。旅行本來の意義を忘れて、徒らに、旅行距離の長きを誇らんとするなれば、乞ふ去つて、郵便配達手か、列車の乗務員に聞いて貰ひたい。

遊戯的旅行は、勿論一種の趣味である。斯るが故に、小理屈や、ポリシーなどは斷じて許すべからざること論勿し。唯、斯界の發達扶掖の爲めに、微力を致せば足りるのである。吾等、不敏にして、自ら其任にあらざることを知つてはゐるが、慚なくとも、眞面目に眞劍に、斯界の爲めに、研究もし指導もし、以て過渡期の旅行界に何等かの足跡を印しようとするものである。請ふ來つて吾等に反響せんことを望むや切なるものである。

記

一、本書は、我が關東旅行クラブの機關紙たる會報「旅路」に登載せる、既往一箇年間の紀行にして、参加會員の執筆したるものなり。吾等は文筆家にあらざれば、美辭もなく、又麗句もなし、たゞ見聞に任せたるのみなり。之を編纂する所以は、保存に便ならしめんが爲に外ならず。然れども、尊き吾等の體驗を發表して、後人を益するは吾曹の責務なりとの論もありて、茲に公刊したる次第なり。

一、本書には序文を缺く。蓋し、一面識もなき著者に對して賛辭を呈する、所謂賣文者流の序文を以て著書を粉飾し、得々たる如き不見識は、男子の本懐に非ず。依つて本書は、「旅路」創刊號に述べたる、吾等の希望、及び抱負を卷頭に轉載して之に代ふ。

一、本書の紀行中に挿入せる寫眞も亦、悉く會員の手になれるものなり。卷中隨處に掲記せる詩藻及び所定コース以外の紀行等亦同じ。

一、發着の時間は、其當時の儘を記載せり。時により多少の相違あるべきも、其梗概は得らるべしと信ず。觀者宜敷斟酌あれ。費用亦然り。

- 一、目次に旅程のみを擧げて、紀行なきものは、雨天其他の事情にて、中止したる爲なり。
- 一、本書の行程は、最も是なりとして企圖し、實行したるものなり、讀者にして、より以上のプランありて、教を垂れ給はゞ幸甚なり。
- 一、本書には、地名索引を卷末に附せり。五十音順により、國語假名遣ひ、並びに發音假名遣ひ、兩様に出したれば、重出の場所あり。
- 一、本書は第一輯として出版せり。爾後、行を得るに従ひて刊行すべきも、大凡一ヶ年一輯なるべし。
- 一、本書の編輯は、旬日の間に於ける全く余一人の仕業なり、従つて誤謬多かるべし、讀者之を諒せよ。
- 一、難讀の地名等につき、同人にして畏友たる、小池利兵衛氏の教を享くる事鮮からず、叩首多謝。

紀元二千五百九十一年明治節

關東旅行クラブ同人

大槻正二識

時年知命加一

月別目次

(括弧内の數字は當クラブの旅程回数なり)

一月の部

- 常春の國房總一周 (第十一回) 一
- 高原のスキー地沼尻温泉へ (第十二回) 五
- サア出掛けませう大勢で兎狩り (第十三回) 一八
- 歴史の興味豊なる鎌倉巡り (第十四回) 二五
- 常春の熱海温泉から椿の亂れ咲く初島へ (第十五回) 三

二月の部

- 王子製紙十條工場と鐵道記念館の見學 (第十六回) 五
- 鎌倉背山を縦走して金澤の史蹟を巡る (第十七回) 五六
- 温泉に浸りながらスキーを見ませう (第十八回) 六四
- スキーの奥上州山歩きとところづく (第十九回) 七〇

目次

三月の部

青梅梅林を採ね更に雪の御嶽神社詣(第二十回)……………六一
 早春の山踏み刈寄山から恩方谷へ(第二十一回)……………六九
 詩と史に恵まれたる奥伊豆温泉の旅(第二十二回)……………九四
 お坊ちやん御嬢さんお待兼の兎狩り(第二十三回)……………一〇五

四月の部

山陰の温泉めぐりと山陽あちこちの旅(第二十四回)……………一一一
 高尾山景信山より山稜縦走陣張山へ(第二十五回)……………一二四
 家族連れで倉見堤のお花見(第二十六回)……………一二九
 小金井の名木調べと立川農事試験所參觀(第二十七回)……………一三四
 鶴見川崎工場見學(第二十八回)……………一四一
 聖岳と土肥の大杉(第二十九回)……………一四七

五月の部

風薫る伊香保温泉と榛名山の新緑美(第三十回)……………一五九
 新緑の大菩薩峠附近(第三十一回紀行缺)……………一七一
 雲雀啼く香取鹿島の水郷(第三十二回)……………一七二
 家族連れの行樂日吉臺の苺摘み(第三十三回)……………一八〇

六月の部

異色ある函嶺踏破裾野驛より湖尻峠へ(第三十四回)……………一八七
 松戸の工兵學校見學と總武沿線のピクニック(第三十五回)……………一九四
 新緑の大谷川を溯り明智平登攀(第三十六回)……………二〇一
 初夏の多摩川の流に沿ひて(第三十七回)……………二〇八

七月の部

中山道六十九次驛路の旅(第一回)(第三十八回)……………二二七
 燦たる異彩を放つ相馬野馬追祭り見物(第三十九回)……………二三五
 家族連れで危険のない川遊を催しませう(第四十回紀行缺)……………二四三

八月の部

日光白根登山と丸沼菅沼へ (第四十一回紀行缺) 二四四

世界に冠絶したる秀麗無比の富士登山 (第四十二回) 二四六

東北の名山飯豊山へ (第四十三回) 二五一

中山道六十九次驛路の旅 (第二回) (第四十四回) 二六五

信仰の山木曾の御嶽 (第四十五回) 二七五

日歸りで山と海との行樂 (第四十六回) 二八二

相州三浦半島の夕 (第四十七回、紀行缺) 二八六

九月の部

佐渡ヶ島と上越新線沿道の探勝 (第四十八回) 二九一

秋天高き時高層氣象臺見學 (第四十九回) 三〇八

中山道六十九次驛路の旅 (第三回) (第五十回) 三五五

多摩川の梨ちぎりと川遊び (第五十一回) 三六一

十月の部

秋冷の氣漲る上高地へ附白骨温泉の入浴 (第五十二回) 三三〇

川治温泉に名月を賞し高原山を越えて鹽原へ (第五十三回) 三三六

三ツ峠山と河口湖 (第一回) 三四一

家族連れで芋掘に (第二回) 三五二

東郷公園と子の權現 (第三回) 三五六

十一月の部

土肥、湯ヶ島温泉より天城山へ (第四回) 三六四

霜葉美の秩父へ (第五回、紀行缺) 三九三

秋色闌なる相摸の山水 (第六回) 三九四

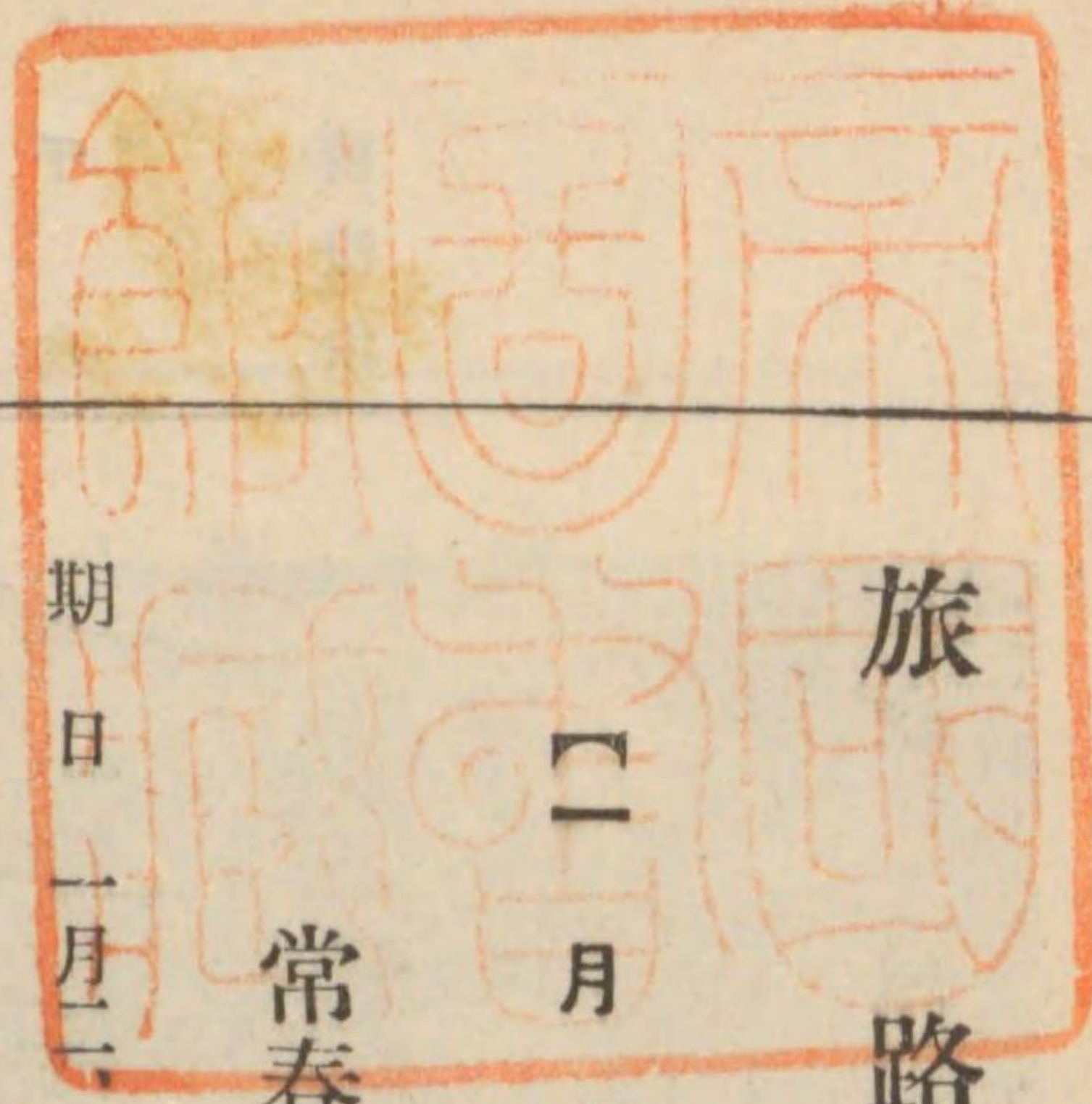
風光明媚な眞鶴で蜜柑狩 (第七回、紀行缺) 四〇〇

十二月の部

多摩聖蹟記念館と其の附近の散策 (第八回) 四〇二

冬知らぬ湘南の地三子山から小坪へ（第九回）…………… 四四

奥上州谷川の温泉と足馴らしのスキー（第十回、紀行缺）…………… 四二



旅路

【二月之部】

常春の國房總一周

期日 一月二、三、四日

集合 二日午前七時十五分兩國驛

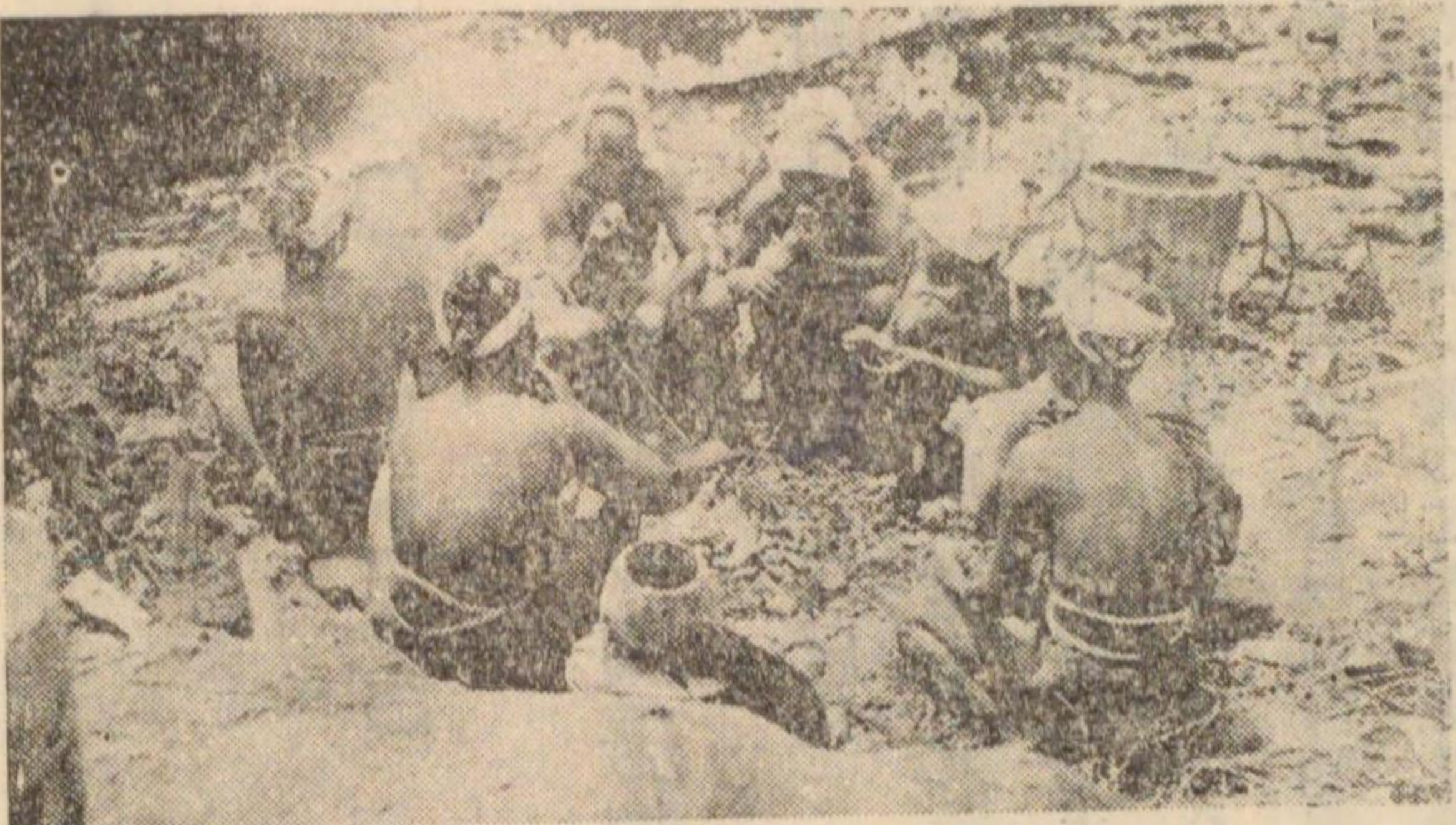
發車 兩國驛午前七時四十五分

下車 岩井驛午前十時四十分

行程 岩井から合戸迄自動車、そこから八犬傳で名高い富山に登る、登行極めて容易、岩井に歸つて汽車で北條に行き洲崎神社に參拜、附近探勝の上北條に一泊。翌日は北條から自動車で、白濱方面へ行く。此邊は全く常春の國で、眞冬だと云ふの

岩合富北
井戸山條
洲崎神
社

野島崎
安房
白濱
千倉
清澄山



焚火を圍む白濱の海女

に菜の花や、豌豆の花が盛りです。外房州の男性的な海洋美に接し、野島崎の燈臺などを參觀することにする。一帶の風光美などは縷説を要しますまい。マア行つて御覽なさい。安房たつて潮風に荒された顔の娘さんばかりではありません。眸の美しい女もゐます。時間都合で白濱に一泊するか又は千倉迄行つて鑛泉にでも浸ることにする。三日目は清澄山に登つて英雄僧日蓮の遺跡を尋ね、それから歸途のルートは参加者で協議の上決めて其夜歸京。
天候 不拘晴雨
用意 普通旅装にて可なるも、輕装、磁石、辨當一食分等を携帶のこと

房總一周之記録(紀行)

旅 好 生

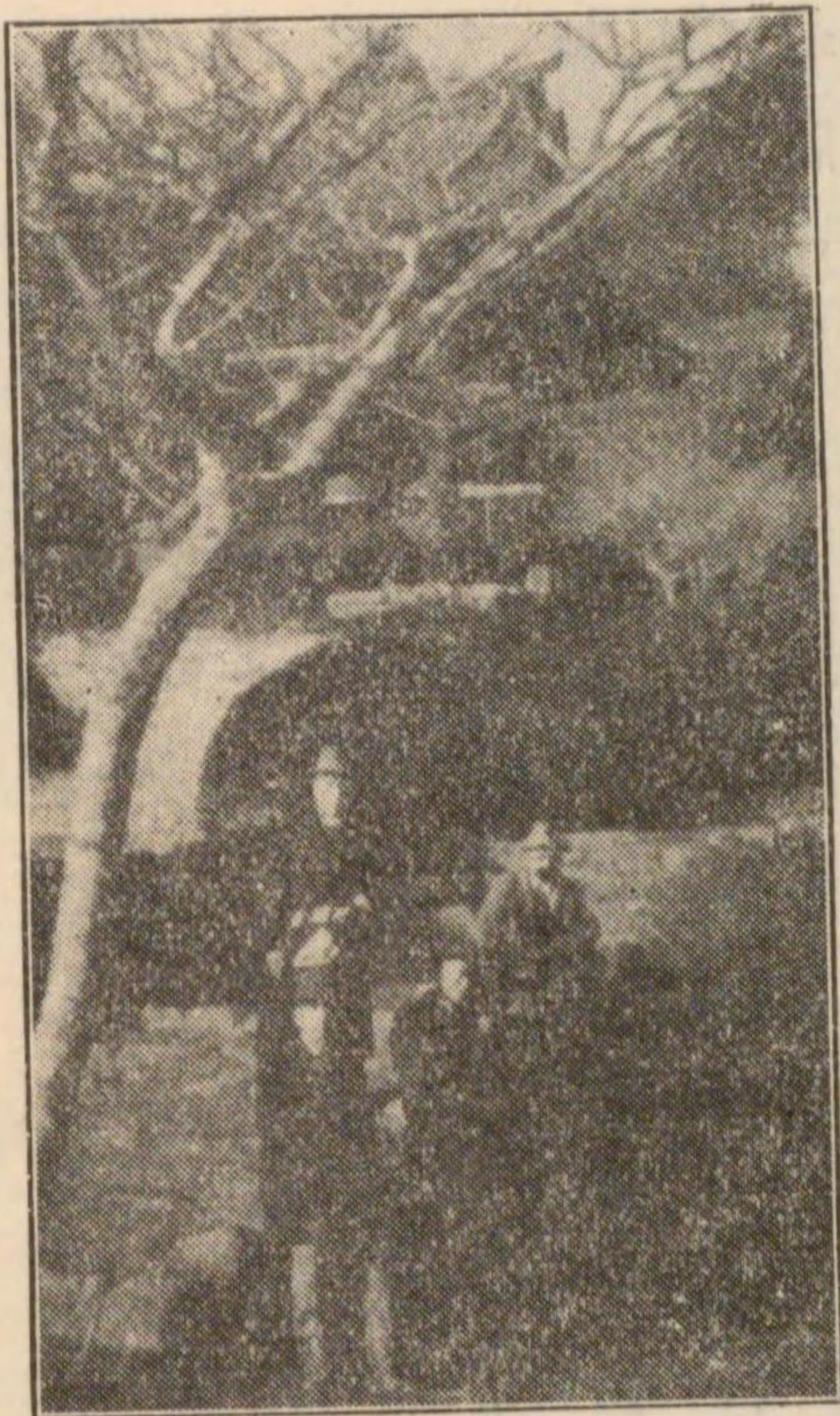
第一日(二月二日:曇後晴)

元旦の初雪を踏んで午前七時十五分兩國驛集合、同七時四十五分發車、岩井驛同十時四十分下車、富山へ歩行。同十一時十分山麓福滿寺到着、境内より南峰觀音岳頂上に十二時五分到達、休息晝食。午後一時二十分下山、岩井驛同三時十三分乗車、後續參加の倉本豐間根兩氏と車中に會して同三時三十八分北條驛到着、暢んびりした自動車旅行の開始となる。直に安房の最南端洲崎に向ひ同四時二十分洲崎神社參拜、洲崎燈臺參觀、日没の景觀、大島三原山噴煙の展望佳し、午後五時三十分北條町に歸着、木村屋旅館投宿。

第二日(二月三日:快晴)

宿屋の雜煮は愉快なものネと無上に悦び立つ倉本氏のリーダー振りに勇ましく午前九

時二十分旅舎出發、自動車にて内房より外房へ向ふ。途中神戸村で促成栽培の實況視察、同十時半安房神社參拜、布良を経て白濱へ十時着、野島崎燈臺見物、此の附近茶の花満開也。同十一時四十分千倉着鈴木屋に晝食。午後一時二十二分千倉驛發、同二時十五分天津驛下車、



行一るけ於に寺澄清

乗合自動車にて清澄山往復、再び天津驛同四時四十八分乗車、豫定より一日繰上げ同八時十二分兩國驛歸着解散。豫定コース全部完結也。此經費一人當り

金十四圓七十六錢。

高原のスキー地沼尻温泉へ

期日 自一月二日 至五日

集合 一日午後九時上野驛

發車 午後十時二十分

下車 早朝耶麻鐵道沼尻驛

行程 猪苗代湖畔を通つて未明に磐越西線の、川桁驛に着た汽車は小憩の後、耶麻鐵道に乗換る、天狗角力取山は右に、磐梯山の皚々として豪快なる山容は左に車窓を賑はす、七時沼尻着。

徒歩十五分で中の澤の旅宿に入る、酸性硫黄泉に一浴して、スキー場に出かける、スキー場は附近の高原で、廣袤二百萬坪と稱せらるゝので何處でも滑れるし、初心者にも山黨にも適して居る。先づ中の澤乃至神尾スロープに練習を始める、沼尻の青年並に選手諸君は懇切に指導してくれる。

猪苗代湖
磐越西線
川桁驛
耶麻鐵道
天狗角力
取山
磐梯山
中澤山

神尾

熟達者は沼尻山の硫黄採鑛所を訪問して四キロのコースを滑降したり、又横向温泉に暮の湯に或は吾妻連峰を遠征して日頃の技を試みるも愉快である。

温泉場は東北地方特有の純朴の氣風に満ちて居るが、諸君の期待に反く事はない。

歸路 五日夜沼尻發六日午前六時頃上野着

新年の沼尻スキー場附近(紀行)

三 迷 士

出 發

一九三二年々頭の回禮は萬事が超スピードで、電車、自動車、地下鐵と乗り繼いで一日の内に十數軒を片づけ、夕刻自宅へ戻つたと思ふと早速一人二役の早變りできつきの迄のモーニングをかなぐり棄てると、今度はシュナイダー式の背廣にスキー帽スキー靴、それに大きなルックサックを背負ひ、スキーとストックを擔いだ姿は、丁度鐵

道省のポスターの様で我乍ら天晴れなスキーヤーになつたものだ。これから沼尻迄滑りに行かふといふ譯だが、三時頃から降り出した雪は最早五寸位も積つたらしくまた盛に降つてゐる。あなた位のスキーなら態々沼尻邊りまで行かなくても、こゝらでは如何ですといった様な鹽梅式に盛んに降る、降る。

其日の上野驛スキー出發の光景は又驚くべく物凄なものだつた。奥羽線に乗るお客、信越線を目掛けるお客、九時のお客、十時のお客と總てがスキーを押し立て、改札口といはず、プラットホームといはず到る所でスクラムを行つてゐるので氣の小さい人は此光景だけで、もう大概スキーは諦らめるだらうと思はれる程だつた。關東旅行クラブの旗下に集る一行十九名は此盛況を横目に眺めながら悠々と新鮮な車に乗り込んだ。各自シートを定めて、さて一服始めた時分漸く此車にもスクラムが始つたが結局シートはトライ出來ずに一晚中立續けた氣の毒な人も大分見受けられた。

郡山で本線と分れたのも直通列車の御蔭で知らずに過ぎた者の方が多く、リーダー藤枝氏など正に此時分直滑降で山を下りかけてゐる大事な夢境にあつた様だ。五時川桁着。大部分のお客は此處で下りて仕舞つた。これが總て耶麻鐵道の小さな車に乗り

込んだのだから忽ち此の列車は弾ける程の客を満載となつた。逸速く火鉢の側を占領した要領のいゝ筈のお客は前後から押されるので遂に火鉢の上へブラ下つた處、暫くすると此火氣がいゝ鹽梅に身體に廻つて零下何度の此曉に汗をだくく流しながら遂に悲鳴を擧げてゐたのはとんだ御愛嬌だつた。

小一時間も立つてから列車は徐に走り出した。夜のヴェールは一枚一枚剥れて白皚々の世界は漸く車窓に展開し始めた。昨夜の雪に新粧を凝した磐梯山は一瞬蕃薇色に輝いたが、やがて又灰色の雲の内に隠されて仕舞つた。積雪が次第に深くなるに伴れて我等の汽車は大分息づかひが荒くなつてきたが傾斜に掛つて遂に動けなくなつて仕舞つた。深切なお客が車掌を手傳つて一緒に後押しをやつてみたが車輪は空廻りをするばかり、一向駄目なので機關手の發議で後の三輛を切り放すことにした。それで車は軽くなつたが驚いたことに切り放した三輛は川桁に向つてさつさと走り出した。あれよあれよと呼んで見たつてもう遅い、坂路を段々と速度を加へてやがて林の向に消えて仕舞つた。青くなつたのは乗つてゐる連中だ、周章て、ブレーキを廻したが反對に廻してゐるので止まるどころか、益々走るばかり飛び下りて雪の上に尻餅をついた連

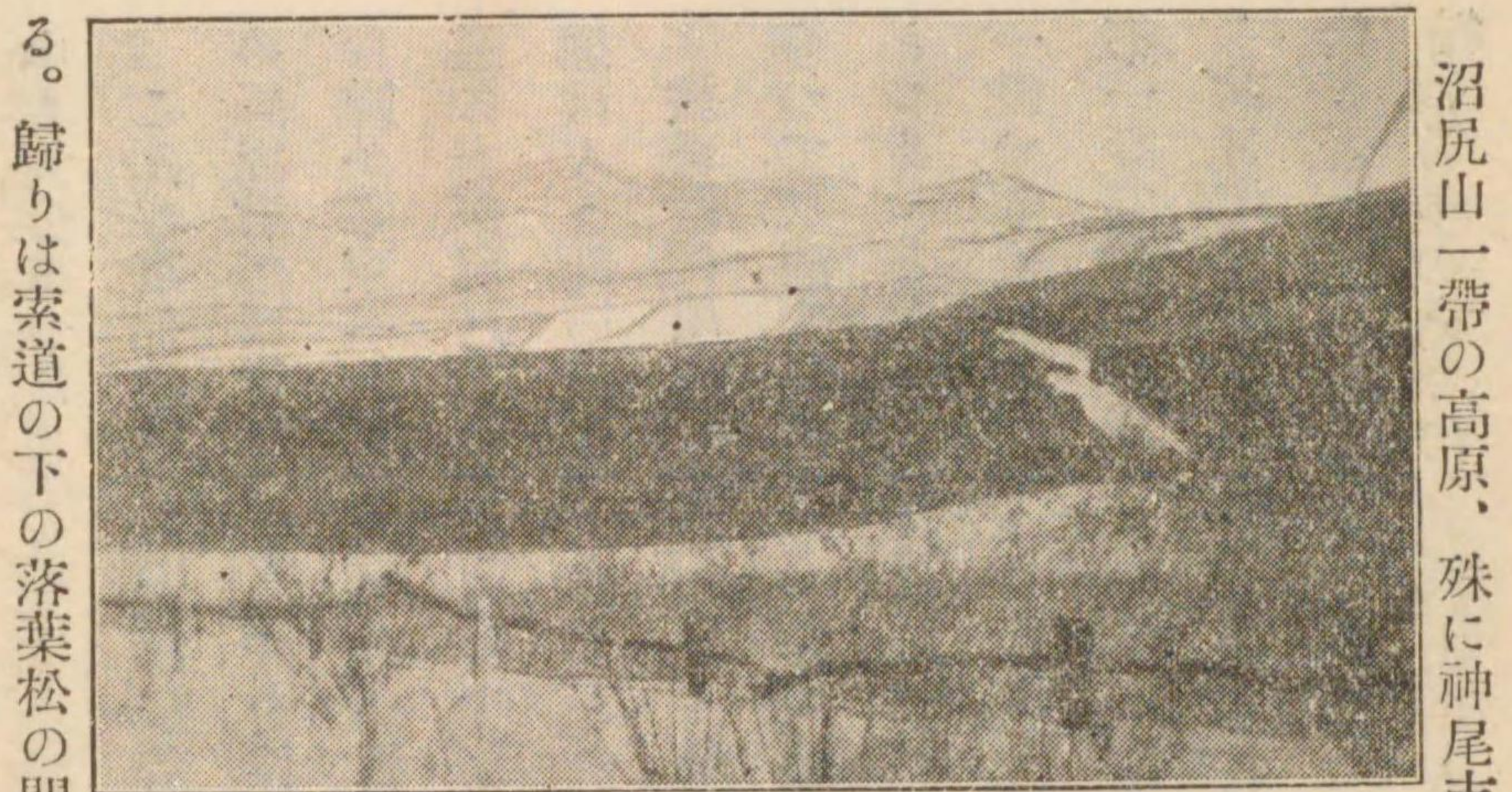
中も大分あつた。

こんな事件の爲め汽車は延着して沼尻に着いたのは八時近くだつた。驛には先發隊の野坂君が西村屋の若い者を伴れて出迎へて呉れた。吾々の行かふといふ中ノ澤温泉は驛から東へ八丁眞直な緩い坂路を徒歩約十五分で達する。雪が少くて一昨日迄は此道に土が現れてゐた相だが昨日の降雪で一遍に立派なスキー路となつた。先着の選手連はもう此の邊をスースーとやつてゐる。

旅舎西村屋に到着。昨日、今日の來客で満員以上の盛況の中を數部屋を都合してもらつて、漸くやれくといふ氣になつた。酸性硫黄泉の此處の湯はいきなり飛び込むとピリ、とくる、それが又何とも言はれぬいゝ氣持だ。先づ一浴して夜汽車の疲勞を一掃するのであつた。(と、け、士)

第一日(曇時々雪)

前日迄滑走出來ぬ程度の雪も前夜の降雪で凡そ三尺、寒氣零下三四度雪質申分なく恰も吾々を迎へる天候である。一風呂浴び朝飯後直ちにスキーを附けてゲレンデーへ行く。



神尾スロース

沼尻山一帯の高原、殊に神尾吉岡の兩スロープの雄大な銀盤はベストコンディションで雪はさら／＼として時々雪も落ちた、先づ各自力量に應じたスロープを選んで滑走して見る、初めて神尾スロープの頂に立つて見ると中々高い。今迄傍に居た人が二三十秒の直滑降で麓の雑木林迄達し蟻程の大きさになる。初めは滑り落ちる氣にならないが他の人がやるから滑降して見る、成功すれば誠によい氣持だが投げられると途中でスキーと共に雪煙を上げて二三轉中々痛い。

中食に大きなムスビを二つづつ平げ、午後は一本松より白糸瀧迄登る、白糸瀧は斷崖の結氷の間に靜に落ちて見る者をして寒さを催させ、歸りは索道の下の落葉松の間を滑走する、積雪状態もよいので尻もちを數回つくる。

間に再び神尾スロープに歸り、練習場より宿への歸りは一滑走で誠によい氣持だ。

（第二日（吹雪、零下六度））

各室の諸君が暗い中から起きて朝食を急がせ、練習に出懸ける熱心さである。吹雪で休んで居ると寒いが、雪積は申分ないよい状態である。午前神尾、吉岡スロープで練習し、中食をとる、山の神は午後の山行があるのでライスカレー四人分平げる。驚いた消化力である、午後は向山の雑木林を階段登りをなして吹雪の寒さの中で大汗をしばり、歸りには落葉松林の滑走實に愉快であつた。

（第三日（船明神、一本松））

前日に代るに此日の快晴、正に雪の翌日裸で洗濯でなく、裸でスキーである、ズボン一つで滑走する元氣者も練習場に數人現れ、春のスキーを思はした、薄シャツ一枚でスロープの上よりの直滑降、涼風肌身にしみて快し、藤枝、高橋兩君は船明神へ登る。（別項参照）

戸田君達と再び一本松白糸瀧へ遊ぶ、快晴のため南、那須、日光方面、西、新潟縣山形縣境の飯豊山らしい山迄よく見える。

目の先の磐梯山は新雪美しく輝きまばゆいばかりで沼尻高原は恰も樂天地の様であった。

戸田君達歸る。

第四日(暖、雪解ける)

朝起きれば暖氣で雪解け始め雨の如き音をなす。一同保成峠の日蔭牧場迄行く、雪の状態悪し。午後一時沼尻發、二時十分川桁乗換、三時五十分郡山乗換にて歸京す。雪解けと共に各スキー客同時に歸りしたため列車の混雑限り無く、乗客は四五時間の立ン棒を餘儀なくされた。かゝる場合には同じ番號でもう一列車を作つて客に便宜を計れ相なものだと思ふ。鐵道旅客係の方の一考を望む。(イ・ケ・土)

船明神山のスキー行

一月四日は無類の晴天、この期を逸してはと急に吾妻連峰の雄峯、安達太良山一七〇〇mに登山を計畫してメンバーの編成に奔走する。高橋氏とTASCのF氏とA氏の三名と此土地唯一の案内人磯貝氏と扇屋の小澤利一氏が同行する。

普通遅くも七時には出發しなければならぬのであるが、急の計畫、何や彼やと九時となる。食糧も萬一を警戒して握り飯大三箇、パン一斤、ソーセイジ一斤、菓子若干と額帶の電燈を用意したが、その帶を忘れたのは夜に入つて僅か一時間であつたが不覺であつた。

中の澤の西村屋の傍から保成道に出る、雪は絶好のコンディション緩傾斜の幅広い道を行く。丸い頭の日蔭山一〇七mにも二三人登つて行く、四十分程で牧場の平坦な所に出る。此處から己に吾妻連峰は雄大な容を見せてる、東北に和尚山の膨大な頭、その右に凄い岩峰を頂き蜿蜒として尾根を引て居るのは船明神山一六七〇mで、吾等は此の尾根をつめて行くのである。北には東吾妻山一九七五mと長い尾根を引てゐる中吾妻山一九三一mは穩かな容を擡げてる。その左に少し距れて兩雄競ふ様に聳えてゐるのが吾妻連峰の最高峯西吾妻山二〇二四mと西大嶺である。

維新の際會津の落武者が隠れた保成の部落に十時、峠にはそれより七八分で達する。船明神山より下つて來た郡界尾根には幅十五m位の堂々たる防火線が匍ひ上つて居る。吾等は此の防火線を傳はるのであるが始め東側の緩斜面より電光形に登つて尾根

に出る。尾根の眺望は素敵だ、沼尻に來た人は一度は此尾根に出て景觀を檀にすべき

である。先の吾妻連峯に加へて西方遙かに飯豊

山は一際白く磐梯山もその麓の吾妻湖、小野川

湖も次第に浮び上た様に見える。東は郡山

福島小平野は色々な形に延びて居る。

船 一一五〇m 釜桁の上十時五十分食事をしてア

神明 ザラシを付ける。白樺には樹氷が付き始める。

山 登高は續くが氣は晴々として愉快である。行手

の尾根から雪の尖峰が少しばかり見え隠れす

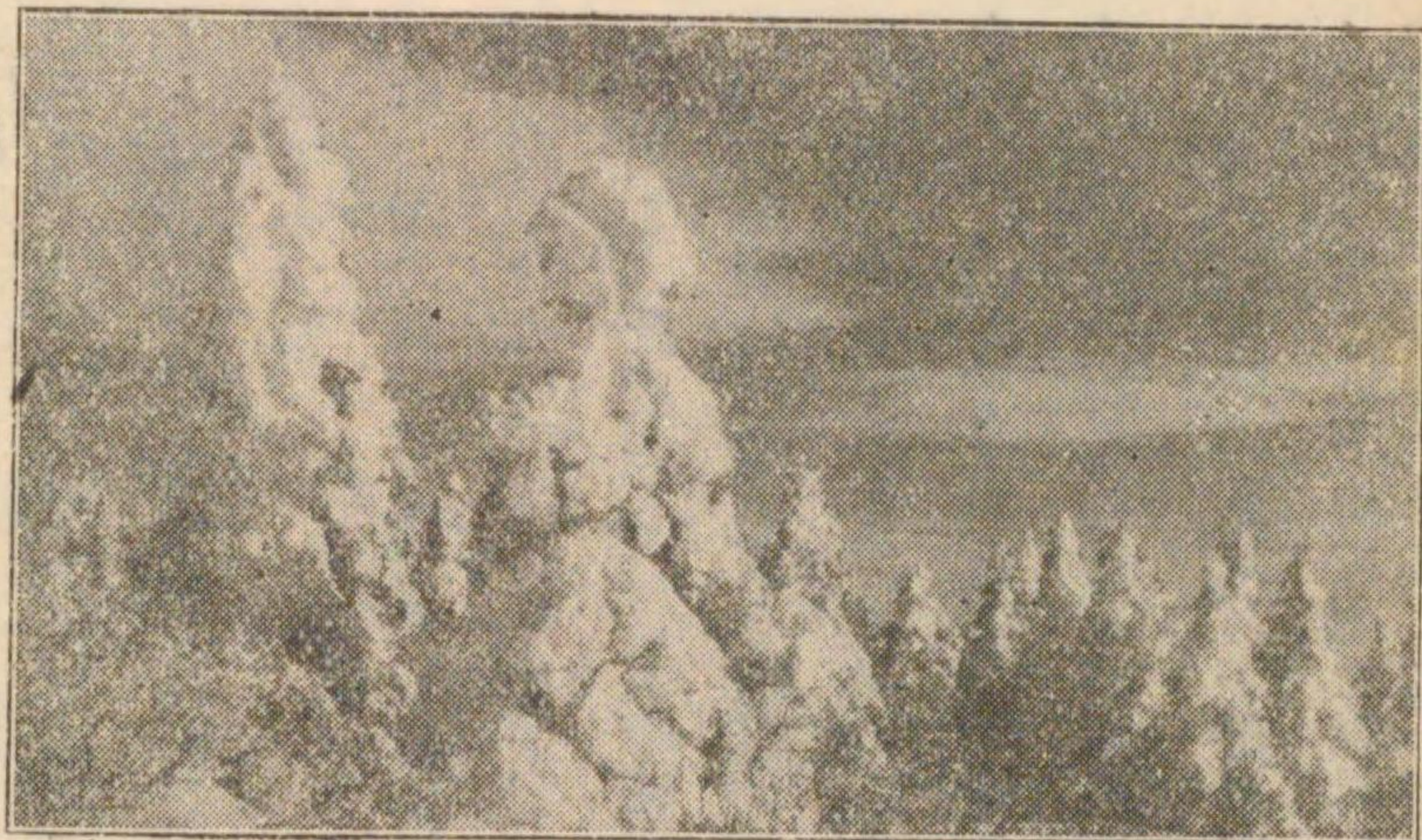
る。之が安達太良山の頂きである。

和尚山は益々大きくなつた非常な密林でスキ

ーには面白くなさそうである。一四〇〇m 防火

線の終た森の入口で十二時、立ながら食事をす

る。磐梯山の背後には那須岳より日光連山と昨夏遠征した燧岳、會津駒より平が岳中



の嶽魚沼駒等それと指摘される。之から白樺の森に入つて船明神山の肩にとつゝくの

だが、先づ小さな澤を渡ると今迄と違つた急な登りとなつたが雪質がよいのと白樺ナ

、カマドの森林は厚い樹氷となつて登高のかひある所を見せてくれるのでつい鼻歌も

飛出し、苦もなく百五十mを登り切ると唐檜白檜の森林となつて雪は厚く被さり、高

山氣分濃厚となる。尾根は此晴天にも裂風凄く寒氣凜冽である。唐檜の陰に風をさけ

て防寒具の全部を着て同時に食事をとる。總て冬山は少しの休憩時間も單純に過して

はいけない。ちつとして居れば手足は凍えて動かなくなり、凍傷にかゝる恐れがある

ので夏山の様にな々と延びて食事をするわけには行かない。五分でも十分でも休憩時

間があればきつと飯を食ふのが寒さにも負けないし又元氣も續くのである。

行手には船明神山の前山が丸く見えるが岩峰は隠れてゐる。

東の方對岸の尾根には安達太良山の岸峯が突兀として聳えてゐる。和尚山は今迄の豊

圓な形が變つて東北側は敲かれた様な急斜面を現はして居る。

一五五〇m以上は偃松乃至笹の類らしくその上を風に叩き付けられた凍た雪に被は

れて一本の喬木も見ない。

突然の人聲に驚かされてか兎が何疋も走り出し、其れを面白がつてホオイ〜とどら聲を張り上げるのは十一日の兎狩の練習でもあるまいが、随分と追つたものである。

一六〇〇m位の所から風をさけながら尾根の西側に出て又小さな尾根を巻くと前山との鞍部に出る。此處の風は強かつた、吹き飛ばされそうであつた。安達太良山には此處から東に走る尾根を行くのであるが已に一時四十分往復一時間半を見なければならぬので残念ながら之を他日に譲りて船明神山の頂上に向ふ事にする。船明神山の頂上に至る尾根は頗る急峻、風は強く凄き雪煙を上て居る。右側噴火口に望んだ絶壁に突き出た雪壁にはホースから噴き出される水の様に雪が噴て居る。

頂上の明神岩の岩塊はクリームの菓子のように雪に固められて何處に登り口を求めてよいか困難する處である。頂上が二時スキーを風よけにして僅かの岩陰に休憩する、各自のリックからは各種の御馳走が出て雪の岩山の征服を祝福するかの様である。

眺望は岩峯であるだけ何處迄も見える赤黒き地肌を現はして居る。吾妻富士と一切經山は高山の向ふから覗てゐる。尖つた鐵山の後に大きな頭を出して居るのは箕輪山

である。梵天森と相の峯は案外低く、相の峯の右の平の奥には暮の湯が見えた。

二時二十分出發、船形の大岩壁を巻かなければならない。先登は降路に苦心し後尾は隊員を勵まして降る、一六四〇三角點三時此處より仰ぎ見る安達太良山を中央に船明神の大岩壁より千仞の障壁を経て鐵山に至る噴火口の外壁は實に冬山の景觀の雄なるものであつた。之れを最後のフィルムに収めて障子ヶ岩の上に出たのが三時十分直下四百尺と稱せらるゝ障子ヶ岩は身に粟を生ずる物凄さで覗く事も出来なかつた。三時二十分アザランを外して愈々スピードの下りにかゝる雪は所々ラストして居るがよく滑る。降るに従つて灌木の密生に惱まされる。四時バラダイス上の夏道に出る蟻の戸渡り附近では暮色蒼然として來た。

元山道に入つたのが五時夕闇の迫る時十六日の明月は硫黄山の彼方に盆の様に現はれて行手を照してくれるが、山陰は眞暗だ、少時手探りの苦業の後沼尻のゲレンデに降りたのが六時であつた。此の經費一人當り十圓十八錢。(ふ・よ・士)

サア出掛けませう大勢で兎狩り

期 日 一月十一日(第二日曜)

集 合 八時三十分新宿驛淀橋口(小田急改札口)

發 車 九時三分登戸行

下 車 稲田登戸驛九時半

行 程 驛の近くなる榊形山遊園地に登る稲毛三郎重成の居城で快晴の日は品川の海も見える眺望の佳き丘陵である。此處から弘法松迄約三軒尾根の縦走路は去月七日日没に近づいたので割愛したコースで眼界の廣い點に於て東京附近に其類を見ない尙二軒小田急線路を横斷して行樂園に着き丹澤連山の上に浮び出した様な富士山を眺めながら御辨當を終へて愈々兎狩を開始する、丘から谷へかけて金網を張り巡らした林や藪の廣い所に約百頭の兎が放つてあるのを擒へるので白い家兎も交つて居ますから御子様方でも容易に捕れます大勢で追ひ出した方が獲物が多い譯ですから

榊形山
弘法松

小田急線
行樂園
丹澤連山
富士山

西生田驛
新宿驛

成るべく多數御参加を希望します、歸りは西生田驛乗車、五時頃新宿驛着解散、全行程約七軒

用 意 辨當及水筒必お携帯

天 候 雨天の時は二月一日

トテモ面白かつた兎狩り(紀行)

は な ぶ さ

鬼ヶ島征伐して來た桃太郎の様に、元氣よく歸つて來た太郎君の「御母さん只今の聲聞き付けて、出て來られた御母さん、

「どうだつたの、捕れたの」

太郎君「ほーら」と大威張りで兎を差し上げて見せる。

「マア生擒りしたの、それはえらかつたのねー、サア早く上つて御飯を御あがり。」

其夜の食卓は太郎君の手柄話で賑はつた。

「新宿驛へ行くと、もう大勢居てね、電車も一臺貸切りで、皆クラブの人許り、まるで學校の遠足の様な、多摩川を渡つて登戸で降りて、人數を調べて見ると、皆で六十人位で、それが會の旗を先頭にして、隊伍ゾロ／＼と進軍したの」

「ゾロ／＼はおかしいのね」。

「でもね、子供が大勢居るからゾロ／＼だつて誰か云つてたの、町の中を少し行つてから、山へ登つたの、昔御城のあつた頂上の處が、眞四角だから榊形山と云ふのですつて、そして誰の御城でしたかね、御父さん」

「稻毛三郎重成の居城サ。」

「ソウ／＼それだから、あの邊で、とれる梨を稻毛梨と云ふのですつて」

「ソウ私は幕張の近くの稻毛で出来るのかと思つたわ。」

「オレも實はソウ思つて居たのだが、今日一ツ利口になつたよ、あの邊から六郷邊迄領地だったので、梨ばかりではない、米も稻毛米と云つて澤山産出したのだ相だ。」

「重成は何時頃の人のです」

「北條時政の女婿で畠山重忠の従弟だ相だから鎌倉時代の人だな何でも此節で云ふ要

領の悪い人だつたので歴史家には悪人の様に傳へられて居るのだ相だ。」

「クラブの人は何でも、能く知つて居るのね、あれは學校で教つた事を覚えて居るの。」

「そればかりでは無い、行く先々の事を書物で調べるのサ、それだから旅行は善い空気を吸つたり、運動になつたりする計りで無く、歴史上の事も覚えられるので、一番有益なスポーツだから連れて行つてあげるのだ」

「それから丘續を行つたの、その邊は景色がとても善いの」

「全く善かつたよ、正面には大山から丹澤山が連つて」

「それがお萩に御砂糖をかけた様に所々雪が積つて居るの」

「そして眞白な富士山が頭を出して居るし遠くには箱根の連山も見えるし、東京の方面を見ると筑波山が微に見える、富士と筑波を一所に見たのは生れて始めてだ、東京の近くであんなに眺望の廣い所は珍らしいな」

「そう云ふ丘をすん／＼行つたの、途中の崖にはステッキ位の氷柱が下つて居るの、それを取つて戦争ゴッコをしながら、一里位行つて弘法大師御手植の松の處へ着いたの、それはとても大きな松よ。」

「全く大きいな、弘法大師なら一千年以上だからな、それに三本立ちになつて杖振りが善いから、まるで盆栽の様だネ。」



ト・レ・タ

「其處で御辨當を喰べて、寫眞を撮つて、そこから少し降つて小田急の線路の上の橋を渡つて細い道を行くと、もう行樂園の旗が見えたから皆で突貫して驅けて行つて、番人から網を借りて一番先に這入つたの、少し探したら直に白い兎が見付かつたの、モウ僕胸がドキ／＼した、ソウツト行つたけど、傍へ行つたらピョン／＼と逃げ出したから、追驅けたら何處かへ行つちやつた、其内に大勢這入つて来て、皆で追ひ出したの、アツチへ行つた、ソツチだと、ワーワー騒ぐものだから、兎がビックリしてピョン／＼飛び出して来るけれど、早くてとても捕れないの、其内にネ皆に追はれてまごついた

兎が僕のすぐ前に来たから、網をかぶせたら捕れたの、モウ僕うれしくて頭がポ／＼としちやつた、だけど、あばれるから怖くて、つかまらないで困つて居たら、御父さんが捕へて下さつたの、それから箱に入れて僕の名を書いて幹事さんに預けて、又捕りに行つたの。」

「捕る所は、どんな所なの。」

「バンフレットには五千坪と書いてあるが、一萬坪以上もあり相な廣い所をスツカリ三尺位の高さの金網が張り巡らした中に百匹計り兎が放してあるのを捕るのだから、時間さへかければキット捕れるのサ」

「中は草原なのですか。」

「イヤ大部分は藪で、杉や松も生えて居るし、高低があるからオレもヘト／＼になつたよ」

「あなたも追ひ廻しなすつたんですか」

「兎狩りなど小供の御供の積で行つたんだが、見て居る内に面白くなつて、やつたよ仕舞には大供の方が夢中さ」

「幾匹位捕れたんです」

「三十匹捕れたの、それに中々捕れない野兎が三匹も捕れてネ、其内一匹は、どつかの御姉さんが生擒つたの」

「エライ御嬢さんネ、そんな方今に大きくなつたら、猛獸狩にでも出掛けるわキツトでも捕れない方もあつたんでしよう」

「エーそれはね、澤山捕つた方が分けてあげたの、皆知らない人達だけでも、仲が善いの、それから得物を前に並べて、皆で寫眞を撮つてから、西生田驛へ来て、又貸切電車で歸つて來たの、僕トテモ面白かつたから又行き度いなあ、今度は御母さんも一緒にいらつしやいよ」

「デモ一里半も二里もは歩けないわ」

「イヤ兎狩り丈けなら西生田驛から十二三丁で、平坦な道だから譯は無いいよ」

「兎の耳はなぜ長いの」

「兎は角も牙も無い弱い動物だから、出来る丈け早く敵の襲來したのを知る爲めに、大きな耳が必要なのだ、又鼻も能く利くから臭氣で知つて逃げるのだ、雪國の兎は夏

は茶色だが、冬になると毛が抜け變つて、眞白になつて雪の上に居ると見分けが付かない様になる」

「それを保護色と云ふのでしよう」

「そうだ、又琉球には色が黒くて耳も小さい、猫の様な兎が居るのだ、あまみのくるうさぎ、と云つて奄美大島と徳之島丈けにしか居ない珍しい動物だから、天然記念物として大切に保護されて居るのもある。」

「御父さん中々學者なのネ。」

「さうさ關東旅行クラブの會員だもの。」

此經費一人當り一圓。

歴史の興味豊なる鎌倉巡り

期日 一月十八日(第三日曜)

集合 午前八時三十分東京驛

鎌倉 東身延寺 本覺寺 田代觀音 松葉ヶ谷 安國論寺 妙法寺 比企ヶ谷 妙本寺 葛西ヶ谷 勝長壽院 大藏山杉本寺 鶴ヶ岡八幡社 葛原岡神社 建長寺 圓覺寺

二月

二六

發車 八時五十二分横須賀行

下車 鎌倉驛九時四十六分

行程 平凡な鎌倉見物でなく靜かに史蹟を味ふと云ふ氣持ちで一日アルイて見たいと思ふ、先づ東身延の本覺寺に名工五郎正宗の墓を弔ひ、次で坂東三十三番の第三番田代觀音に詣で、轉じて松葉ヶ谷に至り日蓮が立正安國論を草したる草庵の遺跡安國論寺、妙法寺を経て、比企能員が悲劇の跡なる比企ヶ谷妙本寺に賽す。

日蓮辻說法跡より葛西ヶ谷に入り北條九代の最後たる高時腹切りやぐらを見、背後の小丘を越え大御堂ヶ谷に入り、在りし勝長壽院の昔を偲び、文覺上人邸跡より坂東順禮一番の札所たる大藏山杉本寺に詣す古色最も愛すべし、次で大塔宮御墓を拜し、吉田松陰の遺跡なる瑞泉寺に至る足利基氏の墓所あり、鎌倉宮、荏柄天神社を経て頼朝の墓に一掬の涙を注ぎ、鶴ヶ岡八幡より、日野俊基墓葛原岡神社に賽し、縁切り尼寺松岡東慶寺に至り建長寺圓覺寺を経て。

歸路 午後五時頃北鎌倉驛發

天候 雨天中止

用意 辨當持參

史蹟を味ふ鎌倉の旅(紀行)

天 楓 生

關東から東北方面にかけて史蹟を訪ねる旅と云へば先づ指を奥州の平泉と、相摸の鎌倉とに屈さなければなるまい。中にも鎌倉は武家政治創始の地として且つは前後百五十年間、天下政權の中心地點として、將に史蹟の雄たるものとするに異存はない筈である。

然るに、普通に人は、江の島鎌倉と一口に片付けて仕舞ひ、都人士の遊覽地と見做して居る、成る程江の島は風光の見るべきものもあるが、鎌倉に至つては別段勝れて好い景色と謂ふ處があるわけでもなく、史蹟を味ふと云ふ氣持ちで行くのでなければ何の興味も起るものではない、従て通常謂ふ處の鎌倉見物、即ち鶴ヶ岡八幡から大塔宮、長谷へ廻つて大佛と觀音を見て來た位では誠につまらない。つまらぬのみではな

一月

二七

く此地へ足を入れた甲斐が無いと云ふもの、寧ろ富嶽を望んだ江の島の旗亭あたりで一杯やつて居るのが、増しかも知れない。

然し、歴史に興味を有つて、七百年の昔を聯想しながら、ポツ／＼と史蹟を巡るなどは何とも云へぬ愉快なもので、路傍の一木一石と雖も、悉く感興の種ならざるはなく、將に之れ旅を好むものゝみの浸り得る法悦とでも云ふことが出来やう。一行十四名、春とは名のみ、風寒き鎌倉驛のプラットホームに下り立つて四邊の景觀を恣にする。驛はほゞ此地の中心に位して、迫り来る周圍の山々には直ぐ手が届きソトである。かうして見ると鎌倉と云ふ土地は如何にも狭い様に見えるが、事實其山の近くに行つて見ると山と山との間が深く入り込んで所謂「谷」を爲し居る、即ち「やつ」である。なんで此んな狭い土地に頼朝は幕府を開いたかと一度は疑問を起して見るが、見た割合に廣い土地で、此點甚だ豫想の外なのである。

先づ豫定に従つて東身延の本覺寺に詣す。日蓮上人を分骨せし處、第二世は日朝上人、眼病者の尊信深し、境内に名劍工五郎入道正宗の墓がある。次で坂東三十三所、第三番の田代觀音に向ふ、祇園山田代寺で、本來安養院の末寺であるが今安養院の建

物はない、安養院は二位尼政子の法名で其開基と云ふ、本堂の背後に政子の墓と稱するものがあるが之は墓所ではなく政子追善の供養塔と思はれる。次で松葉ヶ谷の安國論寺である。日蓮が始めて鎌倉へ出でゝの草庵の遺蹟で、妙法宣布最初の靈場とある。門内右側の岩窟が庵の跡で、立正安國論を草したのも此處であると云ふ。祖師堂の右手へ登れば日朗上人茶毘の跡草庵焼打の際日蓮が一時難を避けたと云ふ南面窟などがある。此北隣り約一丁にして、矢張り日蓮草庵の跡と云ふ妙法寺がある。歴史上の事實が安國論寺と混同されて居る様である。

ぼたもち寺は本稱常榮寺、日蓮龍の口法難の節、一老婆がぼたもちを贈りたる家の跡に一字を建立して寺としたものなりと傳ふ。次で比企ヶ谷の妙本寺に到る、元比企能員の邸趾なり、能員は頼朝の乳母の子、其妻は頼家を乳養し、其女若狭局（又讚岐局とも云ふ）は頼家の寵を得て長子一幡を生んだ、外戚の權に依つて比企氏の勢力は隆々たるものであつた、之れが北條氏の忌む處と爲つて、能員は北條時政の名越の亭で暗殺され、比企ヶ谷は北條氏が討手の火に滅びた、火中に飛び入つた幼子一幡の袖が僅かに残つて、今に哀れな袖塚が遊子の腸を絞つて居る。這個の悲劇は岡本綺堂氏

の「修禪寺物語」一編に巧に戯曲化されて居ることは諸君の夙に御承知のことと思ふ。一幡の弟公曉が「父の敵」と叫んで、伯父である三代將軍實朝を刺す鶴ヶ岡八幡石段下の活劇は此の大詰的一幕である。若狹局が兵火に迫られて池に身を投じ、怨靈が大蛇となつて北條氏に様々のたゞりを爲したのを日蓮の法力に依つて之を封じたと傳へらるゝ蛇苦止明神など悲劇の跡、妙本寺の興味はそれからそれへと容易につきないので程々で切り上げる。尙妙本寺は日蓮の俗弟子にして能員の末子である比企大學三郎能本の開基、開山は日蓮の高弟日朗上人である。

日蓮辻説法の跡、鍋被り日親上人修業の地妙隆寺等を経て、葛西ヶ谷に入り東勝寺跡、高時腹切りやぐらを見る。時は元弘三年五月廿二日、新田義貞を盟主とする勤王の義軍、稻村ヶ崎より府内をさして攻め入る、化粧坂の中軍、山ノ手小坂村よりの左翼軍一時にどつとなだれ込む、と講談張りに面白い處であるが、高時の運命も窮つて菩提所東勝寺に入り一族主従八百七十餘人、悉く枕を並べて壯烈な最後を遂げた處である。今は東勝寺跡など見る由もなく、實業家磯村豊太郎氏別邸となつて平和なピアノの音などが洩れ聞こえて来る。

背後の小丘を越ゆれば勝長壽院跡で、頼朝が父義朝菩提の爲め建立の大伽藍、南御堂又は大御堂とも稱されたものであるが兵火の爲に今は何の跡方もなく尙史實に徴して此地に義朝の墓、實朝の墓、政子の墓などあるべき筈であるが全く何の據り處もない、鎌倉としては最も歴史家の研究調査を必要とされて居る個所の一つである。次で文覺上人邸趾、坂東一番の札所大藏山杉本寺、大塔宮御墓所等を拜し吉田松陰の遺蹟なる錦屏山瑞泉寺に賽す、寺は關東十刹の第二開山は夢想國師、足利基氏の開基である。更に鎌倉宮、荏柄天神社を経て頼朝の墓、大江廣元島津忠久の墓に詣で、鶴ヶ岡八幡、葛原岡神社、南朝の忠臣日野朝臣俊基の墓、縁切り尼寺として聞こえし松岡東慶寺等に賽し午後五時三十分北鎌倉驛より乗車歸路に着く。此經費一人當り一圓七十錢。

常春の熱海温泉から椿の亂れ咲く初島へ

期日 一月二十五日(第四日曜)

集合 午前八時東京驛

二月

三一

發車 八時十五分熱海行(急行)

下車 午前十時熱海驛

行程 一行が熱海驛に下車すればもう海岸に

は同地在住會員野田倭男氏の斡旋で特別仕立

のモーター船がお茶や辨當を用意して我等の

乗船を待つて居る。直に麗かな陽光に恵まれ

ながら静かな相摸灣を滑る事約五十分で海上

三里の沖の孤島、椿の亂れ咲く初島へ到着す

る。船着場に走り出る島の乙女の特異な風俗

石疊の道、珍奇な家並など殷賑な温泉町を見

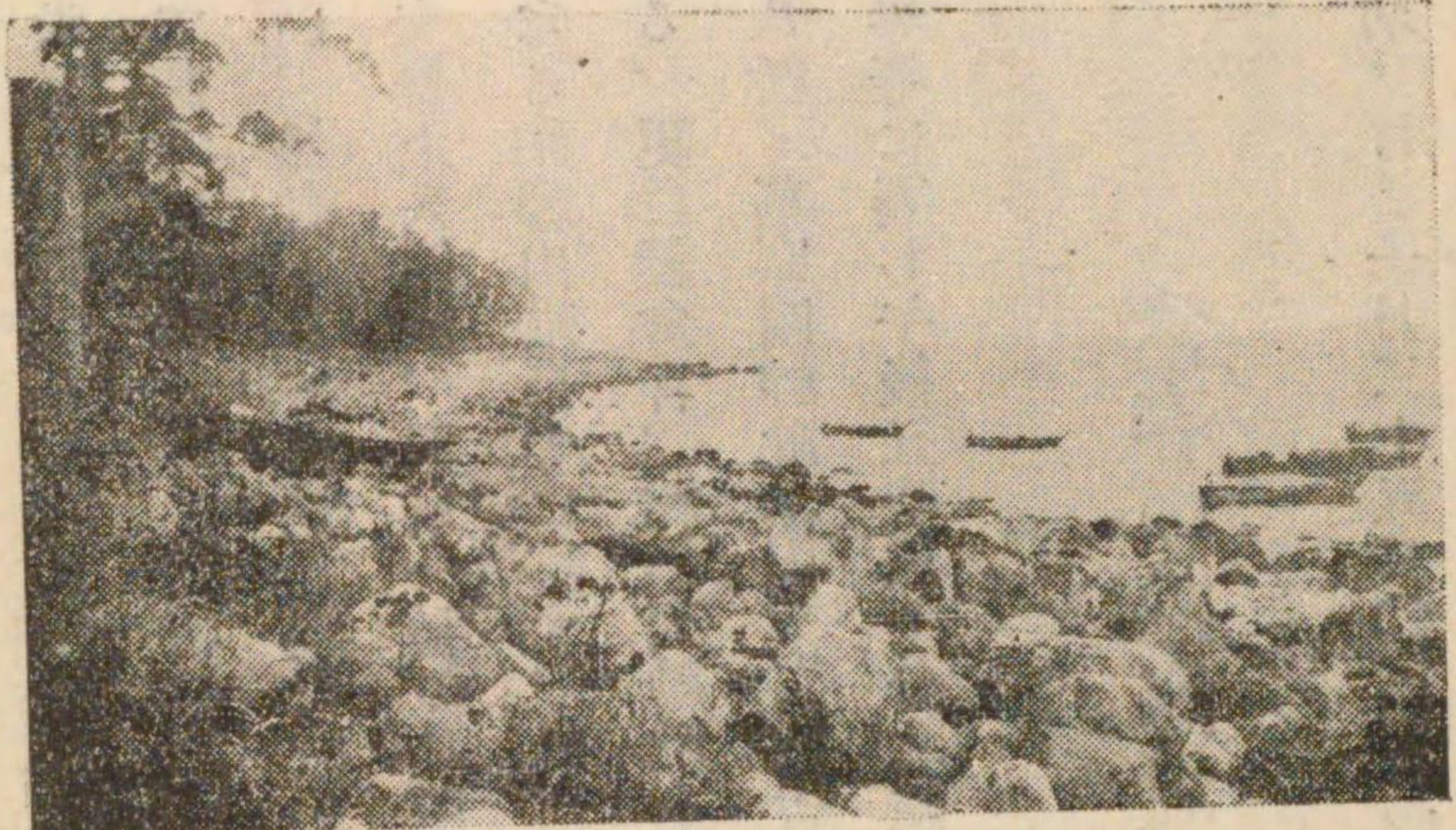
て來たばかりの目には總てが驚異であらう。

原始的で南國情調濃かなる島内に四十三家族

の共同自治の生活状態は是非共一訪の價値が

ある、殊に此の季節には到る處野生の水仙や文珠蘭の叢生が素敵に美しい。此の別

熱海
相摸灣
初島



黄紅の花咲く初島

ある、殊に此の季節には到る處野生の水仙や文珠蘭の叢生が素敵に美しい。此の別

天地に數時間遊んでから再び熱海へ引返し、或は暗香浮動する梅園へ杖を曳くもよ

く又た出で湯の里の漫步も面白からう、其の間隨時玉の井旅館に入り休憩一浴して

旅塵を流し夕刻の汽車で歸京する。

天候 雨天中止

初島一瞥の記

悠々生

熱海線が電化してから熱海温泉の繁盛は素晴らしいものである。東京から二時間内外

で行かれるのだから週末の一泊旅行によく休日の日歸りにも誂向である。なまじ市内

で宴會をするより奮發して熱海でやらうなど、延長する空氣が濃くなつて來た。時々

地震があつて驚かされるが大した恐れもないといふ見込もついたので續々と押しかけ

て行く、休日にはどの列車も大抵は満員の盛況だ。熱海温泉も恵まれたりと言ふべし

である。旅館業者並に町の人々は此の天與の恩恵に感謝して遊覧客に對する設備を注

意し大いに勉強して時代に適應する營業方策を講ずべしである。さすれば熱海の將來は洋々たるものがあらう。斯く熱海は便利になり繁盛して居るから多くの人は何れも一葦帯水の彼方に築山のように見える一孤島のあるを見逃さないであらう。それが初島と稱ふことも既に承知の人が多い。然し多數の浴客の中の何%が初島を見て居るであらうか。如何に海を渡つて行くのを億劫にして居るかを察せられる。殊に夏季には定期の遊覧船も出るが冬季には出ないから、團體で行くのが最も便利であり凡てに都合がよい。

午前十時に熱海驛に下りた我がクラブの一行二十餘名は當地在住の會員野田君經營の旅館から案内されて直ぐ海岸に出で、廻航して來たモーター船に乗込んだ。薄曇りの空は日が顯はれて暖かに何となく和かな気分となる。此の間絶えず戸田君は右往左往して一行の動靜を十六ミリのヒルムに収めて居た。

初島は僅か三里の海上であり指呼の間に見えるのであるが船出してから少しく風も出て波も立つたので一時間餘で漸く初島の岸に着くことが出來た。大きい丸石の配列をよくしてある船着場には數艘の漁船が繋いであつた。



松の茂つた森を左に見て網の乾してある間を通つて、崖地を上ると一面の畑地で麥が青々して居た。船頭の話しによれば畑地十六町歩山林十六町歩あるといふ。而して四十三戸の家族が共同自治の生活をして居るといふ事である。丸石が豊富に有る處と見えて畑の畦道にも敷いてある。麥畑の向ふの凹地に一廓をなして四十三戸あるといふ家が密集して居る。家屋の保護上風の害を避ける爲に斯く凹地を選び、集つて建てたものであらう。その家の間の狭い道路にも皆丸石で舗装されて居り整つては居る。畑地に點々とある建物は何れも農産物などの收納小屋であるといふ。

其の集團して居る家屋の間をこつくと歩みながら、見るともなしに居住して居る人達を見るに青壯年の人々を見受けないのは働き盛りのものは漁業に出て居るのであらう。保護の良く行届かないで、青澁をたらし子供や眼のクシャクシャした子などが物珍しさうに馳け出して來るのも、田舎を旅行して度々ある事だが、此處でも同じかと或一種の哀愁を覺えた。自分は大いに考へざるを得ない事だと思つた。私は今日の初島見物を餘りに「センチメンタリズム」にして居たことだ。原始的な共產村——其處に人生の福祉があるとのみ思つてはならない。武陵桃源を夢みるにも程がある。

此の民俗質朴にして太古の風ありと傳へらるゝ孤島にも嚴肅な人生があるのだ。生存



初島海岸の一行

兒童教育の施設は、等々——人類生活に必要な組織の一端を知りたくもなつた。

の競争もあるのだといふ叫びが何處からともなく聞える。仰げば椿の緑葉の間から紅の花は艶に、満開の梅花は芳香を放つて居る。樹下には文珠蘭が茂り、崖地には水仙の叢生して居るなど美しい。眞に南國情緒が偲ばれる。自ら感傷的な感慨が浮ばなくもないが、此子供等の風彩を見、家並の自ら異なる各種各様なのを見ては深い觀察を加へたくもなる。共產村とは聞いては居るが——富の程度の平均など如何様に配分するのであらうか。自給自足の物資があらうとも思へない。住民諸君は慰安を何によつて得て居るか、宗教は如何、信仰は、衛生の設備は、

初島隨一の寺院たる東明寺を訪ふも堂守一人居らず廢堂に近く、前庭の蘇鐵のみ千餘年の齡を重ねて自由に生長して居るだけで、其の周圍にある苔むした多くの墓石には——故人を顧みる暇なしとも言ふように手向の花だに供へてない。益々以て哀愁を深うした。有名な共產村初島の一瞥感には一種の謎である。

一行の大半は何時かお初茶屋といふ海岸の小屋に入つて休んで居た。此處が初島に一つ丈けある茶店で村の共有である。勿論何の設備もなく番茶を出してくれるのとエハガキがある位のものである。既に晝時になつたので玉の井旅館から用意して來た辨當を開きながら異つた島の風物を語り合ふ。食後海岸に出れば若手揃ひのクラブ撮影班は記念の寫眞を取つて呉れた。折しも風が出て寒くなつて來た。岸打つ浪は高らかに潮音を立て、居る。

初木神社に詣で漁場らしい種々の供物も珍しく見て、社殿の裏にある大松の廣く枝を張つて居るのも雄大な眺めであつた。更に路傍の椿の花を賞し、日向の地にスミレの咲いて居るのを見ても暖かさを感じる。——フト畑地に麥の中耕をして居る老人を見た。黙々として不平なく勤勉に鋤を打ち込んで居る。彼方には中年の婦人が同じ

労働に營々として居るのを見る。向ふから薪木を背負ひ來る少年少女の群れもある。何れも潔く運命に服従して、専念に働く態度は——一種の祈りの表現のようにも見えて尊かつた。彼れ此れ暫し佇んで居る内に一行の諸君は見えなくなつた。急いで元の道に歸れば既に諸君はボートに乗り移つて居る。少しの處で危く俊寛になる處であつた。午後三時頃錦浦の風光を海上から眺めながら船は熱海に着いた。船の中が寒かつたので誰れしも早く温泉に入りたいと玉の井旅館へと急ぐ。日曜日ではあり各室満員でお馴染の客すら斷つて居る状態であつたが、其處は當クラブは特別親善である。外套の襟を立てた異様な一行二十餘名が堂々たる表玄関に現はれると、番頭君とは既に顔馴染の會員もあり微笑を以て慇懃に案内される。早速明るい大きな風呂へと飛込んだ時の心地よさ何といふ快さだらう。クラブ會員たる館主からは澤山の蜜柑などを寄贈された。終日の疲れは一扫され船の寒さも洗ひ去られたので之れからは豫定通り今を盛りと満開の梅園へ漫步にと熱海の春を味ふ者、更に一夕の歡談をといふ者など、旅の樂みは中々盡きないが惜しいかな自分は夕刻に已むない約束があるので、一足先きに出發して獨り午後四時十分の準急行で歸つた。此經費一人當り五圓七十六錢。

迎年賦

梨 萃 生

乾坤一轉して、斗柄未を指し茲に昭和六年辛未の歲來る。旺なる哉。吾等は椒酒三獻、先づ以て竹の園生の彌榮えを壽き奉り、國運の進展隆々として窮りなきを祝し、諸君の幸福を祈つて乾盃するものである。

顧みれば、客歲、菊花薫する十月呱呱の聲を揚げたる我が關東旅行クラブは、其純朴の風を悦ばれ、旬日を出ずして、趣味を同じうする人士、二百餘名の賛同を得、其後期せずして相倚り相集る人士無慮三百と註せらるゝに至る。毎回の旅程亦凡庸を蟬脱して、會員歡喜の標的たるやの觀がある。

歲茲に革るに際し、誰か感激なくして之に對することが出來よう。吾等不敏と雖も、年と俱に一意之に應ずるべく、趣味道に精進し、敢て悖らざらむことを期するものである。

吾等は濫りに聲を大にして、虚吼、之れ事とせず、旅行地の如きも、距離の遠近を

問はず、折々の集會も亦専ら簡素を旨とし、本格的に、旅行道本來の目的に向つて邁進を續け、以て有終の美を濟さむとするものである。

改曆にあたりて、感慨の禁する能はざるものあり、油然として希望の湧くを覺ゆるものがあるので、聊か卷頭に記して迎年の箴となす。

辛未御題

社頭雪

扁舟子

^{六下り}ふりさけ見れば、はたとせあまり、ひつじうまれの、年よわなれど、春知りそめし其頭よりも、こがれくし、かの殿御とよ、縁をむすぶの出雲のかみに、採りあげられてはづかし、^{三下り}ねやの障子に、洩るおもかげの、やがてうき名と、ならうとまよよ、つもるおもひを、けふはつ日の出、御禮まるりの、このあかつきを、にくやみそらに、六つの花。

常春の國房州めぐり漫詩

悠々生

(一)

元日から雪が降る、
東京は寒い、寒い、
常春の國、房州へ、
餅を、かみかみ行けば、
暖かい、暖かい、
洲ノ崎燈臺の下で、
大きい、大きいまん丸い、
赤い夕陽を眺めた、
海の水は光つてる、

東の空には、月が出た、
畑には菜の花咲いてゐる、
房州は常春だ、

(二)

好く晴れた、朝だ、
春のやうに、暖かい、
パツカードの車は、
移動の室だ、
窓から見える、山に畑に、
暖かい陽は、照つて居る、
布良から、野崎、
白濱のあたり、
日受けの畑には、
蠶豆の花も、豌豆の花も、

麗しく咲いてゐる、
菜の花、黄色に、
キンセン花、赤く、
見渡す限り、
花壇のやうだ、
冬の時期とは思へない、
常春の國は、房州だ、

(三)

野島ヶ崎の燈臺に、
風が強く、當つてる、
太平洋の黒潮は、
岸を洗つて、碎けてる、
漁夫は乾魚を作つてる、
日輪輝く、大空を、

高く仰いで、
大きく、呼吸をした、
心も、身體も軽くなる、
冬知らぬ房州は、
吾等の理想郷だ、

(四)

小湊の海、水清きところ、
鯛は踊つて、御代を壽ぐ、
英僧日蓮、生れた靈地、
萬古に轟く、聖者の行は、
年經て、尊く新しい、
清澄の大杉、天に聳え、
枝葉繁りて、大地を掩ふ、
此れ亦、天下の大偉觀

野山に花咲き、樹茂り、
海には、鮮鱗の群れ集ふ、
明るい、房州は、
幸多き、常春の國、

羊の辯

梨 萃 生

◎未の歳が来た、何にか未——羊と旅に關聯した話でもして、長閑な昭代の春を迎へやうではないか。

◎群馬縣——未の年に午の地名が出るのも妙だが——多野郡に、諸君先刻お承知の、上野三古碑がある。

◎その内の一ツ、多胡の碑は、下野の那須國造の碑、伊豫の道後温泉の碑など、共に本邦に於ける有數の古碑で、今より約千二百年程以前のものだ。

◎碑文の書體古雅、筆力雄勁で好古家の垂涎措かざるものであるが、その碑文中に『給羊』の二字があり、古來史家の間に難解とされてゐるものである。

◎で土地の者は、此の碑を『羊様』又は『羊大明神』などと呼んでゐる、今年は一ツ行つて見やうではないか。

◎本邦で羊を澤山飼つてゐる所は、手近では三里塚の帝室牧場、陸軍の小岩井牧場、北海道の札幌市外の眞駒内牧場などである。

◎往年小岩井牧場で、驥北の野では大牢の美味と讃えらるゝ羊羹をお馳走に預つたことがあつたが、その味は、味の素の味とことかはり、今でも舌端にその滋味を覺ゆる様な氣がする。

◎羊羹と云つても藤村で賣るお菓子羊羹ぢやあないよ、羊のアツモノだよ。誰だいなその後ナマスを吹たかなんて云ふのは。

◎兎に角く、ネットリとして何んとも云へない味さ。

兔狩行雜詠二十首

悠々生

稀れに有る零下六度の寒天に

新宿驛へと子供連れ行く、

半田氏は眞先來り早や既に

切符求めて願ち居られり、

連結の特別車内ゆつたりと

子等も混りて勇み出で立つ、

登戸に下りて數歩の臺地此處

榊形と言ひ眺め展しも、

其の昔稻毛三郎在りと言ふ

墳墓の地には松聳え立つ、

縦松の繁れる林深く見ゆ

冬の日照りて鳥も聲なし、

霜柱五寸も立てる野中道

ざく／＼と踏み音たてて行く、

子供等の喜び歩む厓地ぎわ

氷柱など取り戯れ行くも、

山あひの段だら畑麥生ひて

かすりもやうと眺め居るあり、

幾起伏丘又丘を越え行きて

眼放てば富士は眞白し、

紙片撒きて道しるべなす半田氏の

案内振りの用意宜しも、

弘法の植えたりといふ大松は

天には聳え地には枝張る、

大松の下の日受けの芝生地に

冷えたる辨當うまく喰へり、

富士見ゆる雑木林の根のもとに

白兔居り野兔も馳せ居る、

残雪のまだらまだらにある藪に

兔餌を食みかゞまり居れり、

網持ちて追ひ出したる兔をば

捕へおさへて手柄顔する、

此處彼處兔追ふ人賑々し

兔狩なす子等は勇まし、

一兔を得更に一兔を捕へたり

二兔も順次に捕れば取れるを、

おのがじゞ獲物を持ちて元氣よく

野道を歸る喜びに満ち、

疲るゝも五十餘人の一行と

共に歩めば心ゆたけし、

稻毛三郎の菩提寺

峯

几

古寺に参者も見えず氷柱哉
雪の富士弘法松の高き哉
弘法松へ尾根をつたうや霜の華
カラくゝと崖にくづるゝ霜柱

兎狩

峯

几

耳をさげて喜び顔や崖の雪

【二月之部】

王子製紙十條工場と鐵道記念館の見學

期日 二月八日(第二日曜)

集合 午前九時迄省線池袋驛本屋口(市内側)

出發 午前九時十分頃

下車 十條驛午前九時十六分頃

行程 當日の催は研究心に富まれる快活な坊ちゃん嬢ちゃんの校外練習を兼ねて仕
組まれましたのですが大人方にも勿論十分見學される價值あるのみならず一面輕
いピクニックとして興味少からぬ旅路であります。

さて驛に着けば直ぐ程近い王子製紙十條工場を訪れることに致します。同工場は大
正五年印刷局から同社が引繼いだもので現在では六臺の製紙機が運轉され殊に昨

池袋驛

十條驛

年新設の英國オームスレー長綱式製紙機は幅一六八吋で我國最大の機械でありま
す。製産高一日二十五萬封度の主製品は上等紙に屬する葉書用紙婦人雜誌類用紙や
模造畫用紙で努めて人力を省き機械力の利用に最新科學の粹を集めたのが特徴とさ
れ模範工場との世評です。製紙工程の見學を終へたら大宮迄足を伸ばし靜寂な氷川
公園で悠つくり遊びませう。夫れから官設の鐵道記念館を參觀して見聞を弘めた後
三時頃解散の豫定。

用意 辨當

天候 小雨決行(荒天の際中止)

氷川公園

王子製紙十條工場と

鐵道參考品陳列所とを觀る

イーグル生

紙が吾人の日常生活上缺く可らざる必需品である事は今更喋々の辯を要さない。而

も製紙事業の發達が印刷術の進歩と相俟て世界文化の進展に寄與したる功績は偉大な
るものであらう。従て紙が如何にして作られるか其製作工程を一見する事は、吾人の
常識を養ふ上に於ても有益なる事であらう。と云つた様な理窟は抜にしても紙には縁
のある羊歳に因んで、製紙工場の見學もよからうと云ふので幸ひ會員佐々木啓次氏の
斡旋で我國製紙工業界の權威たる王子製紙會社の十條工場を觀る事とした。

立春とは曆の上だけで寒威頗る凜烈だが天氣は上々の二月八日の朝、池袋の驛頭に
は半田氏が着到を附けて居る。數名の坊ちやん嬢さんを加へて一行三十三名、此寒空
に而も時間も早いのに好く集まつたなと誰やらが云つて居た。省線電車を十條驛で下
車し東北本線の線路を越えて數町にして王子製紙會社の十條工場に着いた。元印刷局
の抄紙部であつたのを大正五年會社で引受けたものであると云ふ。

一行は事務所階上の廣間にて同社員野口龜吉氏から工場の作業順覽の前、先づ製紙
の工程に就て概念を得る爲に圖解に依て説明を承る事とした。以下は其受賣である。

若し間違つた點があればそれは豫備知識の乏しい筆者が記憶の誤りとして御用捨を願つて置く。

冬期積雪を利用して森林から伐出された原木(エゾ松トド松の類)は柚に依つて樹皮を剥がれて工場に運搬され、先づ二三尺位の長さに切斷の上割られて碎木機に掛けられる。それより製紙の用途に依つて原料たるパルプ製造の工程が二様に分れる。新聞紙の如き比較的耐久性を要せざるものは主として機械的操作に依るグラウンドパルプとなり稍高級なる印刷用紙の原料としては蒸解室にて化學的操作を施されてサルファイトパルプとなる。最後に壓搾して薄き板版となして製紙工場へ送られる。

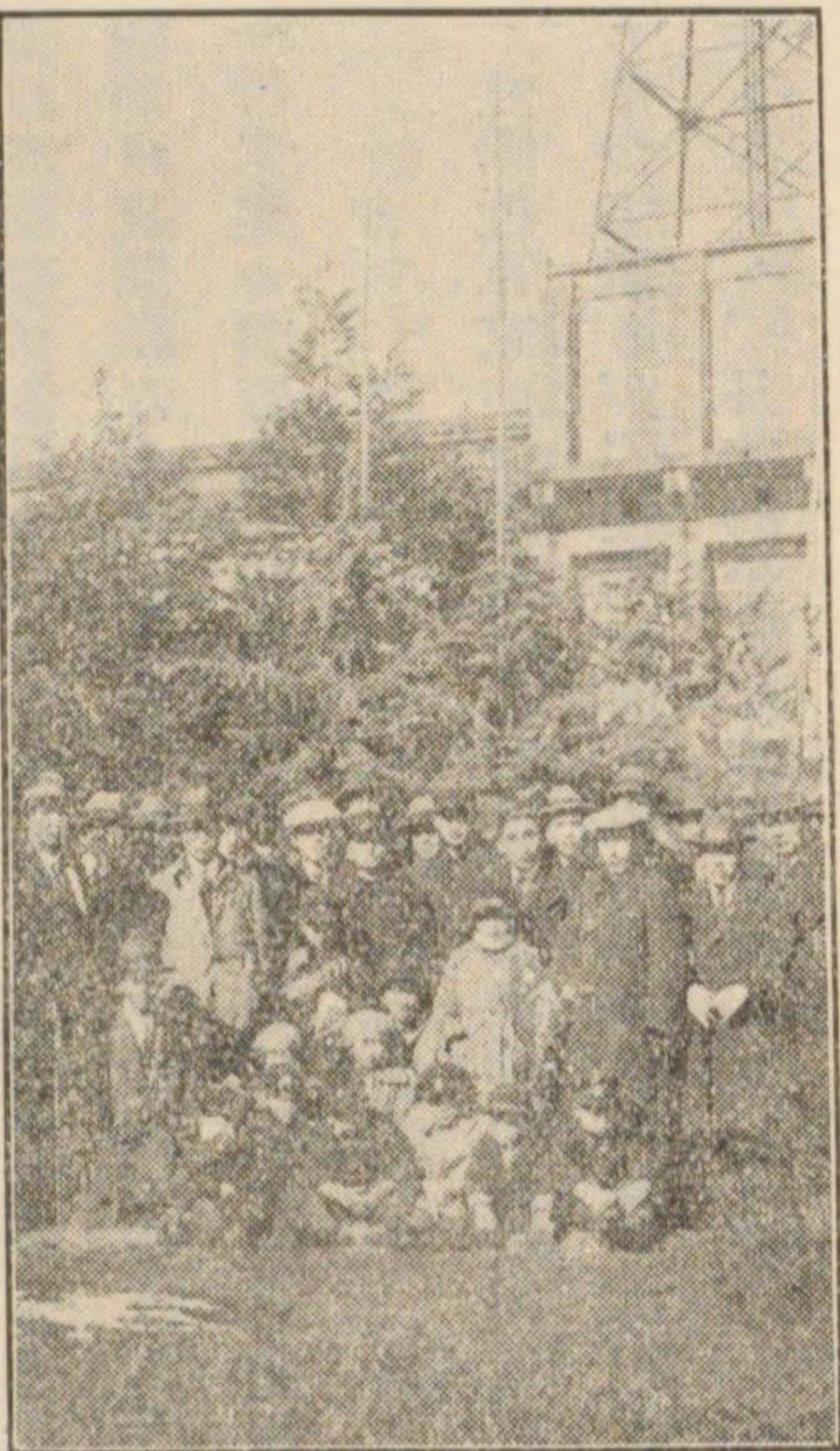
◇

抄紙工程は原料パルプを蒸煮して白土及松脂と混じて薄き溶液となし、併列せる數個のロールの間をエンドレスに回轉せる極めて細かき目の金網の上に流され、水分を除去されつゝ順次に乾燥ロールの間を通過し、最後に仕上艶出しロールを経て巻取紙となる。上記パルプの溶液に白土を混ずるのは紙質を不透明にする爲、又松脂はインクの滲みを防ぐ爲であると云ふ。尙パルプ原料には藁及び木綿ボロなども使用するが

製造工程は木材パルプと同じであると云ふ。

◇

以上の説明に依り製紙に就ての大體の豫備知識を得たる上導かれて工場の參觀にかゝる。製紙作業は豊富なる水の供給を必要とする爲め工場は河水の利用可能なる位置



工場を巡覽する時

に選定される。十條工場は荒川の水を引いて沈澄池に導き濾過してタンクに送り作業場に供給して居る。製品採算上の關係から材料パルプと混用する爲に木綿ボロからパル

プを作つて居る其作業から見る。木綿ボロ處理の工場は塵埃濛々異臭紛々たる中で多くの工人が働いて居る。急いで茲を通過して順次に説明を聞きつゝ作業工程を見る。パルプの溶液が併列せる幾多のロールを通過しつゝ最後の仕上艶出ロールを経て卷

取紙として完成するまで總てが自動的機構の連續作業で見ると間に紙が作られて行く、一方其巻取紙をナイフを一定の間隔に取付けたる廻轉装置に依り、菊版又は四六版の大きさに切斷して荷造場に送られる。現在十條工場に運轉せる抄紙機は四臺あり、内一臺は英國製最新式のもので優越せる能力を有すると云ふ。此工場だけでも四臺の抄紙機が日夜間斷なく連續運轉して生産する紙の量は莫大なるものであらう。參觀を了り一行工場の前庭にて記念撮影の後辭して王子驛に向ふ。

◇ 此附近東京の近郊發展の御多分に洩れず商店櫛比、電車通じ自動車走る股賑の街衢となつて居るが、往年一面の田圃であつた當時の記憶を思ひ浮べると全く隔世の感があるなど、月並的平凡な感想を語り合つゝ、聽て大宮に下車して公園に至り氷川神社に參拜する。流石に武藏の一の宮だけあつて境内神寂て自ら森嚴の氣が満て居る。それより園内松林の裡の一茶亭にて行厨を開く、冬枯れの大宮公園は寂寥々たるもので寒風に曝されつゝ歩き廻る物好は我等一行の外には見受けられなかつた。

◇ それより歩を轉じて中仙道の街路を横ぎり、鐵道省大宮工場の一角にある鐵道參考品陳列所を見る。丸の内にある鐵道博物館よりは遙に小規模のものであるが、鐵道に關する各種の装置や車體の構造及其改良進歩の跡を分解的に示したるもの或は各種の模型等が陳列せられ、而も其装置や模型は觀覽者が自由にボタンを押すと電動装置に依つて、運轉の狀況を實驗出來る様になつて居るのは珍らしい。就中信越線碓氷峠のアプト式線路に運轉せる電氣機關車の模型は車内兩様のモーターが各別の廻轉に依つてアプト式特殊の運轉狀態が、其機構と共に好く了解出來るのは一寸面白い。百聞一見に如かず鐵道に關する一般的知識を與へるに頗る有益なる施設であるが、此陳列所の所在が廣く知られて居ないのは遺憾である。特に我等の興味を引いたのは明治の初年我國最初の鐵道が東京横濱間に開通した當時使用したる英國製機關車が、會て九州の島原鐵道會社へ拂下げられ最近迄使用されて居たが、記念品として保存の爲め再び鐵道省に戻り、茲に陳列せられて居るが流石に堅實を誇る英國製だけあつて約六十年間の連續使用に堪へたもので、我國鐵道史上歴史的の好記念物である。是で今日の見學を豫定通り了り有益なる一日を過して午後四時頃家路に就いた。此經費一人當り

四十五錢。

鎌倉背山を縦走して金澤の史蹟を見る

期日 二月十一日(紀元節)

東京驛

集合 午前八時東京驛

大船驛

發車 八時二十五分下關行

粟船山常樂寺

下車 大船驛九時十七分

小坂村

行程 粟船山常樂寺に詣す、北條九代第一の民政家たる北條泰時の開基にして寺背に其墳墓あり、之より小坂村の山道に入り今泉の不動に賽す。山間幽邃の地にして

今泉の不動

觀月臺、陰陽の瀧など見るに足る、更に寺背の小徑を登ること二軒にして鎌倉天園

六國峠

見晴臺に到る、六國峠の稱あり眺望絶佳なり、之を下りて大藏觀音前に出で金澤街

朝比奈切通

道を朝比奈切通しに進む。

淨妙寺

沿道の史蹟としては鎌倉五山の第五淨妙寺、尊氏の父足利貞氏の墓、青砥藤綱邸址

光觸寺

梶原太刀洗水

稱名寺
金澤文庫

足利公方邸址、梶原邸址及五大堂、光觸寺頼焼阿彌陀、鹽管地藏、熊野十二所神社

鎌倉五名水の一たる梶原太刀洗水等を経て朝比奈切通しを越ゆる蜿蜒二軒に渉る峠

道にして涼々たる溪流に沿ふて進む風情ある小徑である。朝比奈三郎が一朝にして

切抜きたる峠なりと傳ふ、斯くて金澤に出で稱名寺金澤文庫を見て湘南電鐵金澤文

庫驛より乗車。

解散 黄金町驛下車解散

天候 雨天中止

用意 辨當、水筒

鎌倉の背山を縦走して金澤へ

コ・リ 生

『イーネ、入口の松並木に雪の積つた工合、山門の扁額、佛堂と虚空藏堂の作り、わづかに残る無熱池など、ドウ見ても昔榮えた寺が時代の推移と俱に衰へたと云つたか

たちが明に感じられる。』

「それに約七百年も経つたと云ふこの公孫樹もイーネ、大蛇がこの樹を七巻も巻いてそして其尾で無熱池を叩いたのでタ、キ池と云ふといふ傳説などもクラシカルぢやあな
いか。』

クラブの一行が大船驛で下車して約一軒白皚々たる雪を踏み小坂村離山の栗船山常
樂寺を訪ふて、先づかうした會話がお互の間に交はされた。

寺背に肅々然として立つてゐる北條泰時の墓に詣でる。

此寺は北條九代中第一の民政家たる泰時の建立で、その法號常樂院を以て寺號とし
たといふことだ。

『此邊一帶は、鎌倉時代には海で字を粟船といった、當寺の山號もそれから來てゐる。
後轉訛してオホフナになつたのだ。』と宮城鎌倉子は説明した。更に雪を踏んで約三軒
今泉の不動様で通つてゐる今泉山稱名寺に着く。稱名寺は淨土宗で、谷の窮まる様な
所に靜に建つてゐた。山腹には亭などがあつて、觀月臺と稱してゐる。陰陽の瀧と稱
する小飛瀑なども懸り、精神病者を收容してゐる病棟もある。小憩後、寺背の丘陵を

雪を踏んで進んだ。全く足跡が絶てゐる。面白い兎の足跡などを見つけてはその習性
などを話しながら行くと、果然、展望のよい地點に出た。雪に耀く丹澤山塊、津久井
の山々などを前衛とした巍然たる芙蓉峯を望んだ時は誰もが云ひ合した様に讚美の聲
を放つた。雪に埋れた森林などを通過して鎌倉天園に着く。

六國峠の稱がある見晴臺の展望は實によい。脚下に久良岐丘陵の巒が蹲つてその盡
る所に金澤から追濱の飛行場、陸地の様な航空母艦、その先きには東京灣を隔て、遙
に房總の山々が見えた。鎌倉の市街は雪に埋れて全く一面の野の如く、稻村ヶ崎の崖
を囓む波が、白く雪の様に光つてゐる。

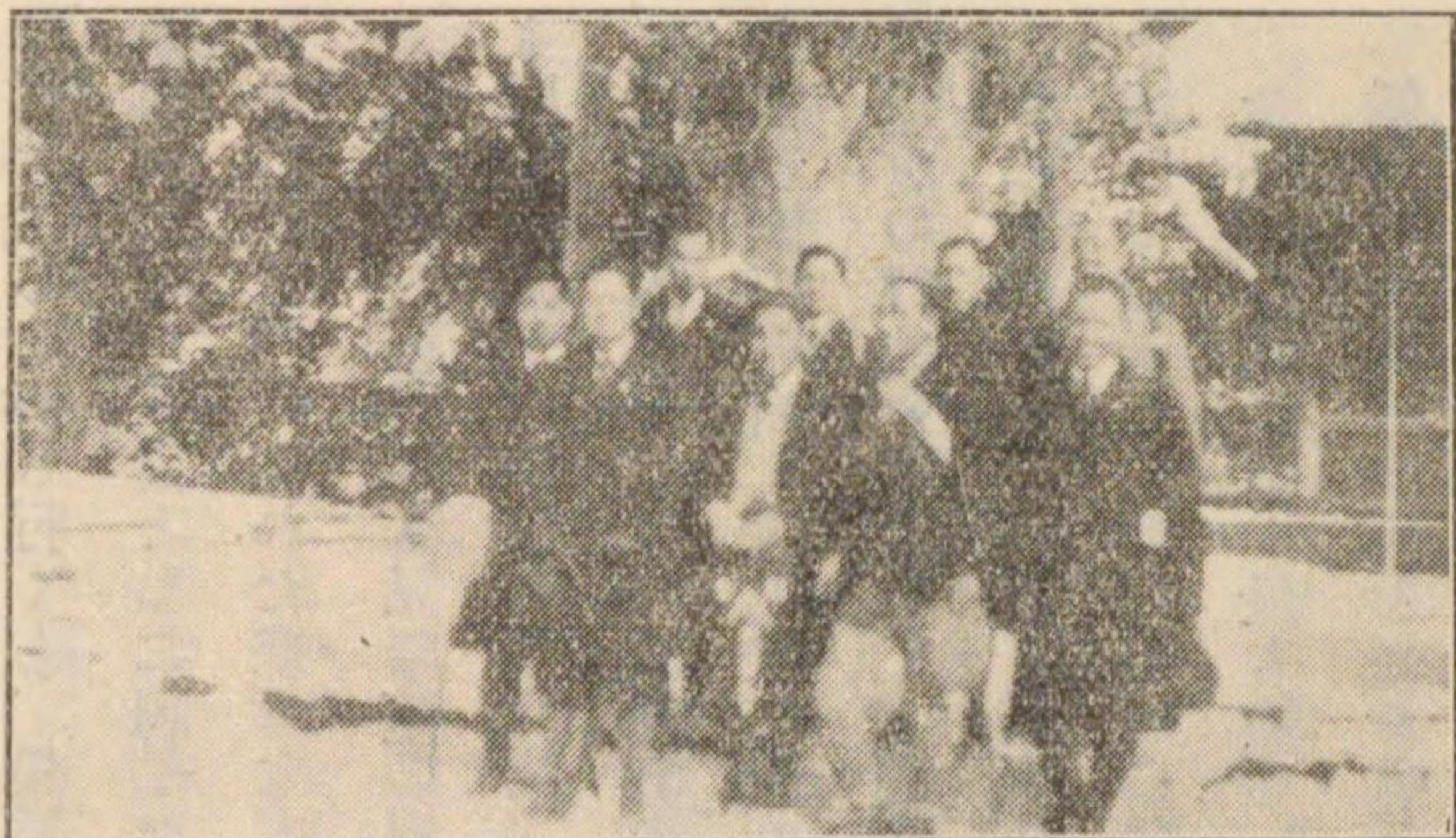
鎌倉の背山を縦走して、鎌倉町字十二所の熊野十二所神社の傍に降りる。

十二所の部落のとある農家の日當りのよい縁先を借りて辨當を開く、この家では炭
を焼いてゐると見えて納屋には焼た儘の炭が山のやうに積んであつた。

愈々鎌倉切通中、最も険しいと云はれてゐる、朝比奈の切通しを行く。

鎌倉の盛時、將軍を始め文武の百官が、皆この切通しを通つて金澤の方へ行樂に行
つたことなどを思ふと轉た今昔の感が深い。今は行き交ふ人も稀に、掛茶屋もなくな

つてしまった淋しい道である。



常樂寺に於ける一行

この雪の爲めにスキーヤーが來たと見えて、
シープールが縦横についてゐる。

六浦莊關所趾を過ぎ、廣いブーフメントを行
くと、六浦莊の聚落に出る。左手の丘上には下毛
の犬切丸の二子の墓などがあつた。九覽亭に登
つて見たがたいした勝れた眺めでもなかつた。

金澤の町に入つて稱名寺を訪れた。屈指の史
蹟だけに、もの寂びた環境だ。裏山の中腹に、
苔蒸した寶篋印塔の實時の墓を弔つた。

『塋域としては實に優れた所だ。』と宮城鎌倉子
が云ふ。この觀察は、流石に史蹟探求に興味を
有つ人の言として聞くべきであると思つた。

西方の阜丘、金澤山の展望は確によささうだと云ふのは半田桃太郎子である。この

觀察も亦風景に對して深い憧憬を持つ人ならではの備へ得ぬ炯眼である。

本堂の廻廊に、ドツカと腰を下して頻りにペンを走らせてゐるのは、小松原頭目子である。

『今日御領内を通過致します』
と中山交通子へ思慕の通信を書いてゐるのだ。

自分は如此卓抜なる觀察眼と純情の持主と俱に旅の出来る幸福をつくぐ感謝した。

境内に新たに建設された、金澤文庫の寶物を觀て、金澤文庫驛から電車に搭乗し、
杉田で下車して梅林を訪ふた。まだ花期には早く、僅に南枝の二三輪が蕾を破つた位
である。

杉田から自動車で横濱驛に急ぐ。横濱の家々にはもう華やかに電燈が點つてゐた。
山から海邊へ、實に愉快な早春一日のトリップであつた。此經費一人當り一圓十五
錢。

温泉に浸りながらスキーを見ませうよ

期日 二月十五日(第三日曜)

集合 十四日午後五時上野驛

発車 午後五時四十分

下車 午後九時四十分水上驛

行程 水上驛より二軒程雪の夜道を提灯の光りを頼りに歩るきて旅舎に到りて宿泊。

翌朝はゆつくり起きて氣持のよい温泉に浸つて充分暖つてから大穴スキー場で血に燃ゆる若人達の活躍振りを飽く迄眺める此の附近は單に雪の景色を見る丈でも充分價值のある處である。若しスキーヤーの勇壯なる姿を見て我もと思はん方は貸スキーの設備があるから一轉びするのもよいだらう。

晝食後は旅館の窓から美々しく粧へる上州の山々を肴に淺酌されるのもよし、再び

大穴

水上驛

上野驛

スキー場に出て七轉び八起きのABCスキーヤーのスキー振り又は見て居ても氣持のよい熟練者の滑走振りを眺むるもよし、更に又一奮發して自らスキーを穿かるゝもよく一切御自由の事とする。

歸路 午後五時水上驛發午後八時三十分上野驛歸着解

用意 成るべく輕快なる服裝のこと

天候 晴雨雪に不拘

スキー見物に水上へ

はなぶさ

クラブ員中での比較的年長者なるK君とK君、中々元氣で近頃スキーが非常に流行するが一度實地見學をし度いものだとの仰せ、で此のコースが生れた譯、發表して見ると御同感の方が多いと見えて早速三十餘名の申込があつた、雪は御詔へ向で、十日の大雪の後に復十三日に降つたから東京でも七八寸の積雪山手線の車窓からは戸山ヶ



休息中のスキーヤー

原あたり數百名のスキーヤーが盛に滑つて居るのが見えて、早や心は勇む、上野驛には發車の一時間も前から杉山君は待つて居られる、小林君の御配慮で都合よく乗り込んで五時四十分發車、大分新顔の方も参加されて、趣味の豊富な諸氏の御話で時の移るを覺えず、九時四十分水上驛着、番頭の出迎を受けて程近き水上館に着けば、二時の列車で先着の四君はバチリ／＼と烏鷺を争つて居られる、早速風呂に飛び込み清淨な心地よい温泉で充分暖まつて床に入る。

翌朝五時、夜行のスキー列車の音に眼を醒して、後發隊の來着を待つては楠瀬、村井兩氏が來られて、一行は飯を喰ふ間も惜しい故、食堂車で朝飯を濟し、直にグレンデに向つた、との知らせ其元氣に驚きソレデハと飛び起き廊下

に出で見れば、前は直に利根川、夏から紅葉時の此の溪谷の眺めは一入であらうと思はれた、對岸にも數軒の旅館が建ち並ぶ、朝飯もソコ／＼に八時出發、北風の向ひ風は少々閉口したが、驛を過ぎ鹿野澤スキー場邊からは谷も狭まるので風も止む、やがて兩岸逼りたる處に架せられた大鹿橋の鐵橋を渡る、橋下は深淵を成し水深百尺にも及ぶとか、昨年來た時は怪しい釣橋であつたと小松原君が話される、尙も川に沿ふて進めば驛から十町餘で奥利根館に着く、荷物を預けて直に出掛け、湯檜會變壓所の邊へ行けば、左手のスロープには、早や數百名のスキーヤーが盛んに滑つて居るのが見える、此れが大穴のスキー場で、近づけば群を抜いて銅像の様に目立つ石井君の巨體を發見し續いて池田君、戸田君等後發隊と合する、お早よう、と云へば、遅いぢやないか、モウ二時間も滑つて居るんだぜと、エライ元氣、適當のスロープに二旒の會旗を立て、此處を關東旅行クラブ特設グレンデと定め練習を開始する、コーチャーは藤枝、石井、高橋の諸先生が當られ、スキーの穿き方から懇切に教へられる、見物の積りで來られた諸君も面白相なので滑つて見られる、一時間程で早や要領だけは會得された様だつた、シユナイダーも知らない様な珍型はスカサズ奥村活動寫眞班がフキ

ルムに收める。ゲレンデの高所から眺めれば、此處は利根の本流と湯檜會川との合流

點で前の山の中腹には有名なループ線の隧道が見える、線路は勿論架空線も架設を終つて、今は唯清水隧道の完成を待つ計りである、本年九月開通すれば、附近には所謂不遇の山河が待つて居るから、名コースが續々發表される事であらう。



ウニツレーヤーキス

晝は奥利根館に歸り、利根川を見下す新築の座敷を三部屋打抜いて用意された食卓に三十餘名が並んで晝飯を共にする、此の盛んな光景は早速戸田君が撮影される、箸を置くや否や復も出掛ける、中老組は温泉に浸つてノンビリする晝から全く暗れたので雪山の上に碧色の空が見える、暖かいので廊下の硝子戸を明け放して思ふ存分、日光浴しながら漫談に耽る。

三時頃スキーヤー連の歸りを待つて共に歸途に就く、驛に着けば五時のスキー列車は早やホームに横付けとなつて吾々を待つて居て何處からでも乗り込む事が出来、スキームも通つて居る、御蔭で寒い待合室で待たされずに済んだので、乗客一同、驛長の氣の利いた處置に感謝して居た、吾々一行は最前部の客車に貸切の様に一ヶ所に集合して席を占める、發車すれば石井君や藤枝君が車窓からの山々の説明される、何時の間に仕入れて來たのかビールが抜かれる、隣りではトランプが始まる、夕飯には臨時井會を開かうぢやないかと誰かの提案に電話で注文すれば多數の鰻丼が高崎で持込まれる。

運輸事務所の小林了氏は各車を廻つて、此のスキー列車及び旅館等に就て御氣付の點は御注意を願度と挨拶して廻られたが何等御小言が出ないので、却て手持無沙汰の様であつた、同氏の御話に依れば第一回は五百名去る十日には七百餘名今日は八百二十六名と回を重ねる毎に盛況に赴く由、我スキー界の爲めに其成功を祝する、臨時列車として中間驛を飛ばすので、僅に三時間半で上野驛へ八時半歸着、盛會裡に此行を終る。此經費一人當り五圓七十錢。

上野驛

水上

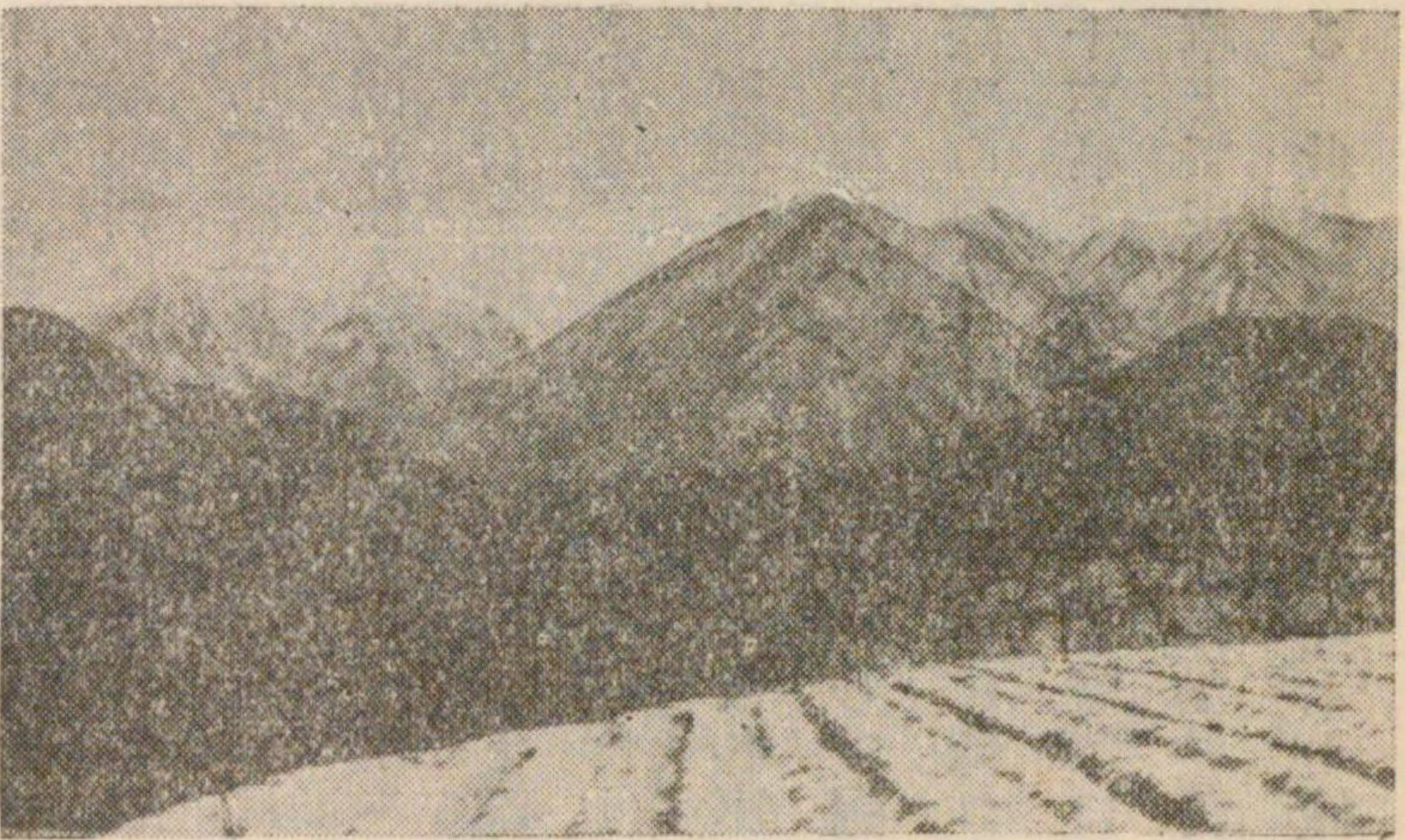
湯原

阿能川

赤瀬岩

佛岩

赤谷川
湯島



赤谷より萬太郎山を望む

スキーの奥上州山歩き ところづく

期日 二月廿二日(第四日曜)

集合 廿一日夜十一時上野驛

發車 上野驛十一時五十分水上行スキー列車

下車 廿二日朝五時水上驛

行程 天候及積雪状態がよければ水上驛より

水上館位で少憩後湯原の湯の町を通り阿能川

から赤瀬入を上る。五キロ三時間位で佛岩に

つく、登りは稍急攀である。佛岩及び吾妻耶

山よりの上越國境の雪景色は實に雄大なもの

だ。下りは西側赤谷川の溪谷で林間の滑走三キロ位で好スロープへ出る此附近は水上を中心とした練習場では最も廣大なものだ。歸りは湯島か笹の湯で一浴、夕食後、

後 閑

自動車の後閑へ出て水上發スキー列車へ入る山越しせず驛附近で練習する方も汽車だけせめて同乗しませう。

歸路 後閑から乗車、赤羽着午後八時廿分

天候 不晴雨雪

用意 スキー及附屬必需品(多少の防寒具、辨當一食分以上、水筒等)

鹿澤スキー行

高 良 子

此旅程は水上附近の山スキーの豫定であつたが、積雪も十分でないしスキー列車も運轉中止と成つてゐたので、豫定を變更し鹿澤行と成つた次第である。

午後十時四十分上野發で午前五時四分滋野驛下車。直ちに新張に向つて眞暗な氷結した泥路を辿る、近路を取つたが澤柳氏の案内で難なく新張に出た。

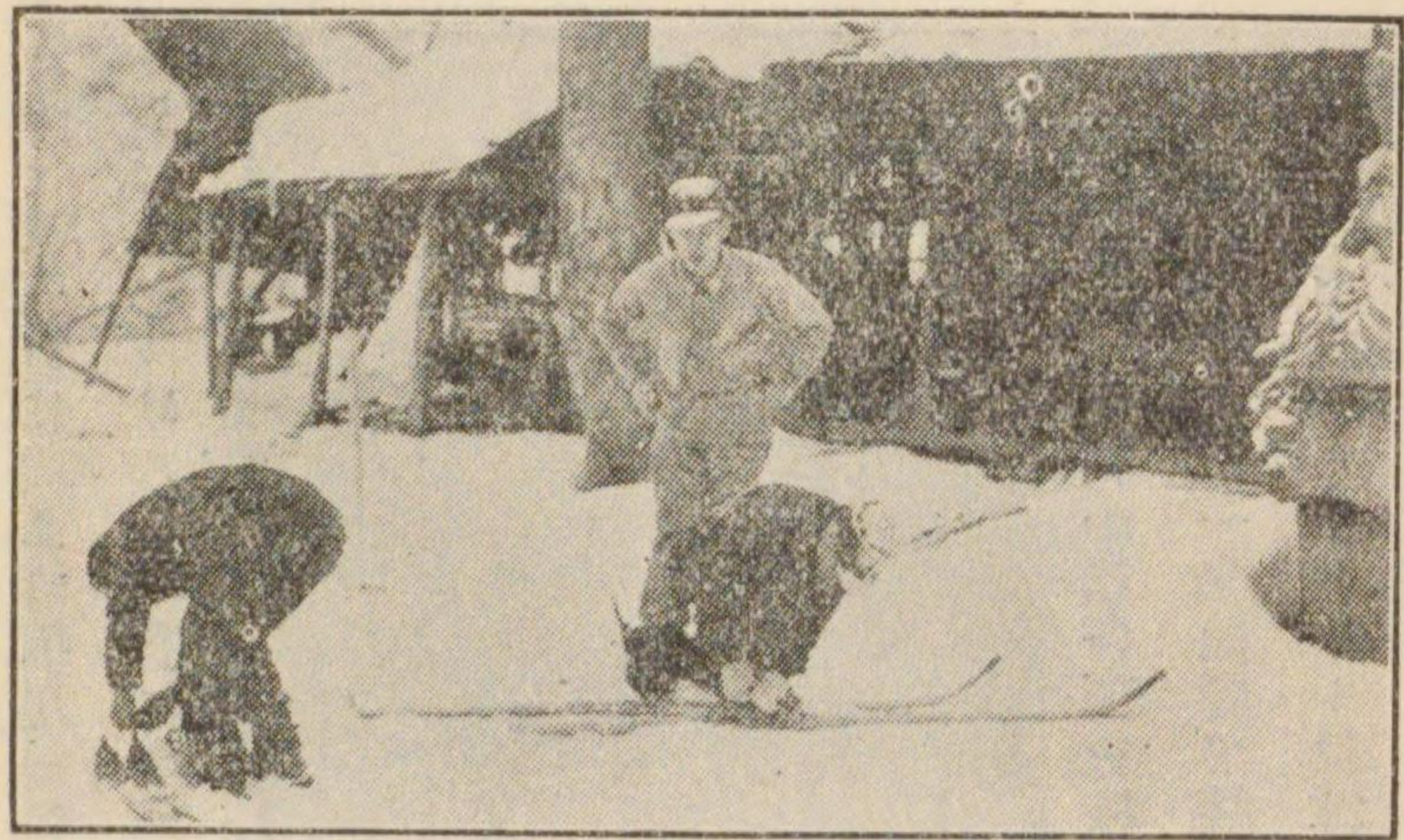
新張迄は田中より行くのが普通で自動車の便も有ると云ふが、滋野から歩いてても大

差無いのである、新張を出ると直ぐ宮の鳥居の脇を通るが此邊から泥路も少なくなつて来たと思ふと粉雪が降り出して来た。

夜も明け渡つた。振返ると正面に八ヶ岳蓼科山が泰然として根を据え其山麓は登るに従ひ雄大な景觀を漸次展開して来る。眺望の好い所で暫時休憩し第一回の食事をす。積雪も多く成つたのでスキーより肩を解放すべく石井氏提案のスキー橋運搬を試みる事にする、成程非常に樂である。

横堰を過ぎ少し行くと左に林間から奈良原鑛泉が見えるが如何にも淋しさうである。七時三十五分三十番茶屋に着少し登つて所澤を右岸に渡れば鑛泉に引いた鐵管の脇に出るが此處にも小屋が有る。道は此鐵管に沿ふて行くが茲から先の豁達な緩かな此澤は坊主山の多い附近の山々と如何にも調和し鹿澤獨特の明るい氣分を醸成してゐる。

降り續いた雪は中々止みさうにも無い、風は無いが大粒と成つた、四十番を過ぎ五十番茶屋に着いたのが八時十五分であつた、これは現在空家同然で荒廢甚だしく夜など薄氣味悪くて脇さへ通れさうも無い位酷い。この先に少し急な所が有り再び平



五 十 番 茶 屋 に て

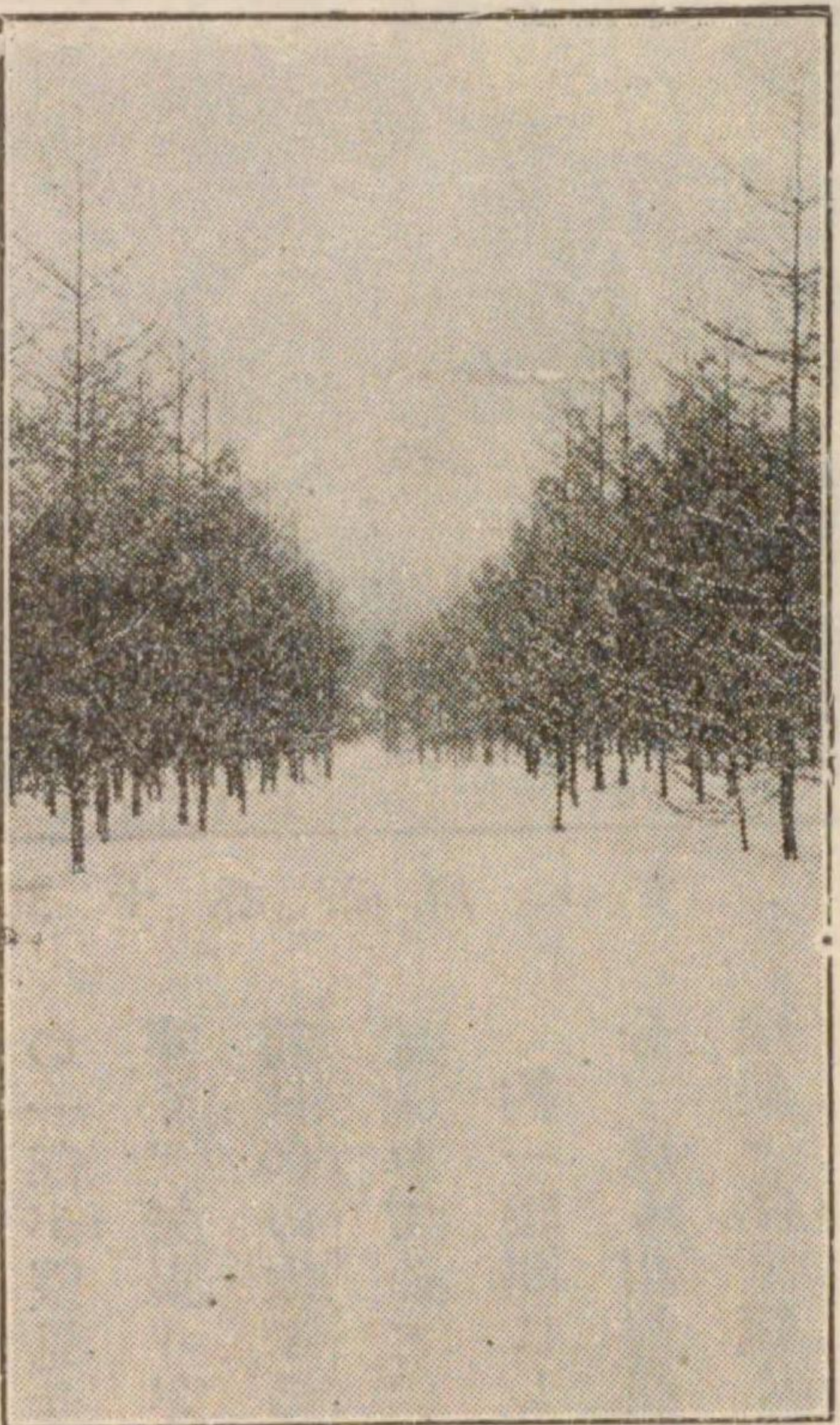
坦な處に來ると眞北に湯の丸山(二一〇五米)の丸い頭が見えるが南面で雪が少ない、左方は烏帽子から南下した白銀の長い尾根が吾々を惹き付ける。道はこれより湯ノ丸を右に捲いて進むのであるが此邊から峠の國境尾根の一部が望見せられる、澤を渡る前にスキーを穿く、矢張り穿いた方が速い、南面した斜面で前日迄の太陽の直射にハルシを形成し走路は可成荒れてゐた。

約一時間にして地藏峠につく時に十一時二十分。風も相當強かる可しとの豫想も全く外れ雪は益々降り續くが氣温は八度を示すと云ふ無風帯で聊か拍子抜けした次第だが、遠望は利かないにしても湯ノ丸牧場の大雪原を隔て、丸い棧

敷山其他が微かに び出てゐる様は何としても忘れられぬ情景である。

こゝで第三回の食事をすする。

峠より三方に向ふ國境尾根には針葉樹林を分けて堂々たる防火線が貫通し見事であるが、之を抜けると一帯に好スロープ續出し一寸道草して見度い氣になる、東に附近



根尾境國の峠藏地

の最高峰籠登山(二二二八米)が峠立して誰をも寄せつけまいとしてゐるかに見える。

好天ならば三方の眺望はスバラシイのであるが一九〇〇米の肩迄登つて

來ると見晴しの利かない頂を極めるの愚を教へて呉れる美しい斜面に吾々は惹き付けられて仕舞つた、一先此處で練習をする事に一決。

汽車中で塗蠟したスキーは雪質の關係で用を爲さ無い、塗換へて見たが依然自分のが一番結果が悪いので少からず閉口させられた。

此所最初三方ヶ峰往復湯ノ丸角間峠を経て眞田に出る計畫で食料防寒具等十分用意

して來たが悪天候に雄圖も鈍り山の湯訪問とまで下つたが之は他日に譲り結局練習に終始したのである。

約一時間半も練習すると一時二十分下山の途に就いた、未明より間斷なく降雪したので吾々のシユプールも半ば埋もれてゐるが下りは流石に小氣味よく滑走する、防火線は瞬く間にスツ飛して地藏峠に出る。

さてこれより湯ノ丸裾の滑降と澤を渡つて五十番迄に到る合して約四キロのコースに僅かな悪場が有るが先づ藤枝氏先頭となりクラストした數箇のシユプールを突進すると見れば忽ち氏の



埋没せる地藏の前のに

姿は見えない、續いて皆後を追ふ。



殿で後に従つたが調子悪くシリモチ突く事數回五十番の稍手前の所で露出せる砂利面に乗り上げたりする。五十番茶屋より下はズツト傾斜も緩かだし特に四十番より三十番に至る滑降は實に愉快雙絶一瀉千里でブツ飛ばせるのである、更に横堰から新張近くに至る路も略同様であるが積雪少ないのでウツカリするとスキーが泥に吸付き前倒しさうに成る、皆頑張つて滑走を繼續し、兎に角滋野驛まで一同が滑り込むのが正に三時二十三分でホームには既に二十四分發の上り列車が到着した處であつた。頭から雪だらけになつた一行が直ぐ様車内に駆け込むと車は動き出した、さても忙しく怪しき藝當なりし事よ。

二月のドンブリ會場の名のからす亭が面白ければ、戯れに烏オンパレードを作る、蓋し此文を読まん人必ず『ウフ』と破顔すべしよつて、題して

烏 譜

扁 舟 子

落語の枕の小唄に『嘉兵衛晩酌五合と定めしに、烏、軒端に來りて、嘉兵衛五合と繰返し鳴いて嘲けるが如し、怒つて一タ一升を氣張れば、烏、復た軒に來りて、五合か〜、咄、一升だぞ、烏曰く、奢つたア〜』と、嘉兵衛君は我朝の公治長かよく烏の鳴聲を解するよ。さるにても、烏鳴きでも知れそなものよ、は角力甚句に名高き文句にして。烏鳴きが悪るいと、ても氣懸りな次第なり。曉鴉、晚鴉の群り鳴くは、何事を語るやらん、野州の烏山、芝區の烏森、其名の如くならば、朝な夕な、さぞ囂しかるべし。明烏は新内、清元に名高く。三千世界の烏を殺し、ぬしと朝寝がして見たい、とは、幕末勤王の士の詠ぜし都々逸なり。風見烏は、風のまに〜、東

西南北に巡り、高く止まつた大御堂の鳥は、高慢の人の渾名とす。いかに鳥を捕ふればとて、烏賊とは烏漑がましや、敵を防がん爲に、黒き汁を吐けば、烏族ともいふべし、其口内にある烏とんびは物嚙まん爲の嘴なるを、小兒のもてあそびとなるぞうたてき、烏瓜は其名に似ず紅き實を結び、烏瓜は烏羽玉の黒き紙にて張る、寒鳥は眼の薬となれど、烏は籠に飼ひて何の娛もなければ、烏籠とは、取り柄もなしといふ事なりとぞ。烏貝、烏蛇は、其色黒ければなれど。烏天狗は、嘴の尖りたるよりなるべし。若し人を、烏勘左衛門と罵つて三年烏のせいだと云はゞ、忽ち烏に灸をすゑらるべし。烏兎忽々は忙はしく。烏合の勢は頼みすくなし。燕丹秦王に捕はれて、烏の頭白くんば、馬も亦角を生すべしと歎じたれど、扱も笑止や、南朝にては、還幸と鳴くや吉野の山鳥、かしらも白し面白の夜や、と詠めり、丹君以ていかんとなす。燕の異名を烏衣とは云へど、燕麥を、からす麥とは、ちと烏散くさき讀み方なり。これは家畜の飼料とて、商ひは柀目を以てせず、一貫二貫と算ふるよし。花合せてふ遊戯にてからすと云ふ手役は、空札、素札の集りなるに、五貫役とは分に過ぎたり。烏鷺の争は、夜を徹して飽かず、烏鵲南に飛んで月烏くにかある、からす金は今尙、あとを絶

たす、各所に日掛貸金の貼札あるぞをかしき。烏石は鈴の森に名高く。うせきと讀めば、書家に著し。烏帽子と書きて、からすばうしとは讀まねど。烏龍茶は、ウーロンにて通ず。草木をからす。聲をからすはありがたからねど。烏の濡羽色は、美人の髪にたとへられ。烏の仔鳥長じて反哺の老ありと、若し夫れ端唄子の所謂

鷺を烏といふたが無理か、葵の花も紅うさく、一羽の鶏をにはとりと、雪といふ字を墨で書く

に至りては、誰か烏の雌雄を知らんや

烏鳥たゞ一筆の違ひかな

草津スキー歌

健生

一、草津よいとこ今日つきました

御湯とスキーで倦きやせぬ

チヨイナ チヨイナ

二、スキーやるなら草津へ御出で

ひるのつかれは湯で白根

チヨイナ チヨイナ

三、草津よいとこ白根の麓

尻餅しらすの雪が積む

チヨイナ チヨイナ

【三月之部】

青梅梅林を探ね更に雪の御嶽神社詣で

期日 三月八日(第二日曜日)

集合 午前八時新宿驛本屋口

発車 午前八時半頃発電車

下車 日向和田驛九時五十分

行程 日向和田驛から神代ノ渡しを渡る、此邊水石のたたずまひならず日本百景のみに數へられてゐる。對岸の畑地を行く事約五百mで青梅梅林に着く。樹數もかなり多く老樹なので一入の風趣がある、樹間を逍遙すれば衣袂爲めに香しと云つた感じがある。關東のみならず全国でもさうザラには無い風景である。少憩觀賞の後背後の小丘を攀ちて岩屋の金比羅に詣でる。山角の突出した岩角の上に鎮座して眺

新宿驛

日向和田驛

青梅

岩屋

三 月

八二

望甚だよろしい。それから道を西方に採つて六四七m峯の南側を巻き、次の七四九mピークを過ぎ九〇三mの日出山に登つて奥多摩の山容水態を一陣に收め、更に御嶽神社に詣で、少憩後、表參道の老杉の並木の間を一氣に下つて御嶽驛に入る。徒歩廿料。

歸路 御嶽驛午後五時廿分發午後七時頃新宿驛へ歸着解散

用意 辨當、水筒等、服装は輕装のこと。

天候 雨天中止

地圖 五萬分一、五日市

吉野梅林から雪の御嶽山へ

天 楓 生

梅の名所にも移り變りがある龜戸の臥龍梅や、蒲田の梅園などが案内書から跡を絶つて、久地・原村・熱海、さては越生や水戸などが傳へられて来る。次では茲に述べ

んとする吉野梅林の如きが即ち之れである。



尖風吹玉骨明月美人來

◇ 櫻は見る花で、觀櫻など云ふが、梅は見ると云はず探梅と氣取る。此邊にも花の有つ氣品の相違が伺はれる。櫻は樹の數が多く、山谷を埋め、或は長堤十里など云ふ處に妙趣を味ふべきであるが、梅に至つては即ち然らずで、農家の藪陰に一二本の梅を見出すも風情あり、軒古き寺の窓先きにフト紅梅の一本を見るも興ある事である。此見地からすると我等は梅園とか梅林とか云ふものに餘り多くの期待を持つものではない。

餘り、獨りで偏屈論を説くのも穩かでないから矢張り世間様の例に倣つて、梅は梅

三 月

八三

林へとする。さて東京近くで梅園らしい梅園と云へば先づ熱海の夫れであらう。小ぢんまりと善く纏つて、背後に山があり、中を貫く溪流の趣など、中々捨て難い風情である。之に比べると久地、原村などは稍單調で興が薄い。越生の梅は新月ヶ瀬など、呼んで居るが、期待した程ではない。水戸は梅も多いが土地其物に興味があるので、梅は聊かお景物に近い感じがする。斯様に節にかけて見ると、吉野などは先づ以て見るに足る梅林と云ふことになつて来るであらう。

私は屢々「梅園」梅林一などの文字を使つて来たが、此園と林との間にはどんな區別があるかと問はれると一寸困まる。然し大體に於て、熱海や原村の様なのは梅園で久地や越生などの野生に近い感じするのは梅林だと考へる。然らば吉野は、と問はれると、林ではなく、勿論園でもない。強て名付けたら梅村とでも云ふべき歟。即ち吉野一村、山と云はず、畑と云はず悉く梅樹を以て圍まれて居ると云つても過言でない。梅の村である。將に是れ見るに足る。否な探るに足る梅村である。

新宿驛を午前八時四十五分に立つた吾々一行は二十餘名とは中々優勢だ。途中一二の驛からも参加者があつて、立川の乗り換へでは十五分程を費し、青梅電車の客となつた。今日は悪天候の多い三月初には珍しい晴れた日曜日だ。多摩の山水に憧れる洋服子で車中は満員の盛況。日曜には郊外の名勝を訪べると云ふ傾向は非常に強くなつて来た様だ。何とも愉快的な現象である。然し車中のあまり込み合ふにはチト弱る。

日向和田驛に十時二十分頃下車して、神代の渡しを目指して多摩川縁りに下る。以前に來た時には針金を兩岸に引き渡して之に小舟を連絡した、趣の深い渡船であつた——急流であるから此方法でなければ流される——が今度行つて見ると之れが、さゝやかな棧橋様の橋に變つて橋錢を三錢とられる。此棧橋をバツクに一行の記念撮影をやつて吉野へ向ふ。イヤ橋を渡れば既にもう吉野なのだ。

梅は未だ蕾が固い、中には二三分咲いたものもある。けれども『未だ咲いて居らんぢやないか』とS君が云へば『咲かんでも良いよ會報にも、梅林を探ね、と書いてあつ

て梅花を賞すとは書いて無い。梅林さへ見れば良いんだ』と極めて合理的な答辯をして居るのがK君だ。此の人を政府委員にして議會へ起たせられないのは遺憾だ。



で、一同こゝで行厨を開く。

神代渡の代に

全村至る處梅であるが、其の眼目とも見るべき處は、梅鶯軒及梅溪園と呼ぶ、茶亭のある邊である。此あたりは地勢も一段高く諸方を見下ろして気分も良い。花の盛りは三月中旬頃から下旬頃迄であらう。此處を程々に切り上げ、上分から柚木に出て五八〇mの愛宕山を指して登る。途中残雪の斑々たるものもあつたが大したこともなく、指導標も完全して居て道を誤ることもない。愛宕神社へ着いたのは丁度正午なの



御嶽神社にて

一列車遅れて参加され、單身中分から登られた神田騰一氏に偶然六四七mの附近で遇ふ。氏の壯者を凌ぐ元氣と熱心サには全く敬服の外はない。斯くて七四九mのピークを過ぎ、九〇三mの日出山を経て御嶽神社に着いたのが三時二十分。此の邊には未だ雪が大分残つて居た。こゝで表參道から登つて來られた先着の小石川氏と出會つた。社前の茶亭で小憩後神社に参拜して、記念撮影を行ふ。

崇神天皇七年の創建と傳へられる古社であつて、往時日本武尊が陣營を置かれた舊蹟

と傳へられて居る。神社のある處は海拔九〇〇m、老檜古杉鬱然として茂り、寂しい門前部落があつて今も昔の繁昌を物語つて居る。御師の家も相當にあつて宿泊の便を與へて呉れる。數軒の茶店には、そば、うどん程度の中食には事缺かない位の仕度はある。



社殿から十數丁で奥の院や七代の瀧などに行かれるのだが時間が無いのでコース通り一切を割愛して四時十分出發、表參道を一氣に下る。美事な杉並木で日光を遮ぎつて居るので、氷結した道は滑り易かつた。山麓の御嶽橋は美事な鐵橋に代つて居り盛んに道普請をやつてゐる、が射山溪の壯觀は依然としてゐる。然し此の附近には料亭が澤山出來て俗臭濃く草鞋黨の吾等には微苦笑の限りである。豫定通り午後五時二十分御嶽驛發電車で歸路に就き、七時頃新宿驛へ歸着解散した。此經費一人當り一圓七十七錢。

早春の山踏み刈寄山から恩方谷へ

期日 三月十五日(第三日曜)

集合 午前七時半新宿驛本屋

發車 午前八時頃發電車

下車 五日市驛九時卅七分

行程 五日市驛から山裾の町と云つた趣の深かい五日市の町を通り、小中野の部落から本郷に出て左折して熊野神社を祀つたと云ふ今熊山の今熊神社に詣でる、この邊に呼ばはり山と稱する傳説の山がある。西南を指して進み、六八八mの刈寄山に登る、大嶽、天地、御前など奥多摩の山々と秋川谷の山村とを望むに頗る好い位置にある。南方には陣馬、生藤、連行、熊倉などの國境の山々がづらりと並んでゐる。高度の割合によい眺めを持つた山で、早春一日の軽い山踏みとしては極めて好適である。それから戸倉、川口、恩方の三村の境をなしてゐる尾根を南進して恩方の森

新宿驛 五日市驛 小中野郷 本郷 熊野神社 今熊山 呼ばはり山 大嶽 天地 御前 奥多摩 陣馬 生藤 連行 熊倉 戸倉 恩方

久保部落附近に降りる。漸く立罩めそめる春の夕靄を踏んで、自動車發着所に到り
一路八王子の町に入る。

歸路 八王子驛午後六時頃發午後七時頃新宿驛へ歸着解散

用意 辨當、水筒等

天候 雨天中止

地圖 五萬分一、五日市

刈寄山より恩方の谷へ

梨 萃 生

西多摩の清瀬、秋川の南岸、模範村戸倉村に、六八七・七mの高度を以て立つ刈寄
山。この山は全體戸倉村に屬してゐるので、戸倉山とも呼ばれてゐる。

私達が此山を訪ふた日は、稀なる好晴であつた。立川で乗換へた五日市鐵道の小さ
なガソリン車はもう慶應ボーイの一行で一パイだつた。でも車窓よりの眺めは豊かで

遠近の村落の梅は満開で、麥は寸に伸びてゐる。行方の方には武相國境の山々、丹澤
山塊さては遠く芙蓉の靈峯さへも仰ぐことが出來た。

武藏五日市驛へ下車したのが午前九時四十分。秋川の清流を下瞰して進むと、山近



刈寄山頂點にて

くの町としての感じのす
る五日市の町に着いて、
それを一直線に進んで行
く、でも日本造りの二階
家に何々バーなどといふ
看板が掲げられてゐて、
近代色を點綴してゐるの

なども妙である。

小中野の部落を過ぎて、木立の茂つた神社の前を過ぎ、コンクリート造りの立派な
橋で秋川を渡つた所が、西戸倉の本郷部落だ。そこで本道に別れて、石の指導標のあ
る道を左りに盆堀川の谷に下り更に盆堀川を渡つて、地圖(五萬分一、五日市)の三

〇〇mの等高線を有する尾根の末端を巻いて、刈寄澤に沿つて廻つた。幅約1m半もある立派な道である。六七〇mも進んだ所に、小瀑が懸つてゐた、刈寄澤だ。小飛瀑ではあるが、岩の裂罅に懸つてゐて、一寸趣がある。

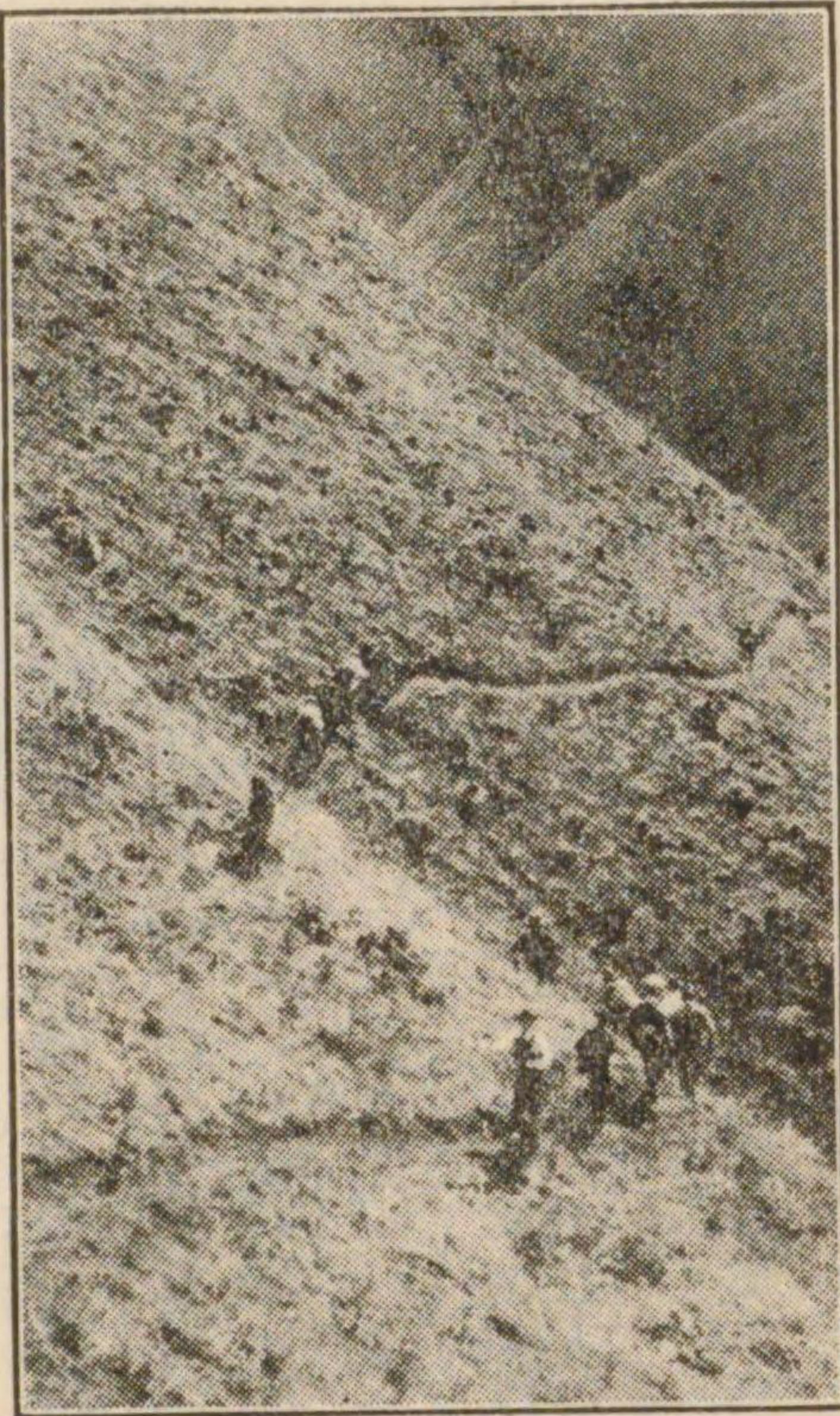
小憩、結束の上出發、山道坦々、春日麗かに、四隣閑寂として、眞に愉快的な山踏みの氣分に浸ることが出来た。約三軒で長クボに着く。坦道はこゝで終つてゐる。再び小憩、今度は刈寄澤に沿つた小徑を進んで行くこと約七八〇mで左に尾根へ這上る小徑を見出した。分岐點には里人の心遣いや、小木片に『恩方村近道約廿丁』と記して突挿してある、如何にも床しい業であると感謝する。

尾根への道は短距離ではあるが、かなり急角度だ。所々まだ残雪がある。約一軒半も行くと開けたコルに出た。六四〇m地點の乗越である。

こゝから尾根を右に行くと約五十mの昇降があつて間もなく六八七・七mの刈寄山の頂上、三角點の櫓の下に立つことが出来た。

もう先着の三人組の他の一隊が裸で、甲羅を干してゐた。聞けば『山と溪谷』の記事によつて盆堀川筋を登つて來たのださうだ。

頂上の展望は、高度の割合に廣く、大山から丹澤山塊、御正體山、その前に蹲る大群、加入道の兩山。前衛には、高尾山から景信、陣張、三國、生藤、連行、權現の諸山、その凹所からは白衣の富士が覗てゐる。



恩方谷への横斷路

五日市の市街と秋川の流域、そして今朝踏んで來た道は脚下に委隨としてゐる。馬頭刈から大岳御前、天地、三頭、小金山澤及大菩薩の連嶺も手にとる様に見渡すことが出来る。

來る。

休憩、晝食、撮影などをして午後一時出發、再び六四〇mのコル迄戻り、それから恩方谷の方へと降つた。途中で一寸道を踏違へてヒドイ崖を横斷したが神田氏が勇躍一番、斷然若い連中をリードしたには荒膽を挫かれた。漸く本道に出る。木陰には春

蘭などがもう蕾を破らうとしてゐた。

日當のよい峽には、梅が一面に咲てゐる。恩方谷の森久保へ降りたのが二時半。それから溪谷に沿つて、山村の氣分を味ひつゝ行く。駒木野の皎月院と稱する寺の庭に二本の巨大な枝垂櫻があつた、花時にはサザ盛觀を呈することであらう。

自動車の發着所、下恩方の大久保へ着いたのが三時半、駄菓子屋でゆつくり休んで、自動車に搭乗し、一路八王子驛へ着たのが午後五時二十分

早春一日の山踏みとしては、申分のないものであつた。此經費一人當り二圓三錢。

詩と史に恵まれたる奥伊豆温泉の旅

期日 三月二十一、二十二日(連休)

集合 廿日午後十一時東京驛

發車 午後十一時三十五分下關行

下車 沼津驛午前三時卅四分

東京驛
沼津驛

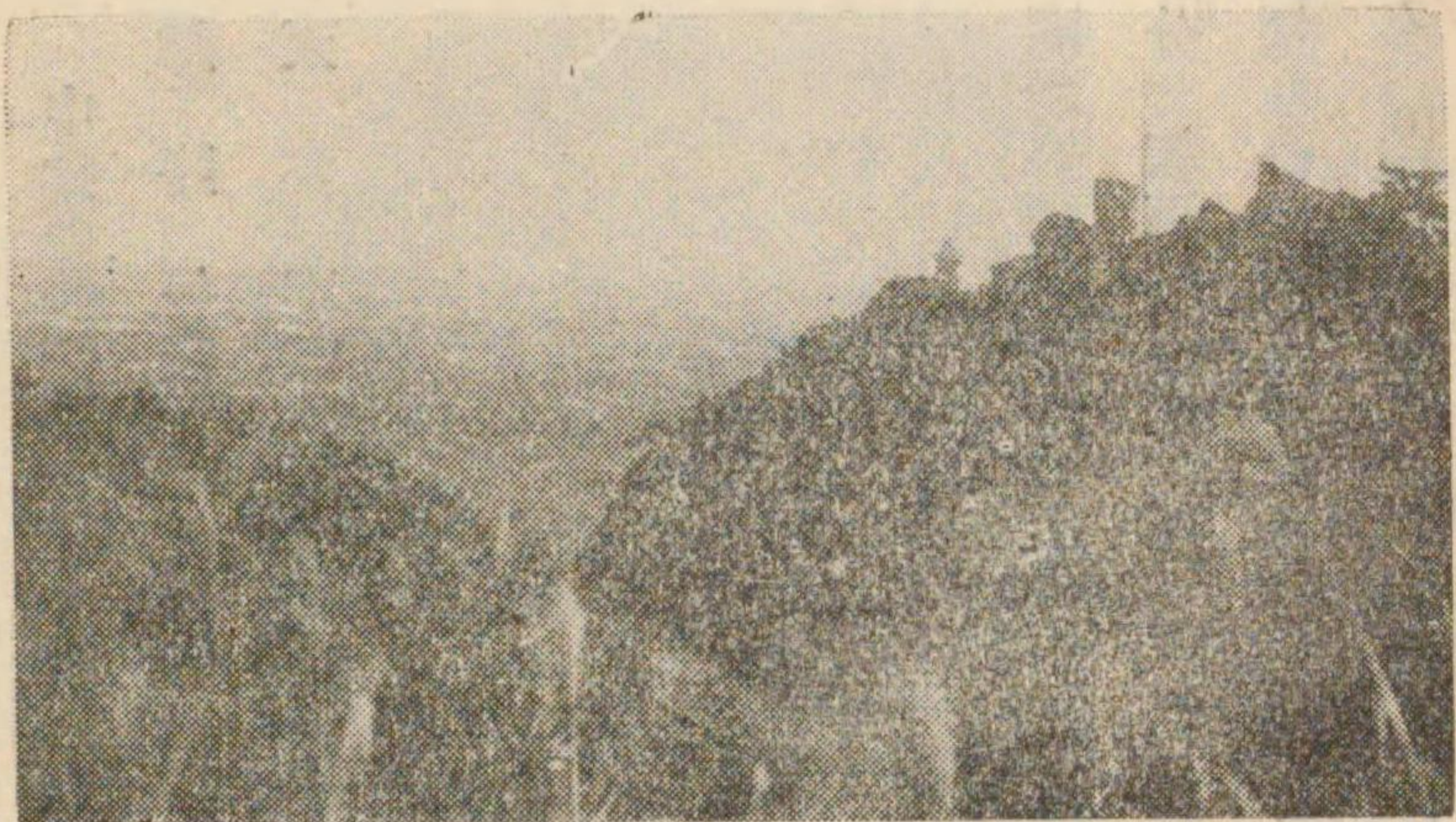
靜浦の江
長岡温泉
古奈温泉

修善寺の船原温泉
天淨の湯
湯ヶ野
峯谷
白濱
下田
下賀茂温泉
大石崎瀨
伊豆子

行程 驛前の茶店にて少憩、黎明を待ち別仕立の自動車にて五時出發、靜浦、江の

浦等の海濱佳景の地を經、車窓より長岡温泉の震災當時の面影を偲び古奈温泉白石館に到着、伊豆名物「見晴山の大湯」は此宿の自慢也。一浴夜來の疲勞を醫し朝食後八時出發、修善寺及船原温泉を一巡し、下田街道を天城に向ひ、途中淨蓮の瀧を見、湯ヶ野より左折峯及谷津の兩温泉を巡行、白濱を經て下田に入る。

下田名勝及唐人お吉の遺蹟を見て噴泉に名高き下賀茂温泉に至り一泊。二十二日午前七時出發、伊豆第一の絶勝石廊崎の險を見る、途中大瀨より石廊崎迄約四料の地は徒歩を要す、此地一帶白砂青松、長汀曲浦、伊豆舞子の稱



訪はんとする石廊崎

附近に有名なる手石の阿彌陀窟あり、

あり。十一時大瀬發、蓮臺寺河内温泉を經、天城の舊路を辿り吉奈温泉にて入浴、中食の後修善寺驛に向ふ。

歸 路 午後五時九分修善寺驛發九時三十五分東京驛着解散
天 候 不論晴雨

南伊豆二日旅の印象

平 凡 生

旗日と日曜との連続を利用して早春の享樂を追はんと前夜十一時三十五分發の東京驛最終列車に乗込んだ一行十四名が沼津驛へ降り立つたのは其日の午前三時三十四分。超満員の夜汽車に疲れた目も心も忽ち蘇生の思ひで驛外に踊り出れば、二日間借切りの大型自動車はもう吾等を待受けてゐる。驛前は未だ真夜中なのに思ひは同じ數多の群客で犇き合つて居る中に、關東旅行クラブさん！ と聲高く呼ばれて車に樂々と納まる一同は何れも嬉色満面、流石はクラブだと唯だ打興じてゐられる氣樂さ。ヤ

一星が降る様に出て居るぜと誰やら叫べば、成程、空一面に星斗は銀砂を散らした様に輝いてゐる。正に遊運上吉である。黎明を待つて出發の豫定を繰上げて直ぐ發車、寢ぼけ顔な沼津の町から三島の町へと馳せて先づ古奈温泉に向ふ。官幣大社三島明神の社前を右折して闇の街道を飛ばすこと約四十分で目指す白石館へ到着した。



サヨナラ ちやん

未明から旅館では一行の來着を待構へて寸分の隙もない歡迎振り。旅装解く間も遅しと伊豆名物の一つに數へられる見晴山の大湯に浸たる。未だあたりが靜かな暗がりの

中で睡む氣を忍びながら元氣よく無邪氣に語り合ふのであつた。

一浴快適、氣持よい應對振りの乙女達の給仕で朝餉が始まれば可憐な良ちゃん茶目人氣の焦點となつて賑かなことだ。追々夜は明ける、朗かに晴れて、長い冬の帷は

脱がれた長閑な春気分だ、庭前には紅梅の老樹が今を盛りと咲いて居る。

午前七時十分古奈出發、一小轡を隔てた長岡温泉へ迂回して車窓から震災當時の面影を偲ぶ。昨秋の慘狀今尚ほ歴々たる前方には、秀麗なる富士の笑顔が現はれた。再び下田街道へ出る。沿道の各戸には日章旗が翩翩と翻へり如何にも和やかだ。

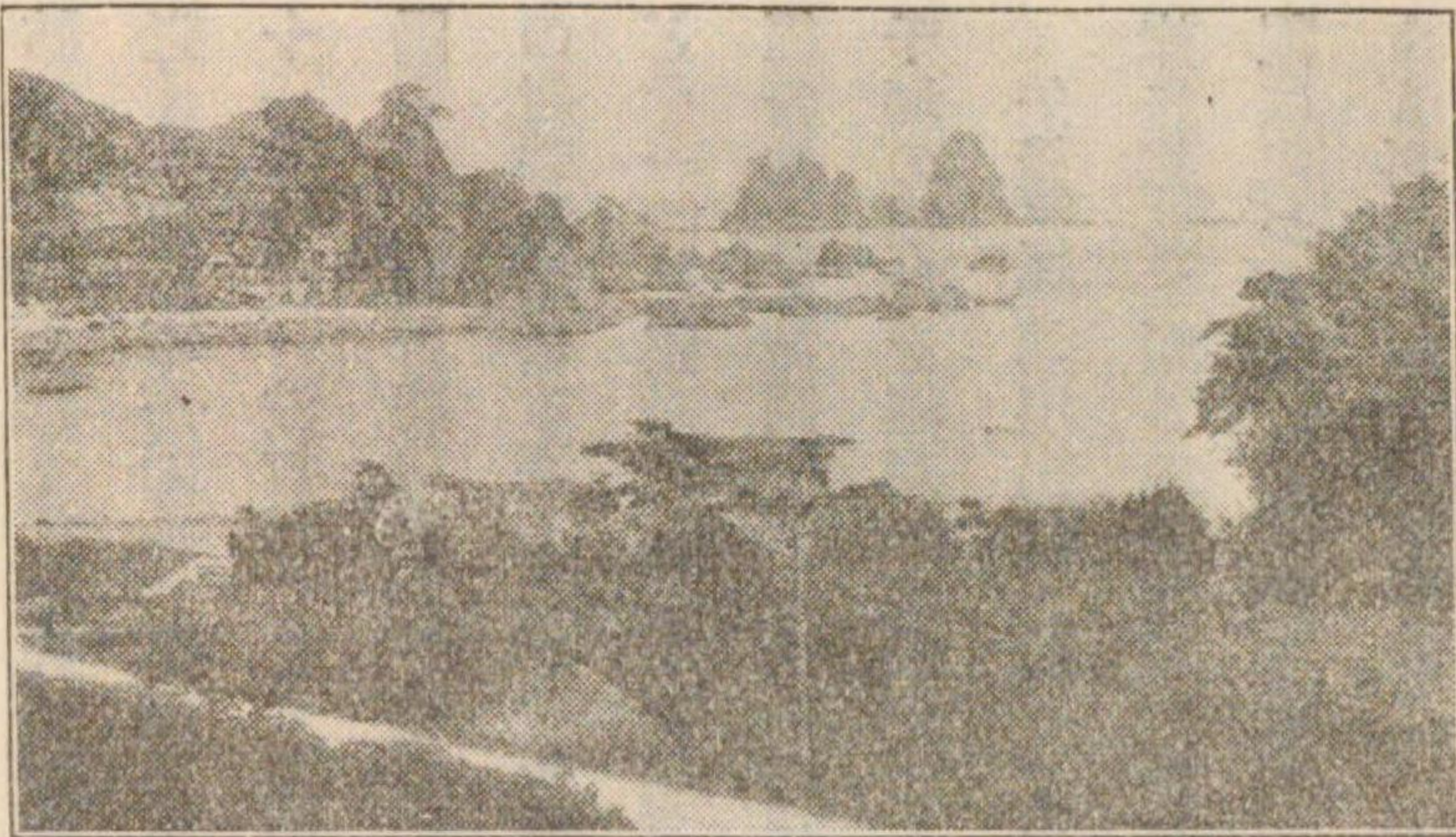
下田街道とは、三島神社の大鳥居を基點として狩野川の流域に沿つて南下、天城の翠巒を貫き半島を貫二つとなして其の尖端下田港に到達する十八里餘の道程で、史實的興趣に富む往還である。一行は今この街道を繞つて點在する幾多の温泉郷巡遊の旅として、談笑の裡に車を南へ南へと進めてゐる。

程なく昨秋のクラブ旅行に宿泊した湯ヶ島を過ぎ、天城山にかゝる。車は羊腸たる山路を巧みに迂回しつゝ上つて行く。山中四萬町歩は御料林なれば各所に手入れ行届きたる黒松、杉、松、樺などの森林美が殊に目立つ。昨秋同遊の豊間根氏と當時の思出に耽ける内に山頂のトンネルを越して仕舞ふ、此の峠一つで北と南との風物は一變する。此處からは殆ど自然の惰力で下つて行き、やがて澗溪開くる處が湯ヶ野温泉である。そこで一應停車して一息入れることゝした、聽て、街道を左折して噴泉で名高

い峯、谷津の兩温泉を過ぎ稻取町を経て海岸傳ひに天城山東南麓の別天地熱川温泉を訪づれる。これまで交通不便なりし爲め、兎角旅行者に看過された此土地も今は殆ど近く迄自動車を通ふ。海岸の風光を賞でながら車を片瀬で辭せば徒歩一籽許りで午前十一時半頃、波打際にある玉翠館に到着した。心地よい素朴な設備の湯に一浴する内圖らずも同行莊司氏の御好意による午餐が運ばれて歡談裡に一同御馳走になる。彼方の紺碧清淨なる海上には、悠然として白煙を噴く大島や點々と散在する利島、新島などを一眸に望み、殊に晴れ切つた今日は素晴らしい眺観だ。食後、熱川温泉土地組合の經營地、天城園を觀る。一帯に傾斜地である熱川も、其の地點のみは平坦で約壹萬五千坪の畑地を理想的温泉郷にと目下營々と開設されてゐた。

午後二時熱川出發、愈々下田へ向ふ。河津を過ぎれば右は山を控へ左は太平洋の海岸に接して頗るの風景美。中にも白砂の海濱、共產村で知らるゝ白濱村に入れば、景觀は宛がら一幅の繪畫の様だ。何時しか休眠状態の車内は蘇へり、前列のバンザイ係りも再び活氣を帯びて來る。晝夜兼行の睡い目も此の好風景は雲煙過眼を許さない。兎角する内、俄然下田の瓦葺は我等の眼前に浮んで來た。

午後三時四十分下田の町に入れば意外にも下田自動車會社の稻葉君は出迎へて懇切



南崎村附近の勝景

境なのである。快浴後、夕飯となれば盃もるよの杉さん豊さんは要領を得た陶然振り

に案内役を承はらる。聞けば尙病床の成島氏よりの情報で斯くは一行を待受けられしとか、難有い事だ。下田の史蹟や名勝は今更ら事新しく申す迄もあるまい。遊覧は型通り運んで、玉泉寺から柿崎辨天、唐人お吉の墓から了仙寺武山閣では珍什や佛像などを拜観する。港の南に障壁となれる岡丘、下田公園に登れば全山古松老樹の鬱蒼たる城址で展望甚だ佳い。其海岸には立派な逍遙道路が開鑿されてゐる。隈なく各所を探りて更に車を下賀茂温泉へと進め、夕陽迫る頃福田屋に投宿した。此處は青野川に沿ひ隨處に旅舎と農家とが散在せる比較的淳朴な静寂

宮城氏の緊急動議で順繰り漫談が始まれば歡聲と哄笑との爆發で旅興は一層加はる許り、愉快な旅行だと新顔連はクラブ式を禮讚する、全く調子揃ひの和氣霽々。豊島山崎氏などは悠々と烏鷺を争ふ餘裕振りであつた。

明くれば今日も好天氣、迎ひ自動車の來る間にと打連れて散歩に出る。此のあたり何處を堀つても湯が豪勢に噴き上り堀つた儘では樹木や田畑に湯害を及ぼすので蓋をして湯の噴騰を止めてゐる。近來は此温泉利用のメロン栽培が盛觀である。

午前八時十分宿舎を出發、石廊崎の景勝を探るべく車を西へと走せて南崎村大瀬へ行く。下流から大瀬、長津呂の海岸は確かに絶景だ、だが途上一向遊行者を見受けない。連休の下田界限はあれ程自動車の往復頻繁なりしに此處では頓と其姿を見せぬ、眞の探勝旅行なら是非とも此邊まで足を延して欲しいものだ。

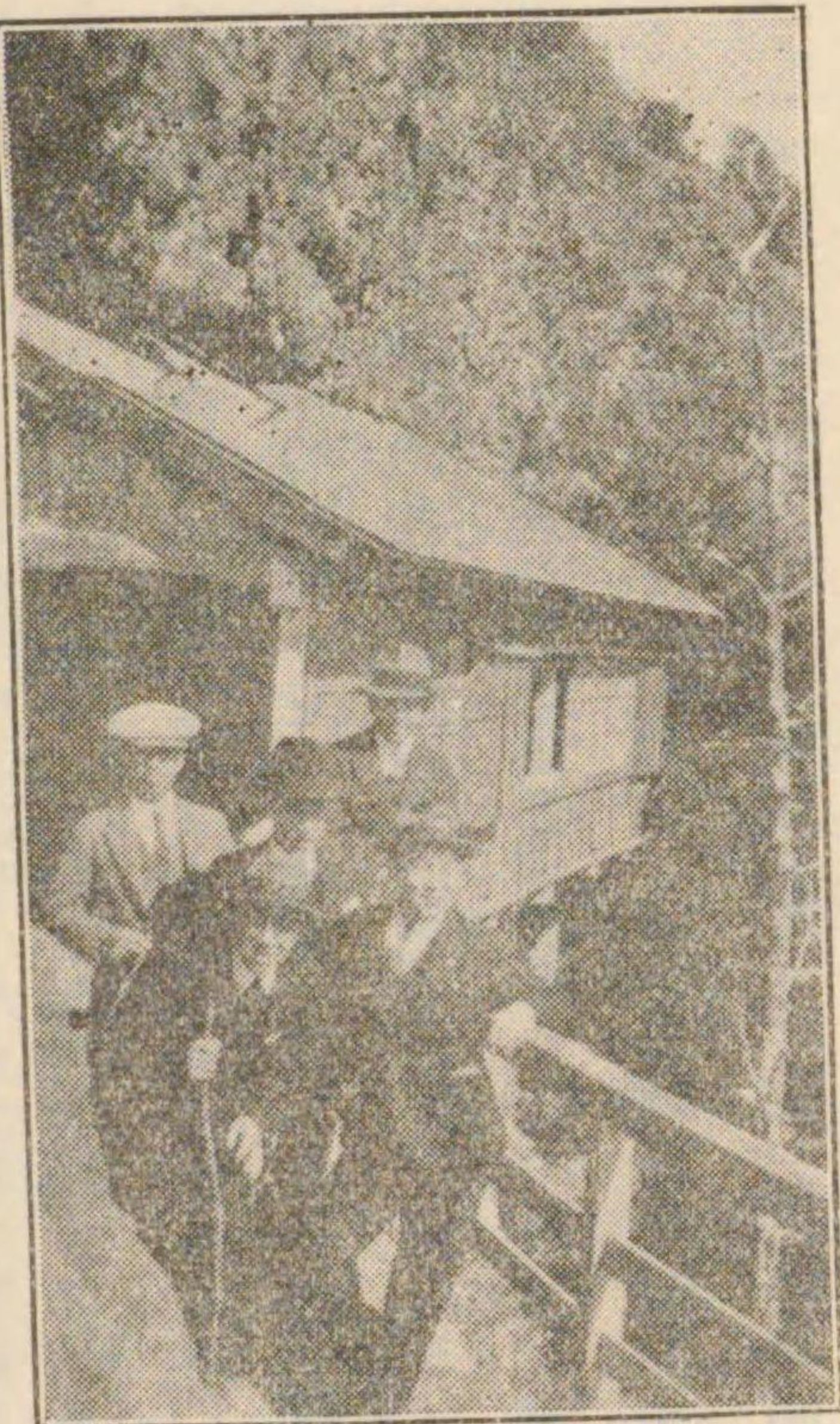
こんな感想も湧く内、自動車は大瀬で停つて少し位はお歩きよと云ふ順序となる。此處から麗かな春光を浴びながら渺漫たる波打際を行く。沿道は貝殻が屋根の上まで散ばつてゐる蟹家や網を引張つてゐる荒くれた赤銅色の漁師達も見受けられる佗しい漁村である。だが碧い海は展げ渚から稍々離れた沖合には數多の奇巖怪礁があらはれ

て、如何にも伊豆南海岸を代表する景勝地だ。凡そ四軒も進めば長津呂へ着く、三方山にかこまれた狭隘な地域に五十戸ばかりの人家がいかたまりと成つてゐる。とある路地の片隅に『いらう道はこちらです、是より十三丁』とするされた建札を見出して人家のすぐ背後から急峻を登れば、稚松や篠竹の交在する一面の萱原でその山の脊を傳ふ細徑が岬端へと我等をひとりでに導くのであつた。

石廊崎は伊豆最南端の岩崖の岬頭である。右も左も前も廣闊たる碧海に繞られ、脚下に轟きわたる激浪が巨巖にぶつかつては豪快な光景を展開してゐる。左右の海上に蟠まる奇礁の中にも近く東に望む箕掛岩の三尖峯は殊に印象的な好風景だ。

午前九時四十分、岬頭にある測候所、燈臺を過ぎて尖端の絶壁に達せば、遠く神子元島の燈臺から大島、利島、新島、式根島、三宅島、神津島などの伊豆七島を一眸に望み風光雄大と云つてよい。成程、こゝまで來ねば南伊豆の探勝は完全と申されぬ譯だと衆評果して一致する。斷崖を迂廻して崖腹の洞窟に鎮座する石室権現に參拜した。大きな帆柱が神社の臺木となつてゐた怪奇な一篇の物語が傳へられて居るが傳説には餘り感興も起らない。往路を復た辿つて歸路に就くことゝした。

斯くて大瀬に待受け居る車にて下田へ十一時半頃引返し、下田自動車會社の本社に小憩後、再び天城越えて北伊豆へ向ふ。其の途次、蓮臺寺温泉を寸訪し河内温泉を一瞥する、車を下りて金谷旅館の千人風呂を赤毛布式に見物し、附近のお吉が淵も見る、何處迄も氣輕な漂泊の旅氣分であることよ。朝來頻りに移動したので腹は空き、



石室権現の現に

睡む氣は募れど、刻々變り行く風物を眼前に送り迎へる旅興には代へ難いと車中は一樣に幸福顔な勇士——遊子である。歡談戯話に興し合ひ、新しき友を得らるゝクラブ旅

行の功德を稱へて居る内何時しか天城山頂を快駛して吉奈温泉までの長丁場を一氣にフツ飛ばして仕舞ふ。午後一時三十分東府屋旅館に着けば下田からの電話申込で總ての手配は調つてゐる。一浴、賑かな午餐會となつた。

吉奈は狩野川の支流吉奈川の流域にある閑静な温泉境だが左程勝れた景觀はない、併し古來人口に膾炙した子寶の靈泉だけに混浴風の浴場には驚かされた。何だか淺草の花屋敷や新京極に明治大正の頃まで見掛けた氷屋を聯想される様な構造である。愈々、此旅行も終りに近付いた數刻こゝで悠遊するコースを繰上げて蒐印家の吉田三俣吉川諸氏の希望を汲み更に修善寺温泉へも廻ることに衆議一決、午後三時四十分出發して此の附録的遊行地へと車を馳す。思へば一行十四名、都門を出發以來殆ど晝夜兼行の旅にも拘らず些の疲勞倦怠の色もなく、宛かも一箇人の如き行動で一絲亂れぬ欣遊振り、斯かる練達の士と俱に緊張した旅の出来る幸福を私は感激せずには居られない。剛健融和友愛などの氣漲れるクラブ精神は何とも愉快なことだ。

一行は修禪寺の門前で車を辭し三々五々、思ひの儘に温泉町を逍遙し、外觀ながら温泉場の近況を見る。往時に較べて餘り變化なく町勢頓と發展の形態を認められぬは聊か意外に思はれた。

とかく都人士は温泉好愛時代にさりとは何うしたことか、土地の人々或は旅館業者に今一段時代に適應する新味や工夫を望ましいものである。

既に遊覽時間も盡きた。自動車は一路修善寺驛に向ひ、豫定通り午後五時九分發に乗車、其夜九時二十三分品川驛着。好晴に恵まれし二日旅の收獲を喜びつゝ各自温かき家路へ就く。此經費一人當り二十圓。

お坊ちゃん御嬢さんお待兼ねの兎狩り

期日 三月廿九日(第五日曜)

集合 午前九時新宿驛淀橋口(小田急改札口)

發車 九時三十分小田原行

下車 西生田驛十時五分

行程 驛から一軒半で御馴染の行樂園に着き、直に兎狩を開始する。初めての方は

一月の『トテモ面白かつた兎狩り』の記事を御讀み下されば狩場の様子は御解りにならと思ひますが、御子様方の御喜びなさる事は非常なもの前回御持ち歸りの兎の内で五疋も六疋も子兎を生んだのがある相で、是非今一度催す様にとの御注文

新宿驛

西生田驛

行樂園

が多いので、再び催す事に致しましたから、御子様方御引連れ多數御参加下さる様願ひます。尙當日の盛況は活動寫眞に撮影し并會にて御覽に入れます、歸りは董たんぼば、蓮華草等の咲いて居る野邊を摘草しながら四軒程歩いて稲田堤に出て多摩川を渡り京王閣でユツクリ遊び、四時頃の電車で新宿驛歸着解散、徒歩約六軒。

用意 辨當及水筒必ず携帶
天候 雨天中止

二度目の兎狩

好生子

御正月の十一日に、半田の桃太郎おにいさんが、兎狩にいつてトテモ面白い、トテモ面白かつた、といふもんですから、弟の桃次郎さんや、妹の桃枝さんや、お子さんが行きたくつてたまらないので、いとこの桃吉さんや桃之助さん、御友達の桃乃さん

や、桃代さん、それから、モ、モ、モ、澤山の人を誘つてお父さんに連れて行つて下さいと御願ひしたので、二度目の兎狩りをする事になりました。流石桃太郎さんの催しだけ、日本一に恵まれた日です。

扱、西生田驛に下車して、驛の前で、一べん勢揃ひをして、いよく、鬼ヶ島、ぢやあなかつた、行樂園へ進撃しました。だら／＼上りの道を四十分程歩いて、十一時少し過ぎに、行樂園へ着きました。

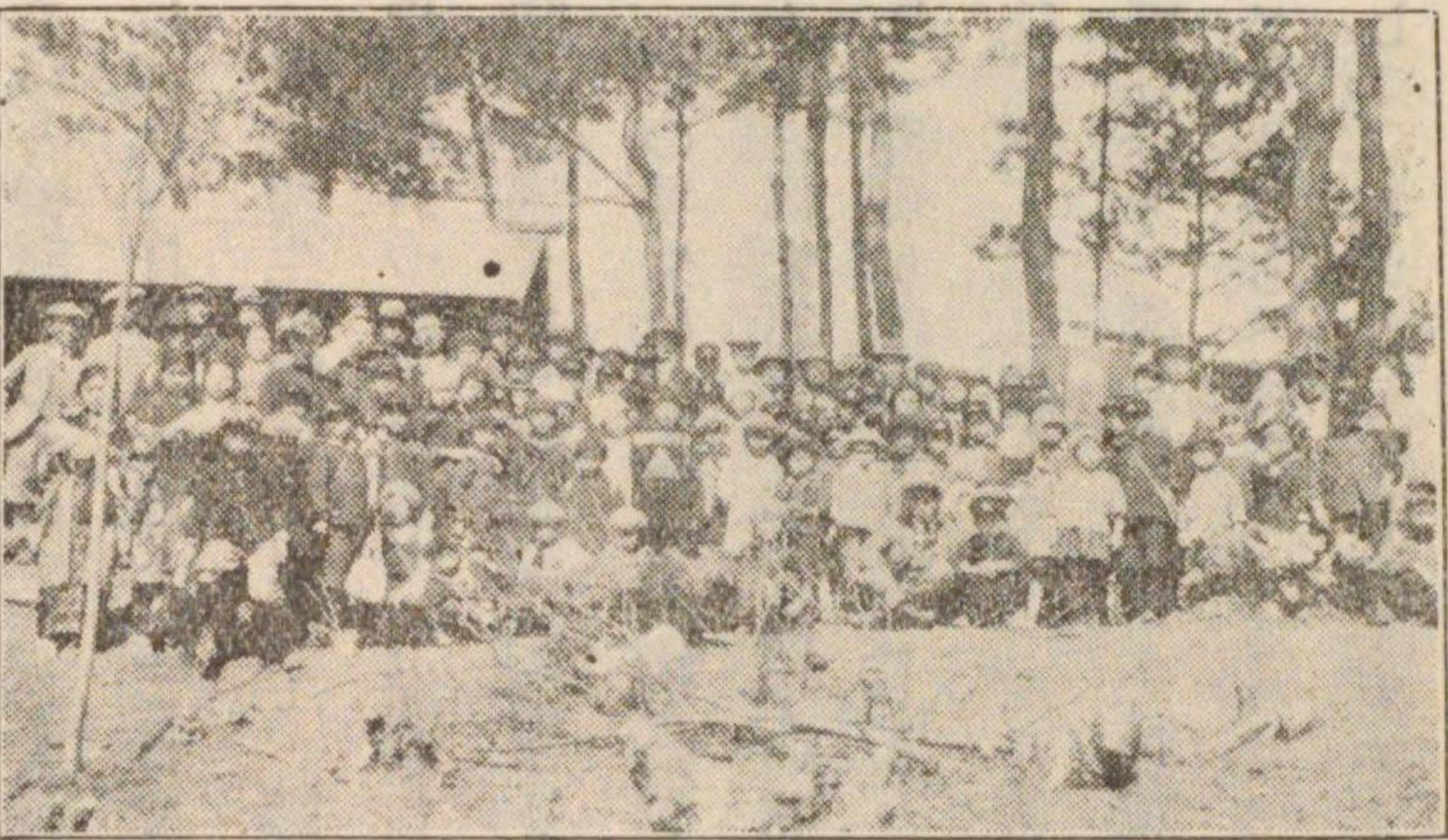
敵の城砦は、一面に金網を巡らしてあつて、大手の入口には番人が居ます。ピリ／＼と桃太郎さんが、呼子の笛を吹いて、サアお這入なさいと號令をかけますと、われ一番乗りの功名を立てようと、ドットうち入りました。兎軍は、びつくりして、右往左往と逃げ廻ります。何しろ一面の叢で、其中に、谷もあれば、崖もあり、其處を駆け降り、攀ち登りして、脱兎を捕へようとするのですから、容易ぢやありません。ソラそつちへ行つた、ホラこつちへ來た、と大きな玉網を持つて、追ひかけ追ひ廻して、トゥ／＼五十匹程生捕りにしました。ピリピリ／＼。呼子が鳴つたから、戦闘中止。お辨當となりました。みんなが手柄ばなしで夢中でお辨當を喰べました。

御食事休み中、あちこちを眺めましたら、向ふには大山、丹澤山から、遠く甲州の

山迄、薄雲の様に見えます。ホントに好い景色の所です。またピリ／＼／＼。午後の狩りがはじまりました。が、午前に餘んまり烈しく戦つたので、御飯を喰べたので、氣が重いか、前ほどの勢が無いので二時頃に切り上げまして生捕つた兎は、箱へ入れて、多摩川原へ進軍し川を渡つて京王閣で遊んで五時に新宿へ歸つて解散しました。てんでに、兎の這入つた小さな箱をさげて。

兎 狩 り

桃 枝



凱 旋 の 少 軍

木戸を開いて入れれば皆ちり／＼／＼になつてめい／＼／＼網を持つてかけ出して行く。

入らうとすると最早男の子が一匹の兎を抱へて嬉しさうな顔をして來た、すぐ捕ま

ると思つて喜んで居たが入つて見ると見つかつても中／＼捕らない、妹と手をつないで歩いたが兎が居たと思つて網を入れ様としたら笹がつかへて中へ入らない。その中に兎は逃げてしまつた。その時方々で兎を追ふ聲がする。

坂を上り下りして兎を追つた、その面白さは格別だつた。

朝の内は寒いとさへ思はれたのに兎を追つた後は汗だく／＼になつてしまつた。

午後から妹が二匹とつた、とれたと聞いた時は嬉しかった。私はとう／＼一匹も捕らなかつた、けれども追ふ事の愉快さは忘れられない。又兎狩りがあつたら行きたいと思つた。

兎 狩 り

桃 子

二十九日はたのしい兎狩りだつた。向ふへついてお話があつていよ／＼木戸が開かれた。皆は我先にとかけこんだ、そして兎を追つた。しかしいくら汗が流れ出る程早く走つて追つても午前中には一匹もつかまらなかつた。そこで一先づ休んで御晝御飯を喰べた。再び兎狩りにかゝつた。今度こそわと大へんな勢ひで木戸の中へとびこんだ、そしていくらかまへやうとしてもだめだ。氣を落して垣根に添ふて歩いてくる

と、小さい兎がうづくまつてゐた。そこで私はやぶの中にとびこんで兎を兄さんの方へ追つた。小さい兎でなく、早い、ちよつととまつたのを幸ひ、手でつかまへてしまつた。「しめた」と兄さんが耳を持つた。其の時向ふから追はれてきた兎が兄さんの體で行先をさへぎられてびたりととまつた、そこをうまく兄さんが耳をつまんだ。一度に二匹もとれた。其時のうれしさはたとへやうもなかつた。男の子で、お父うさんと一しよのかたが、一匹もとれないといつてらしたから、一匹あげたら、大へん喜んでらした。此經費一人當り一圓十錢。

和歌

三月ドンブリ會場の壁面にかけたる額に

「今夕只可談風月」とありければ、

旋頭歌一首

木規子

ひとみなはかくぞありたきかにもかくにも、
このゆふべかたらふことばさはにありとも。

【四月之部】

山陰の温泉めぐりと山陽道あちこちの旅

東京驛

京都驛

綾部 福知山 城山 玄武洞

期日 四月三日より六日迄

集合 二日午後六時半東京驛

發車 午後七時十分(神戸行)

下車 翌朝五時五十八分京都驛

乗換 京都驛八時十分(濱田行)

行程 早曉の二時間京都の町へ陸じやかな氣儘旅の第一步を印したる後山陰本線へ移ることにする。巡遊の先々は参加者相互の協議で臨機應變、氣樂な旅が目標である。先づ綾部、福知山の諸邑を車窓から眺め午後一時二十一分城崎驛下車、古來名高い温泉に一浴の後自動車を驅つて玄武洞の奇觀を訪れる。夫れから再び前進して

四月

一一二

岩井、東郷、三朝の温泉郷を訪れ第一日の宿泊地はその何れかに落付くことゝならう。翌日は残りの温泉を廻つて更に西進し、松江の水都を見て出雲大社に詣でる。多分即日玉造又は皆生温泉まで引返して第二夜を宿ることにならう。第三日は陰より陽へと中國横断の伯備線を南下して岡山縣に入り、北部地方の名勝を探り、文化都市倉敷を経て岡山に宿泊。最後に和やかなる播州路及び京阪の春色を賞で、此旅程を終る。

歸路 大阪驛六日午後六時四十五分出發七日朝歸京

山陰、温泉の旅

天 楓 生

三段づゝ向ひ合になつて六人一室、一室と云ふより一仕切りと云ふ方が適切であるかも知れない。寢具の備へ付はないから毛布と空氣枕は必ず御持参、と云ふ注意に従

つて夫々持込む。新らしく出來た三等寢臺の氣分を味ひながら、山陰の旅へ上らうと云ふ一行六人、東京驛頭の午後七時十分。

『では御機嫌よう』

見送つてくれた、同人の高橋(岩)大槻、楠瀬、戸田の諸君が帽子を振つて呉れる。愉快的氣持の中に何となく臉が熱くなる様な感じが起らないでもない。

『どうも有難う』

横濱驛では中山支部長が見送りに來られて色々頂戴ものをする、諸君の御厚意は何とも難有い。寢臺の感じは二等に比べて決して悪くはない、慾を云へば料金を取つて毛布を貸して呉れる位の深切サはあつて欲しいと思ふ。統制の必要上倉本氏を團長に推すことゝ極め、食堂へ這入つてビールの満を引き一路の平安を祈つて、早寝のことゝする。三日未明うすら寒い京都へ着くと會員の天津寄花堂氏が此早天に驛まで出迎へに來られたのに恐縮する、導かるゝまゝに清水の邊りなる御宅を訪れる。氏は京洛に聞えた陶器製作者で、色々の名作も多い、樂焼などに興じたが時間が尠ないので

四月

一一三

急いで驛へ戻り、八時十分發の濱田行へ乗る、大分込み合ふので閉口する。

◇ 所謂山陰本線の第一歩である、嵯峨から龜岡までの保津川の急流、名物の筏が流れて行く工合などは全く畫の様である、之を見て吉田さんが『保津川下りをやつて見たいね』など云ふ。汽車も斯う云ふ處を通つて呉れる時は全く安いものだと思ふ。

涼風や岩すべりゆく舟の綱

東京日々で募集した名勝俳句の保津川の句である。之れから園部を過ぎ、大本教で名を賣つた綾部を経て、福知山で大阪から來た準急行に乗り換へ、玄武洞、城崎温泉を車窓から一瞥して先を急ぐ、城崎温泉は先年の震災の跡は殆ど全く復興して、立派なそして新式な湯の町を形造つて居る、禍が轉じて福と爲つて居るのかも知れない。

◇ 岩美驛へ下りたのが二時十三分、岩井温泉行の輕便鐵道に乗り換へて二十分程で岩井温泉着。木島屋旅館と云ふに這入る。此宿は今から二十年も前に小松原サンが來た

ことのある家と云ふので何となく懐しい。此處は可成り古い歴史を持つた温泉場で町の中央に大きな共同浴場があり、主なる旅館には各々内湯がある、極めて質朴な湯の町で特色は入湯の際、湯かむりと稱して唄に合せて湯を被る、斯くすることが温泉中に含むラヂウムの發散作用を生じ、吸入が出來ると云ふのだソである。こゝから一里程で達する浦富の海岸は、山陰の松島など稱して能い景色である。時間のある人は行つて見る方が良い。斯くて又驛に戻り五時四十八分の下り列車に乗つて松崎驛で下車する、驛構内の早咲きの櫻が夜目にも美しく、深切な助役さんの態度も嬉しかった。

◇ 憧れの東郷温泉、養生館の一夜は何とも云へぬ印象的なものであつた。蘆荻の繁つた東郷湖畔には三ツの温泉場がある、驛前が松崎温泉、驛から七丁で東郷温泉、對岸の淺津には新東郷温泉、以前は淺津温泉と呼ばれた。私達は東郷温泉の養生館に一夜の宿を求めたのであつた、宿は可成り湖中に突出した洲の先端にあるので、縁先から見た様子は全く湖中に浮かんだ氣分である、時は好し恰も満月、清く澄んだ、まんなまるの月が、小波立つ湖面を靜かに照して居る、給仕に出た少女も人擦れがして居な

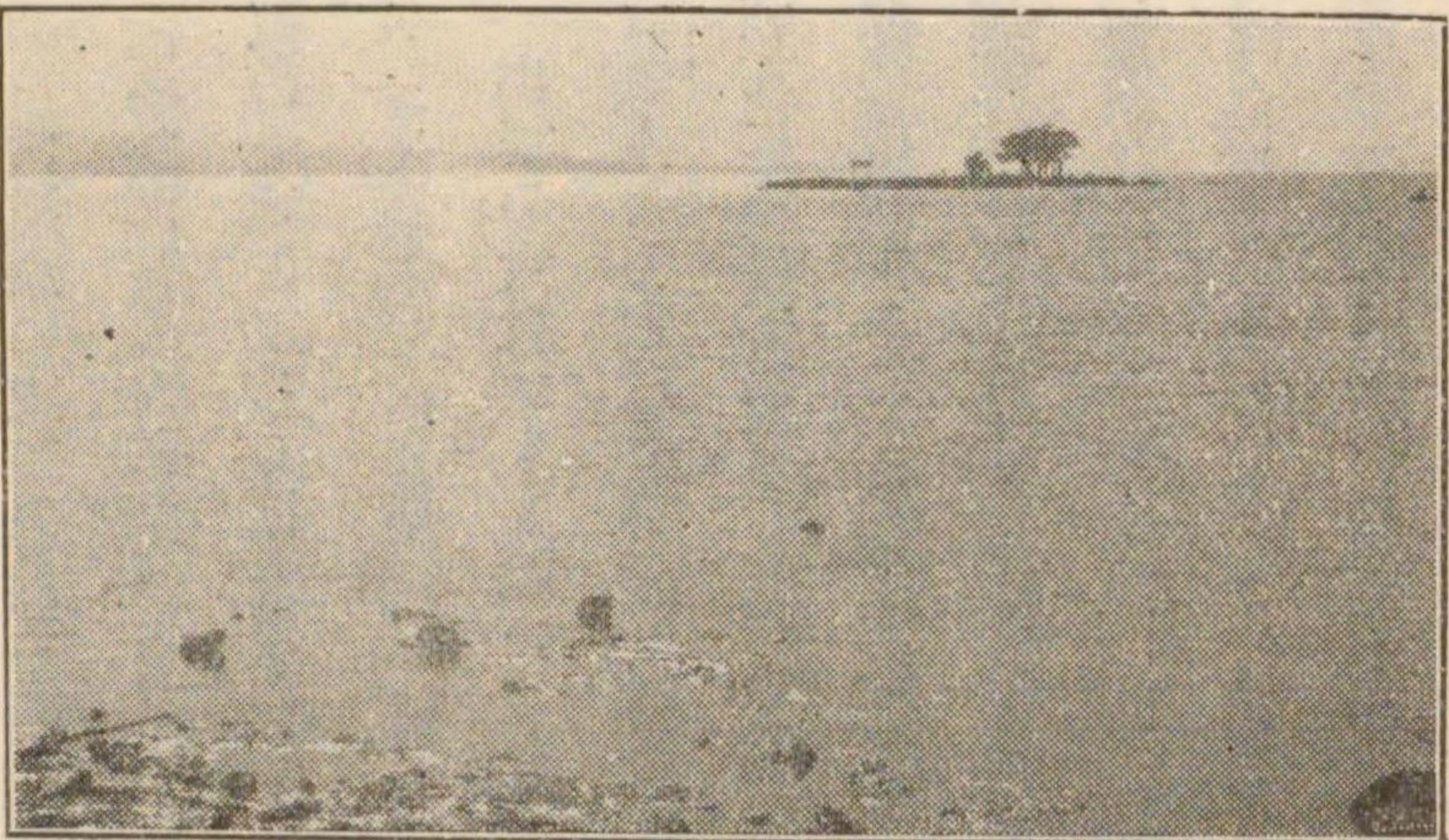
いで、優しい此場の情景に適應はしい。フト床を見ると巖谷小波氏の一句が軸になつて居る。

長者なら雲買占めよけふの月

軸を見、中空を望む、恍惚として言葉も出ない、感に入つて無暗と詩的なのがM君、兎に角酒が好いと杯を重ねるがT君、S君、温泉などは暫し忘れられた形と爲る。



山陰の温泉巡りをされる方は是非共東郷温泉だけは一泊のプランに入れて欲しい、落付いた感じの良い温泉場である。四日早起出發、松崎の次驛上井に下車して三朝(みささ)温泉へ向けドライブする、二里ばかりである、平野の山に入らんとする處、三朝川の流を挟んで兩岸に湯の宿が立ち並ぶ、岩崎旅館に入り一浴小憩、此温泉はラヂウムエマナチオン量最も多く、甲州の増富に次ぐものと稱されて居る、尙此近くでは上井驛から分岐する倉吉線の終點倉吉から二里強の關金温泉も一訪の價値ある處と云ふ、上井驛から下り列車に據つて大社に向ふ。此邊からは山陰第一の高山大山が其偉容を左窓から見せて呉れる。



美光風の湖道宍

此處を水都と云つて居る、中の海と宍道湖とを控へた松江は全く水の都であり詩の國

御來屋驛へ來ると左窓から船上山が近く見える、元弘年中名和長年が隱岐島から後醍醐帝を迎へ奉つた遺跡である、近くの名和神社は長年の邸宅跡であると聞きしも時間の都合で參詣せず。米子を経て松江に向ふ、既に出雲國へ這入つて居るのだ、太古、神話、素盞鳴尊、などの文字が頭の中に湧いて來る。右窓に中の海が見え出して行けどもくつきない、馴染深い安來など、云ふ驛もある。松江へ着くと今度は有名な宍道湖だ、中の海と宍道湖とは大橋川に依つて連らなつて居る。宍道湖の眺めは靜かで美しい、長野を佛都別府を泉都など、云ふに比して

である。

宍道湖に夜長の月の出をめぐり

名勝俳句の宍道湖の句である、小泉八雲（ラフカチオヘルン）が好んで住んだと云ふ程の土地と正しく見受けられる。

◇

出雲の大社はもう近い、今市で乗り換へて直ぐである、町の名は杵築であるが驛名は判りよく大社と爲つて居る、驛から大社まで十二町、乗合自動車ガソリンの煙を旺んにあげて居る、大國主尊によつて榮えた太古其まゝの杵築の町も自動車が我もの顔の横行である、デモ大社を拜して昔ながらの其宮造り、他の神殿とは趣を異にした建築法は寔に莊嚴の極みである『かたじけなさに涙こぼるゝ』である、神社は云ふまでもなく古日本の王者大國主神を祀り、創建遠く神代にあり、八百萬神の集合地であると云ふ、面白いことには毎年十月は各地では神無月と云ふが、此地にあつては神有月と云ふのであるソである。

出雲大社を辭した一行は午後一時十五分發の一畑電鐵の客となつて宍道湖の北方を

巡り、流行佛の一畑藥師へ詣るのであつた。時間の餘裕さへあれば日の御崎へ出て、史上に名高い稻佐の濱へも廻るのが至當であらう、一畑藥師は出雲第一の流行佛で眼病に靈驗があると云ふ、電車を下りて約十丁も登る石段は決して樂ぢやない、寺背の見晴し臺からは日本海の波濤が一目である。此電車は殆ど宍道湖を半周して居るので湖畔の風光を味ふには此上なしの眺へ向きである、前に載せた寫眞はその東岸に近い嫁が島で、湖面に畫龍點晴の妙味を與へること多大である。

松江名所はかすくあれど

千鳥お城に嫁ヶ島

◇

千鳥城は一畑電鐵の終點北松江驛から直ぐ目の上に仰がれる。今は公園になつて櫻樹が多く、折柄花の眞ッ盛りである。城は慶長十二年堀尾茂助吉晴の築く所、寛永以來松平氏の居城として名君不昧公を直ぐ連想させられる、山陰地方で天守閣を保存する唯一の城址であるとか、天守閣から見下ろす眺めは無類で、宍道湖は直に脚下に迫り、續く中の海、夜見ヶ濱の大天橋遙かに伯耆富士の大山が手にとる様である。お城

見物をすませて市の要部を横ざり有名な松江大橋を渡る。

松江大橋流りよと焼きよと

和田見通ひは船でする

お馴染の安來節で有名な大橋は將に水都の中心をなして居るのである。湖畔から汽船に身を託して午後五時十分出發、一路美保の關に向ふ。

◇

東京を去る二百四十里、山陰の果てへ私達は今來て居るのだなとフト考へる。夫れから其れへと飛ぶ様に駆け巡つて居る旅のルンペン、一切無念無想、何事も忘れて只管リーダーの命のまゝの傀儡となつて動いて居るのだ。それだけに私達は氣は樂で恰も子供が親父に連れられて居る様な氣持がする。之と同時にリーダーの責任と氣苦勞は實に大したもので、何とも恐縮の次第である。然し翻へつて考へるに團員とリーダーとの關係は之れで宜いのだと思ふ。彼等は一切を舉げて信頼せば之は全責任を以て引受ける。なまじいの容喙や世話焼は無くもがなである。兎も角、此行のリーダー小松原氏が會遊の地にも不拘、熱心な斡旋に對しては一同滿腔の謝意を表するに吝な

らざるものである。之れも我クラブ氣質の發露であらう。

◇

舟行二時間弱で美保の關に着く。日は全く暮れて港の水が赤い、こゝは島根半島の東南端で三面は山に圍まれ、濱に沿ふて狭長な町を形造つて居る繪の様な港である。國幣中社美保神社は直ぐ近い、宮は大國主命の長子事代主命を祀つたもので、俗に云ふ惠比壽様である。此地は有名な歡樂境で、町全體が狭斜街とも見られる。

關の五本松一本伐りや四本

あとは伐られぬ夫婦松

の唄で名高い五本松は直ぐ左手の山に見える。時間がないので急いで船に戻つて七時五十五分出帆夜見半島の突端境港へ上陸したのは夫れから三十分許りの後であつた。境線の汽車で三十分程、米子驛へ下車して二里餘の夜道を自動車で飛して着いたのが皆生(カイケ)温泉の靜養館。今宵の宿を此處と定め十時近くに成つてヤツと旅装を解く。早朝の三朝温泉行から此處までよくも稼げたものだ和我乍ら感心する、此温泉は美保灣に面し、弓ヶ濱の白砂青松の地に開けた新温泉で海上遠く隱岐の島を望んで

風光海闊、昨日の宿であつた東郷温泉が地味に陰性であつたに對し、何と夫れが陽氣

であることよ。旅館は皆料亭を兼ね、脂粉の香

も濃厚である。此形勢に左黨の御連中は何條黙

して止むべきや、二三の唱歌子を聘して痛飲夜

を徹すとかや、吾輩無粹其窮極する處を知らず。

旅道の先進、飴ン坊氏の皆生温泉を讀める。

廓めき又市場めき皆生の湯

一句能く此温泉の全約を云ひ盡して餘りあり

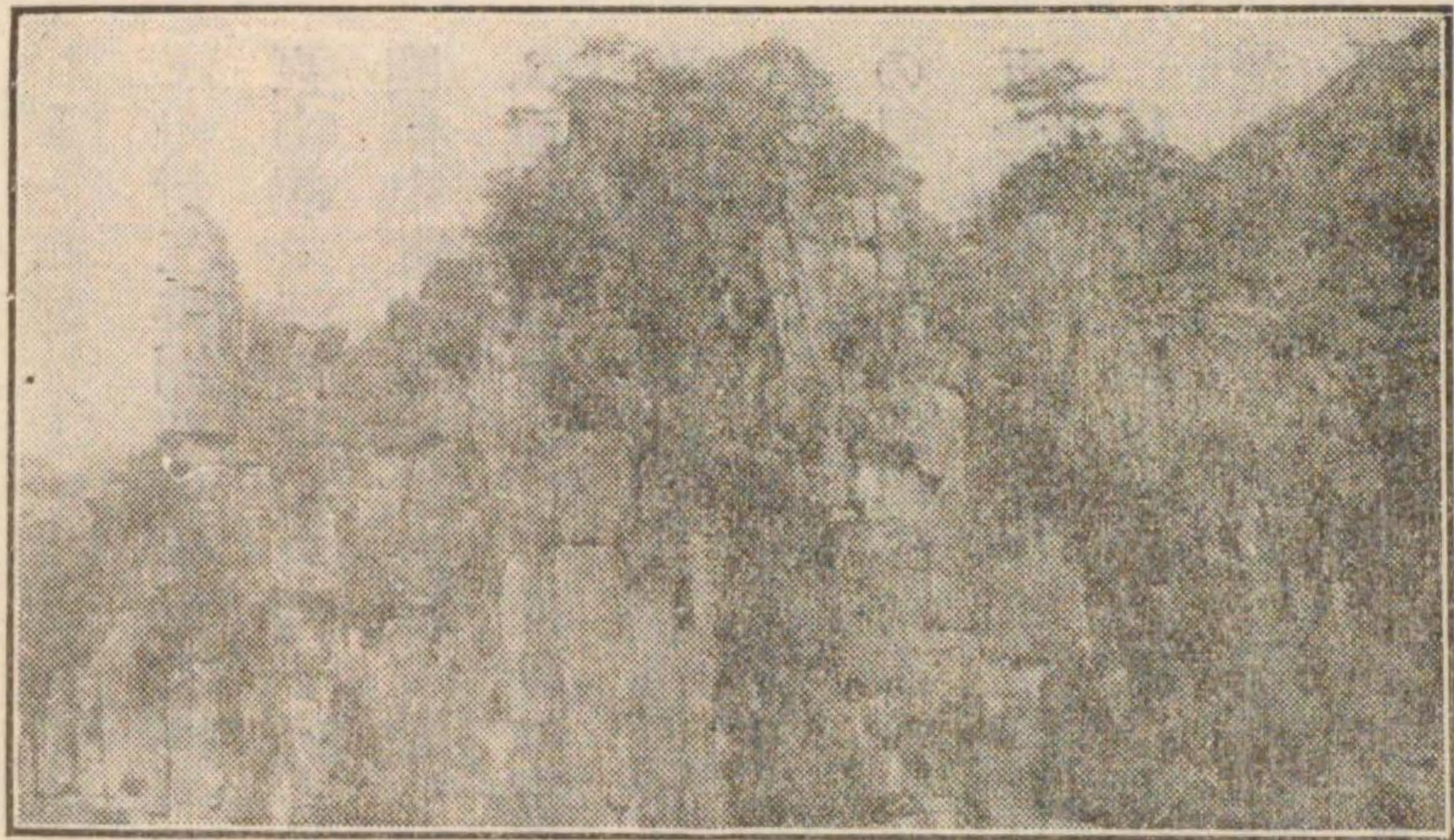
である。

夜中の小雨も出立までにはからりと晴れた。

五日の朝折角馴染んだ山陰の地に別れを告げる

日である。近來めき／＼と發展し聽ては山陰第

一の都市たらんとして居る米子から乗車し、伯備線に依つて山陽へ出ようとするのだ。



豪溪の奇勝劍ヶ峰

一條の鐵路は日野川に沿ふて、出雲街道を南に向ひ、十重廿重に横たはる中國脊梁大山脈を横斷するのである。沿線には溪谷の美もある、山から山へ満開の櫻花も見られる。豫定では新見で乗換へ作備線にて神庭の瀧及兒島高德によつて有名な作樂神社へ廻る案もあつたが、連絡時間がうまく行かず之は見合せて後日に譲り、備中の豪溪を訪ふこととした。即ち南下して宍粟(シサワ)驛下車約一里半の山路をドライブして達する横谷川上流の溪谷が其れである。主として花崗岩塊がつくる處の一大奇勝で、幽邃、怪奇、之を詳に説くべきのすべなし。甲府の昇仙峽に似て更に壯剛の氣加はるを見るべく、豪溪とは能くも名付けたる適切の名稱哉である。此の地方旅行の方に一遊をお奨め致したい。

午後二時四十一分倉敷驛に下車鶴形山公園から同市の繁榮振りを一瞥し、倉敷天文臺、大原獎農會農業研究所等を參觀の後次列車で岡山市に赴く、市中見物から鳥城を背景とせる閑雅幽邃の後樂園に遊ぶ。一行中の杉山氏御親戚の會員杉山岩三郎氏の御好意で料亭備前家に招待され、旭川の清流を眼下に臨む瀟洒たる座敷に納つて手厚き

晚餐の饗を受ける。宴終つて山長旅館に一泊した。

明くれば四月六日、當旅行の最終日である。午前八時五十分岡山驛出發、神戸に至つて半日の快遊を試みる。神有電鐵と自動車の便を藉つて六甲山頂に登り更に名湯有馬温泉を訪づれて近時の發展振りを見る。温泉をめぐつて散在する諸名所を探り、名高い温泉に一浴して神戸に引返せば上り十四列車には間もない時刻であつた。復た三等寢臺車の客となり收穫多かりし陰陽兩道の旅を終つて一路歸京の途に就いた。此經費一人當り四十五圓。

高尾山景信山より山稜縦走陣張山へ

期日 四月五日(第一日曜日)
集合 午前七時十七分新宿驛
發車 新宿午前七時四十七分
下車 淺川驛午前九時一分

淺川山驛 高尾山 清瀧院 武藏野 案下峠 案丸峠 萩ノ丸 明王山 陣張山 中央線 興瀨驛

行程 淺川驛から高尾山下迄自動車、清瀧から高尾山迄ケーブルカー、索道車を降りてから、巨杉の間の參道を行つて藥王院に參詣、更に六〇一mの見晴臺に立つて第一次の展望をなし、それから勅使道を辿つて城山を経て五九〇mの小佛峠に立ち、改めて七二七mの景信山に登る。武藏野の大部分は双眸に收むることが出来る。この邊で行厨を開くことゝならう。小憩の後出發武相國境の山稜を縦走して堂所山、案下峠、萩ノ丸、明王峠等を越えて八五七mの陣張山の頂上に立つ、高度の割合に國境に聳ゆる關係上無類の眺望を持つてゐて、中央線に沿つた山々は凡ね見渡すことが出来る。充分休憩の上、萩ノ丸迄引返し、それより往路に分れて一路興瀨驛に降る、徒歩距離約廿三軒、難路でない。

歸路 興瀨驛午後六時三十七分發午後八時新宿驛歸着解散

用意 辨當、水筒等

天候 雨天中止

地圖 五萬分八王子、上野原

雨の高尾山行(紀行)

紫陽生

新宿驛は御花見の御客様で一杯だった。集合時間より少しく遅れて馳せ参じたので、會旗を一生懸命に見付様とするけれども、團體客が列をなして居るのでマゴクする。漸く小池君の顔と會旗とを見出す、市野君も楠瀬君も見えて居る。聞けば楠瀬君は御子さんが御悪いにも不拘、此のコースの幹旋役となつて居られるので、参加は出来なけれど、新宿驛だけのサービスをなさる爲め出向かれたとの事。此の責任觀念の強い同君に對し満腔の感謝をなしつつ、ホームを離れたのが定刻の七時四十七分。車内は文字の如く立錐の餘地もない程の混み方、目的地に行かぬ前から、もうへべレケの花見客が何やら大聲叱呼して居るのも春に相應しい情景である。

立川で相當の降客があつた。淺川驛では半分位降りたらしい。驛前の乗合自動車は

忽ち満員一同ブラ下つてケーブル前に着く、恐しい様なケーブルに乗つてそれでも文
明の有難さをツクム、味はつて山頂に着し一同揃つて社前に額き旅運長久を祈る。

見晴臺へ出た頃は雲行が少しく怪しくなつて来たけれど、石井天文子の後晴れると
云ふのに元氣を出し、此處より御差支へあつて歸へられると云ふ半田氏を無理矢理に
小佛の上迄と引張つた罪な人もある。(半田氏も此處で歸へられ、濡れずに済ん
だ)

此日はクラブとしては珍らしい顔觸れでスキー以來姿を見せない池田仁堂氏、其れ
に内山嬢が紅一點を添へてなか／＼賑かだつた。見晴臺から急坂を降りた頃ポツリ
／＼降り始めて来た、途上に憩ふ村人に天氣を聞けば「大丈夫でがさア」と事もなげ
に答へるので、安心して城山指して進む中に雨は次第に降り募り遂に松林中に一時雨
宿りをする。一行中にはチャンと雨具を用意された方も二三あつたが大部分の方は濡
れ鼠で殊に石井天文子は如何したのか和服で参加されたので大弱り、但し後晴れると
先刻斷言された手前「間もなく歇むよ」と先頭になつて進まれる。折よく城山の上に

は花見時を見越しての假小屋の茶屋があつたので、是れ幸と僅か一坪程の處へ十三四名雪崩れ込む、雨は益々烈しく降つて来る遺の天文子も「今日は駄目だ」と仰言る。此處で小池老の發案で一同前進を中止し中食の上千木良に一直線に降り自動車にて與瀬へ出る事に變更し天井から漏る雫に首をつぼめながら行厨を開く、時に十一時十分。



中食後村人の携へて來た蕨ゼンマイ等を各自家土産にして雨で滑る道を降り始める今度は休憩中に夫々急造の手製の雨具を着けて居るので悠々と歩いて居るけれど其の姿や頗る珍で東京に在る時は立派なジエントルマンもテントシートを頭からスツポリ被つて首の處を荒縄で締めて居られる等は珍中の珍、石井氏は哀れや足袋既に尻端折り、桐油紙をグル／＼捲いてショボ／＼歩かれる。然し此雨の爲前面に見ゆる丹澤の山々は煙り近くの谷々も何となく黒ずんで一幅の墨繪を見る様な感があつた。

千木良の部落で一寸休んで自動車を待つ、一行中雨に心配のない元氣のいゝ連中は與瀬へと一足先きに歩き出す、意地の悪いもので何だか段々空が明るくなつて來た様

な氣がする雨も大分小降りになつて來た。一同與瀬へ着いて列車を待つ間に雨も歇んだ、程なく満員の列車に乗込む。幸にも電氣機關車だったので小佛のトンネルも苦しまずに通る事が出來た。近く中央線が全部電化し小佛童子の煙の苦しみから脱する事が出來る様になつたら吾々旅行狂はどんなに喜ぶか判らないと同時に此線への進出も相當ある事と思はれる。

淺川八王子共に満員の上へ更に詰込まれたので遂に一同新宿迄立通しであつた。斯くて豫定よりも二時間程早く新宿驛へ歸京解散した。此經費一人當り二圓。

家族連れで倉見堤のお花見

期 日 四月十二日(第一日曜)

集 合 午前九時三十分新宿驛淀橋口(小田急改札口)

發 車 午前十時小田原行

下 車 河原口驛十一時

相摸川
大丹山澤
お花見
官幣中社
寒川神社
小出村
浄見寺
戸塚
柏尾川
横濱驛

四月

一三〇

行程 驛を出て直に相摸川の堤上を摘草でもしながら下流に向つて歩を進むれば四
料程で倉見に着く。此處は餘り世人に知られて居ない丈け雑沓もせず子供連れで行
つても酔漢に脅される心配もなく且つ相摸川を隔て、丹澤や大山の遠景を見られる
お花見は他に有るまいと思はれる。満開の櫻花の下に家族打揃つて携帶の辨當を開
く、午後は麥は伸び雲雀は高く舞ふ野邊をブラ／＼一の宮なる官幣中社寒川神社に
参拜し小出村なる浄見寺に大岡越前守の墓に詣りて茅ヶ崎に出で、四時二十分發に
乗り込み戸塚の近く車窓より柏尾川の櫻花を賞しつゝ五時横濱驛着解散。

注意 右の豫定ですがお花見がお氣に召したら午後のコースを止めて倉見堤で遊び
相摸鐵道で茅ヶ崎へ來てもよし、何れ共倉見で御相談致します。

用意 辨當及水筒

天候 不論晴雨

地圖 五萬分、藤澤

倉見と柏尾川のお花見(紀行)

はなぶさ

お花見も酔漢が暴れる所では子供連れでは危険と思つて、餘り世人に知られない倉
見の櫻を選んだのだが、雨模様の中合と花時に珍らしい寒さまで、参加者が少かつた
のは遺憾であつたが、會報に不論晴雨と發表した以上、如何なる天候でも決行すると
夫人同伴で参加された小松原君の意氣に、天も氣を吞まれたか、夜來の雨も止んで、
終日降らずに持ちこたへたのは幸であつた。

十時新宿發の小田急で十一時少し過ぎ、相摸川岸の河原口驛に下車、堤上は道が悪
いとこの事に、戸塚への街道をブラ／＼行く、雨上りとして塵も立たず、静かな農村を過
ぎて、相摸川の河原に出れば、遙に丹澤の連山が南畫の様に霞んで見える。豫想より
遠く十二時半頃倉見に着く、櫻は満開だが、寒さの爲めか、いちけて居る様だ、一重
の櫻は何處も今日一日の壽命、此の寒さでは人出も少からうと思へば年一度の花時を

四月

一三一

目當の商人は可哀想だ、天何ぞ無情と怨まざるを得ない。花を眺めながら堤上を行けば、驛の近くで横濱から参加された豊間根君に會し、辨當を濟して驛に戻れば、進行して来た汽車の中に中山沖右衛門君を發見した、聞けば自動車にて厚木を廻つて來られた由、熱心敬服の外はない、大分賑かになり、共に一時三十八分の汽車で次驛寒川に下車し、俗に大門と稱して居る、松並木の表參道より進んで、寒川神社に參拜する祭神は寒川比古命、寒川比女命で、相摸國、十三社中、唯一の國幣中社である。去る十二年の大震災で全潰したのだが、昭和二年以來順次新築成り、中門は最近落成した計りとて、檜の香未だ失せぬ、境内の八方櫻を始め十數本の櫻は今を盛りと咲き競ひ周圍の常盤木を背景として殊に美しかった。驛に戻れば丁度都合の好い臨時列車の揭示が有るのに、出る様子が無い、驛長に尋ねれば、ソレハ一時間間違つて居ります、と澄して居るには驚いた。コンナ揭示を十日も前から平氣で掲げて置くのだから、流石は田舎は呑氣なもの、暫くして汽車は着いたが改札を忘れて、乗客をホームから乗り込ませる事が出來ず、踏臺で線路から乗り込ませられたのは生れて初めてであつた。尤も相摸鐵道は砂利運搬で主なる収入を擧げて居るのであるから、乗客等は眼中に

無いのかも知れぬ。然し砂利は多摩川のより品質が善い相で、明治神宮の神域に敷き

つめられた砂利は此寒川神社前の河原より採取されたもので、其區域は現今でも標杭を建て、保存されて居る。



倉見堤の櫻

二十分程で茅ヶ崎に着き、乗換時間を利用して舊東海道に出で、廣重の畫にある様な松並木道を散策して驛に戻り、四時二十分發に乗り込めば、車中はガラ空き、大船を過ぎれば車窓から柏尾川堤の櫻が見える。一年増に花も見事になり、花見客で賑つて居る。中山君の御話に依れば、來年は此堤下の畑に一面菜の花を咲かせて風致を添へる計畫がある相だから、車窓からの眺は尙一層増す譯で、無精者には持つて來い

のお花見場所とならう。スピード時代にふさはしい一日に二ヶ所の御花見をして五時

横濱驛に着き、一同打揃つて、ニューグランドのドンブリ會へと急いだ。此經費一人當り一圓六十一錢。

小金井の名木調べと立川農事試験所參觀

期日 四月十九日(第三日曜)

新宿驛

集合 午前七時半新宿驛本屋

武藏境驛

發車 午前八時頃發電車

小金井

下車 武藏境驛

行程 小金井には昔から有名な櫻が數多あるのだが何等立札が無いので何れがそれと分らず、あたらし名木も不遇を嘆じて居るに同情した小池君が我クラブの事業として此れに標識を建て様との提議をされたので其下調べとして専門家に御案内を願ひ行く。御説明を伺つて高尚な觀櫻會を催す積りである。

午後は満開の櫻花を賞しつゝ木瓜の花咲く上水端をブラブラ約五軒で立川に出で府

立川驛

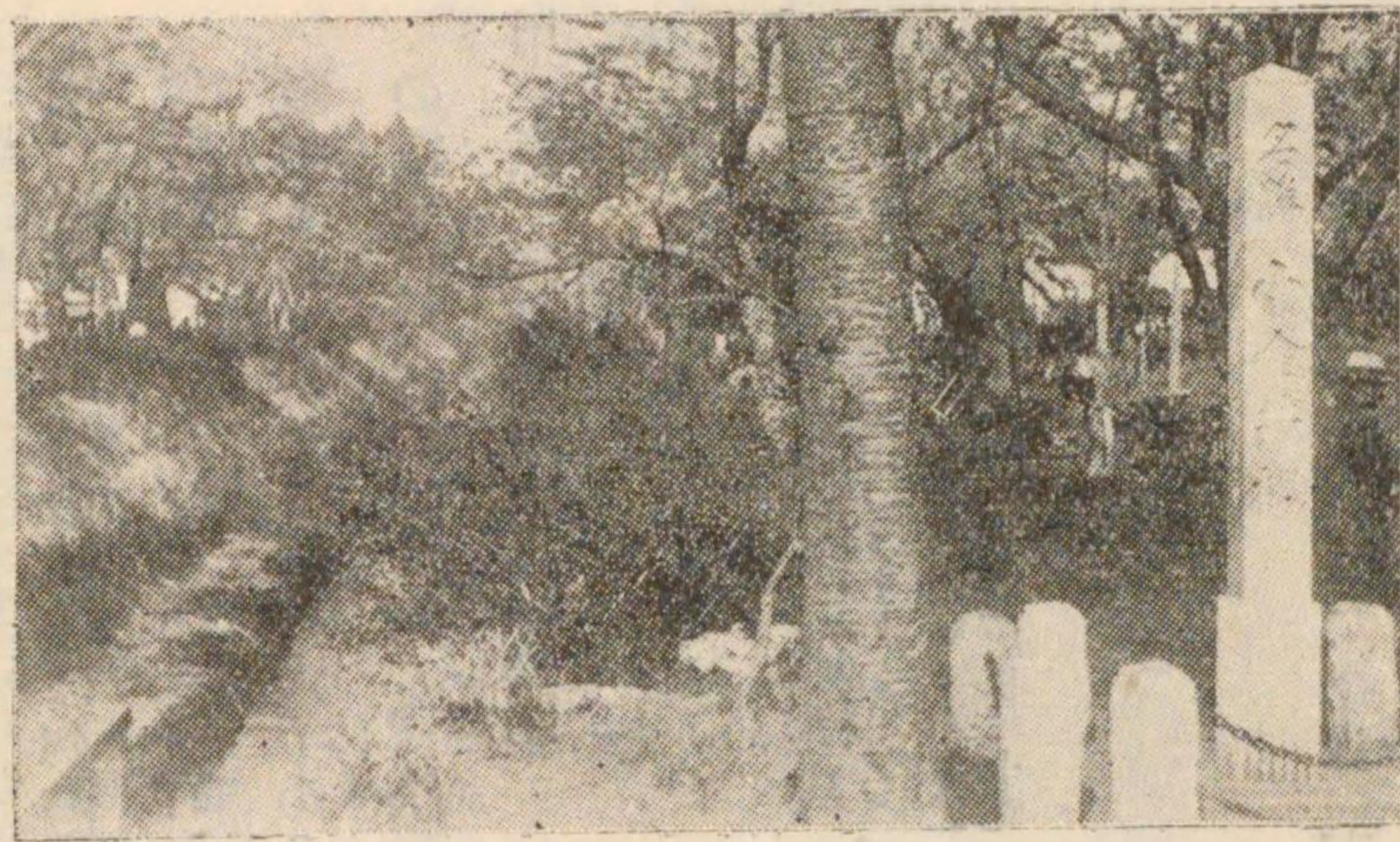
立農事試験場を參觀する。丘から多摩川べりにかけ廣さ約二十萬坪、蔬菜、草花、果樹、温室もの等の試作は勿論牛、豚、鶏、七面鳥、家鴨、鳩、鶯、兔、鼯、鯉、食用蛙、かたつむり迄も飼育してあるから、植物園と動物園とを合した様で子弟の教材として益する所多大である。近くなる飛行場にも立寄つて立川驛に戻り五時頃の電車にて新宿驛に歸る、全行程約九軒。

用意 辨當及水筒必ず携帯
天候 不論晴雨

小金井に櫻の名木を調べ立川に 府農事試験場を觀る(紀行)

悠々生

前夜の雨に氣づかつた今日の天候、豫報には東北の風雨とあつたのを見事に裏切つて朝から快晴の第三日曜に喜び勇んで子供を伴ひ出かける。



馬に鞍を置く

午前九時頃武藏境驛に下車した一行は、半田氏の斡旋で、東京市公園課の小川氏の待合はされて居られたのに随伴して、境橋から兩岸にある櫻の説明を得つゝ歩みを進める、何せよ今日は通り一遍の花見ではなく、二百餘年を経たる種類稀れなる小金井の名花を世人に知らしめたいと、同人小池氏が我クラブの事業の一として、櫻樹の名稱の標識を建て様との提議があり、就ては専門家の意見を徴し様と公園課の賛助を得て、小川氏の説明を聞きながら、詳細に樹相から花容を觀賞しつゝ行くのだから、別個の趣味と愛情が湧いて来る。

小金井の櫻の特色は、吉野や櫻川とは異り、其等の内の優品のみを移植したるものなる故に花瓣の形状、色彩並に若葉の色の多種多様にして、美麗なると共に、芳香を放つもの

が尠からず、地味に好適したる爲め、生育亦見事なる上、其所在地が都會の塵芥喧噪煤煙に遠ざかつてゐる事である、加之富士を背景とした櫻の並木や、清い上水に映する花の姿は、他に比類がない、故に開花の頃兩岸の風色が如何に美觀を呈するかは想像に難くないであらう——とは東京市役所から頒つ『名勝小金井櫻』の内の一節である、此の名木の多いのを、専門家以外には知る人は尠ない、櫻を愛せよ櫻を保護すべし、と言傳しても櫻に就て理解がなければ、愛護の實は擧げられない、——知は愛を生ず——である、此の小金井の名木を普ねく知らしむる方法を講じ、花見客をして櫻愛護の觀念を生ぜしめ、花を損せざる様、櫻樹を保存する様、一般に鼓吹し様といふのが我クラブ今回の企である、然し立札などして明らかに標識をなし名花を目のあたりに知らしめては世の不徳なる功利者の爲に、盗まるゝ憂ひありといふ、市公園課内での杞憂も、多年公園管理に苦慮して居る人の言として一應の理はある、さりながら天下の名木を専門家以外に知る機會を得ざらしむるは、我が國花を眞に愛護し觀賞する趣旨に添はない嫌がある、宜しく如實に公表して、貴重なる所以を説き、觀賞の道義心に訴へて、愛護の通念を作る迄に進まなければ徹底的でない、と言ふのが我クラブ有

志の主張である。市並に櫻の會などの協力と地元諸氏の熱烈なる賛同を得て、近く實

行したいものである。斯く感じつゝ、萌え出た若葉に多種多様の花の開けるを仰ぎ眺めながら櫻樹の記號のある巨木と引合せて、櫻花圖譜を兼ねた臺帳を披き説明される小川氏と共に靜かに觀賞すれば、櫻花心ありてか風なきに幾英かの花瓣散つて、我衣袂に入るも一篇の詩中を逍遙する趣がある。

御

幸

櫻

日の出櫻の勢よく満開せる美觀を賞し、其の他入日の櫻、三吉野櫻、六瓣櫻、御幸櫻、霞櫻、東天匂、小金井匂等の老木巨樹名木の下に佇んで、心ゆくまゝ觀賞した。觀櫻第一の地點たる小金井橋上下流數町の地域は、保護指定區域で

大正十四年九月の調査に依る櫻樹の數は、一千四百六十本である、此の附近に花見客



は雑沓して居り賑ひは非常なものであつた、花を愛する同胞よと思へば、假裝の人も酒

に酔つた踊り狂ふ人等にもある親みを覺えた。

斯くて名花五十餘種を巡覽し觀賞すること三

霞

時間餘で一通りの行程を了し、堤上の雑草の上に座し足を伸して行厨を開く、長い堤上の櫻花を眺めながら、麗らかな春の日を浴びて居れば大自然と融合する心地する、微風に散る花英を浮べた清流を俯瞰すれば、此處にも亦ある哲理を覺ゆる、櫻を植えた先人の明を追憶する念も深かつた。

櫻

立川の東京府農事試験場に着いたのは午後二時近くであつた、麥は伸び桑の芽もあらはれた。試験場では休日にも拘らず、小山田技師其他係

員の懇切な案内によつて場内を一覽した。先づ休憩室で搾りたての旨い牛乳の饗應を



受けて渴を醫した。當試験場は丘から多摩川べりへかけ廣さ二十町歩もある景勝な地に各種の農作物は勿論、牧畜類も一通りは飼育して居るから、詳細に見るには數目を要するものである。農具の各種の珍しいのを見て、豚舎の入口に『クレゾール』液の容器があり、參觀者は皆靴の裏を浸してから這入る事にして居るなど、病菌の豫防に細心の注意しあるを思ふ。ヨークシャ種が幼児に乳房を與へるに各自に定つて居ると聞き、彼等の習性と、敏感な本能とは生物に變りなきをうなづく、牛舎を見るに、昨年アメリカより購入した二百數十貫もあるといふ巨大な牝牛が横つて居る、日に二石何斗の乳を搾るといふことである。鶏舎には各種の鶏から、七面鳥、家鴨、鳩その他多種飼育されて居る。

更に歩を轉じて崖を下り南向の好位置を占めて居る温室に入り各種蔬菜の結實して居るのも珍しく見た。花卉類の珍奇なものゝあるも申す迄もない。促成場では茄子胡瓜などの開花して居るなど、その管理の苦心を察する。圃場に植ゑ出す各種の苗の育成場の手入れも行届いて居る。日本式庭園の池を見てから果樹園へと案内される。桃が花盛りで美しい、梅の盃状剪枝や、柿栗なども整枝がよく行つてある、洋種葡萄

も棚作りしてあり鐵線を張りつめて堅固に作つてある。菜の種を採るに他花の交媒を避けて寒冷紗を掩つてあるのも試験場ならでは見られぬ圖である。近く耕すべき水田への水路の築造に人夫が石を積んで居た。流れを利用して鯉や鮒が飼つてある。高地低地崖地から水流まで寸分の無駄なく、巧妙に土地を利用してあるのを見て益する處が多かつた。此經費一人當り七十九錢。

鶴見川崎工場見學

期 日 四月廿六日(第四日曜)

集 合 午前九時鶴見驛總持寺側(山手側)

行 程 毎月一回定例見學旅行に今月は震災後異常の發展を遂げたる鶴見川崎埋立地方が選ばれた。同地方は故淺野翁の經營にかゝる東京灣埋立會社の手に依りて廣大なる土地が埋立てられ近年其の上に有數の諸會社が先を競ふて工場を建設したので昔年の姿は全く消え失せ今は林立せる煙突から吐き出す煙も物凄く完全なる工場地

川鶴
崎見

安善通驛
鶴見

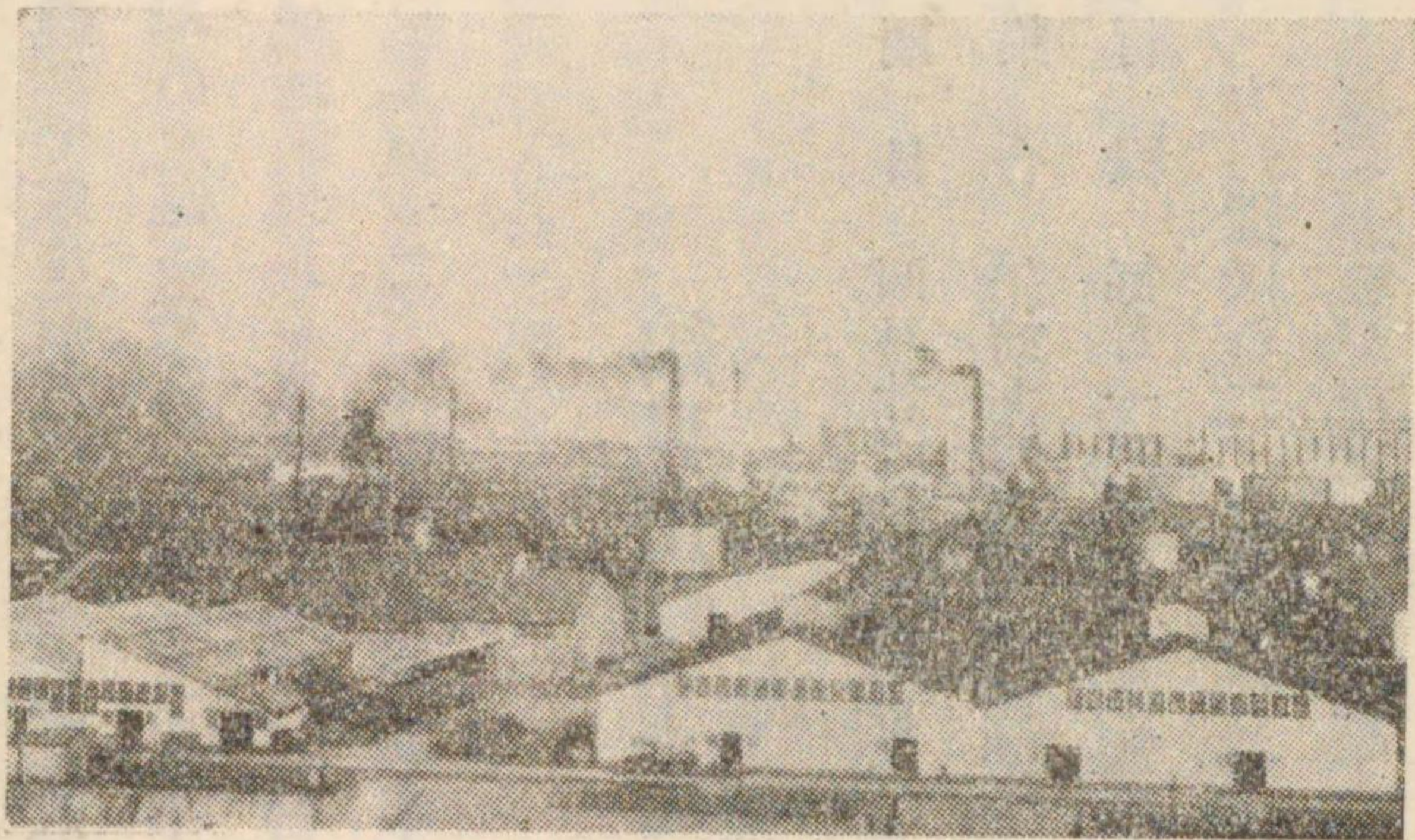
大川驛

東京灣

四月

帯となつた。先づ極く最近敷設せられた此の工場地帯を貫通する臨港電車に乗りて

一四二



鶴見工場地帯

安善通驛下車驛前の東京瓦斯の鶴見工場を訪れる。同工場は東京瓦斯會社の諸工場の中で最近完成せる工場として其の施設の優秀なるには何人も驚くに違ひない。一巡の後更に電車に乗りて大川驛下車日清製粉の工場を見學する。同工場は本邦最大の製粉工場にて製造能力は二萬バレル以上に及ぶと謂ふ。其れより東洋一の稱ある三井物産川崎埠頭を見て後東京灣を一眸の中に眺め得らるゝ同所岸壁にて行尉を開く事とならう。中食後埠頭に續く鐵道省の火力發電所の大規模の發電装置を見て再び鶴見驛に戻りて解散。

天候 雨天中止

鶴見埋立地に於ける工場及埠頭の見學(紀行)

イーグル生

川崎から鶴見にかけて所謂京濱運河に沿ふて廣袤幾百萬坪かに亘る一帯の埋立地は一代の事業家故淺野總一郎氏が晩年に於ける大規模なる遺業の一である。京濱間に於ける工場地帯として既に建設を了り又は現に建設工事中の各會社新式工場や埠頭設備は枚擧に遑ない、此地方一帯が將來工業地として完成の曉には我國に於ける最も規模壯大なる工場地帯として産業の中樞を形造るに至るであらう。

今回の我クラブ見學のプログラムは

東京瓦斯會社鶴見工場

日清製粉會社工場

三井物産會社川崎埠頭

四月

一四三

鐵道省川崎火力發電所

以上四箇所を順次見學と云ふ事であつたが、日清製粉會社は都合上一般の參觀を謝絶されて居るとの事で遺憾ながら同社の新式設備を見るの機を得なかつた。

所定の時刻に鶴見驛へ集合した會員三十二名、鶴見臨港鐵道の電車に乗る。此電車は最近開通のものでこんな電鐵のある事も未だ知らない人の多い位一般の乗客にはあまり縁のない線路なので、一行中二三の人々を除いては皆始めての試乗である。此日丁度建築學會の會員多數が昭和肥料會社其他の工場見學にて我等一行と同車したので、特に二輛連結した電車が満員であつたのは開業以來恐らくは空前であつたらう。

安善通驛で下車して先づ東京瓦斯會社の鶴見工場に到る、會社の技術者大森保雄氏から工場の平面圖に依つて設備と工程との概略を承り、吉井寛二氏から種々便宜を與へらる。専門的智識のない吾等には細かい部分的な事は解らないが大體の概念は得る事が出來た。それから工場を案内されて順次瓦斯發生の裝置を觀る。運河岸側より船積石炭を貯炭場に陸揚し、更に多數の發生爐に給炭する作業は凡て完備せる機械裝置に依て爲され殆ど人力を要さない、一晝夜に使用する石炭約五百噸、瓦斯製造量約二十

萬立方米であると云ふ。

發生爐より排出する赤熱せるコークスは從來の設備にては水を濺ぎて消火し其熱は空しく空中に放散し去りたるを、此工場に於ける新式設備としては赤熱コークスを密閉式消火裝置に依り其熱を汽罐に導き蒸汽發生に利用して居る、即ち熱の廢物利用である。

工場を一巡して後、場内にて撮影をなし、辭去して再び電車にて終點扇町に至り三井物産會社川崎埠頭事務所を訪ふ。茲で午餐の後社員稻葉・山本、北村三氏の御案内にて構内の諸設備を觀る、用地は約六萬坪東京灣に面して京濱運河の水路に接し、運河面に設けたる石炭荷役の繫船岸壁は八千噸級船舶を同時に三隻繫留する事が出ると云ふ、流石は三井の經營だけあつて規模の大なる事は云ふ迄もない、岸壁上には高五十七呎、長三百五呎の巨大なる移動式の橋梁式石炭荷役機三臺を据付け、各機上には夫々走行自由なる起重機を備へ一時間に約三百噸内外の荷役を爲し得ると云ふ。石炭荷役岸壁の東に接して別に繫船岸壁及大倉庫がある、茲では石炭以外の雜貨及機械類を取扱ふと云ふ、岸壁から前面海上を望めば遙に房總一帶の山々は一抔淡彩の如く霞ん

で、平凡なる東京灣頭にも風情ある好眺望を展開して居た。



瓦斯會社工場にて

夫より三井埠頭に隣接せる鐵道省火力發電所を見る。階上汽罐室には巨大なる水管式汽罐八臺が二列に並んで盛に蒸氣を發生して居る、内四臺は三菱製、四臺は外國製であると云ふ、石炭の燃燒裝置及灰の搬出處理等凡て自動式裝置で四臺の大汽罐を取扱ふに一人にて足ると云ふ三階の床上にはスチームタービン直結の二萬九千キロ發電機が三組並列して居る、内二組は三菱製、一組は英國製であるが案内された佐藤氏の説明に依れば三菱製の方が遙に能率優秀であるとの事である、國產獎勵の聲、盛なる折柄意を強うするに足ると思ふ。階下は一二階共全部發電裝置の補助機關で満たされて居る、從來の普通火力發電所を見た目では比較にな

らぬ程複雑大規模なのに驚く、現在東京鐵道局管内の電力は殆ど全部此發電所から供給して居ると云ふ事である。

以上で今日の見學行程は全部了つたのであるが、筆者は工場の作業及諸設備に就て専門的智識を缺けるが爲、完全なる見學効果を得られなかつたのは遺憾であるが、常識的には大體の概念を得て啓發する處尠なからざりしを喜ぶ。實に近代機械文明の發達は精巧なる機械力の應用に依り、大規模なる工業的施設となつて現れるを見て、今更ながら人間智力の偉大なるを痛感した。此經費一人當り二圓二十七錢。

聖岳と土肥の大杉

期日 四月廿九日(天長節)

集合 午前八時東京驛

發車 八時十五分熱海行急行

下車 小田原驛九時卅五分

四月

東京

小田原驛

湯本 相摸灘 眞鶴 白根山 眞鶴 安房 箱根 眞鶴 肥田 眞鶴

四月

一四八

行程 驛前より富士屋自動車にて湯本着、舊道を湯本茶屋に至り左折山路に入る。道案内を先導に登る事約一時間半畑野平に達すれば展望全く開けて相摸灘を一眸の中に收むる雄大なる眺を恣にし得る事が出来る。程なく關白道に出で一籽程進んで小徑に入り藪の中を登攀し一時頃聖岳の頂上八三八mに着す。聖岳は箱根外輪山の一なるも位置偏するを以て白根山と共に兎角疎外され勝な山である。休憩の後裏に下りて米神川の上流に出で治承四年石橋山に敗れたる頼朝が眞鶴より安房に逃れる迄の數日間箱根權現への往復に通過したる土肥の大杉、小道地藏堂址等吾妻鏡源平盛衰記に記されたる史蹟を探りて眞鶴驛に着す。山道十六籽なれば自信のある方だけに願ひたし。歸路 午後五時七分眞鶴發七時八分東京驛歸着解散地圖 五萬分、小田原、熱海用意 辨當、水筒及手袋天候 雨天中止

雨を侵して聖岳に登る(紀行)

はなぶさ

曇天を氣遣ひつゝ代々木迄來て見れば、今日は天長節とて練兵場へは軍隊が續々つめかけて居る。觀兵式が舉行されるなら雨は降るまいと安心して八時十五分の熱海行準急行で出發したが、横濱邊からポツ／＼やつて來た雨が大磯を過ぎる頃には遂に本降りとなつて仕舞つた。

小田原に着けば中山交通子の御配慮で富士屋自動車は待つて居る。雨中を飛ばして湯本に下車し橋を渡りて舊道に出で一籽程行つて湯本茶屋の勝俣久藏を訪ふ。四年前聖岳へ登つた時の案内人で今は家業の箱根細工を息子に譲つて山林監視をして居る。晴れるだらうかと聞けば、一寸歇む見込はありませんとの事だつたが元氣旺盛な一行丁度小降りになつたのを幸に、豫定の通り登山すべく十時半出發した。同家の近くから直に小徑に入り三十分程は雜木林の中を行くが、水力電氣の水路を

四月

一四九

越えてからは萱原となり須雲川に流入するアザミ澤に沿ふて登る。此のあたり火山灰



憩休てに點地m〇四六

と岩石との堆積せる地層とて、去る十二年の震災にて崩壊したる後、降雨の度に表土を洗ひ流されて地殻を露はせる箇所多く、道も大半は破

損された儘の悪路を雨を冒して登るのは樂では無いが、到る所に拳を擧げて居る蕨や、ぜんまいを摘んだり、藪鶯の聲を聞けば慰められる。一時間程登つて少しの晴れ間に一息入れて辨當を開く。谿を隔て、相對する塔の峰の中腹には初花が御詣りした阿彌陀寺が風足早い霧の間に隱見する。尙も登れば斷崖の上に危く止る一ツ石と云ふを過ぎる。藤枝君バロメーターで標高を調べたり所要時間を記入して居る。何れ猛者

連をリードする時の参考とされるのであらう。斯くて約二時間を要し標高約七百米突

の所で太閤道に出る。箱根町から石垣山へ通する尾根道で、豊臣秀吉が小田原の北條を攻めた時通過した道と傳へられて居る。東京邊で木舞竹に使用する篠竹を採り運び出す爲めに山車が通るので山中としては立派な道である。此道を箱根町へ向つて約一

料進んで聖岳の全容を望み得る所迄達したが、雨は歇み相も無い。これでは登つても眺望が得られぬから止めた方が得策だとの勝俣氏の意見に、案内人の顔も立てねばなるまいと残念ながら引返す事となつたのだが、小池、藤枝の兩君は折角此處迄來たのだから吾々だけで登つて來るとの事に、それでは氣を付けて行つていらつしやい。百人風呂で待つて居ますからと上下に別れる。

硬派と別れた軟派の七人は今來た道を引返す。丁度頃合の下り道、温泉へ這入れると聞いて急に元氣付き歩調も早まる。此太閤道を五料程歩いた頃、近道だとの話に左の小道に入つたのだが、行くに従つて道が狭まり遂に近頃切り開いた計りの傾斜地に出で仕舞つた。今更戻るのも癪だと其儘藪の中を降る。すべる、轉ぶ、ひつかゝれる難行苦行の末、漸く早雲寺の前に出で、ぶぶぬれ泥靴で湯本の吉川旅館に着いたのが三時半。

早速座敷へ上つて濡れたシャツを脱ぎ捨て百人風呂に飛び込んだ時は蘇生の思がした。古川旅館はサービス頗る善く、且つ氣の利いた年増のねえさんが何くれとなく、まめ／＼しく世話して呉れるので我が家へ歸つた様な心地がする。誰であつたか此のねえさんと仲よく火鉢をはさんで濡れたシャツを乾かして居る。此れを見た新婚間も無いT君、急に里心が付いたか考へ込めば、一日の長あるT君早速見て取つて慰めるのだから冷かすのだから分らぬ様な體驗を語る。見せられたり聞かされたりして居る若人のO君トテモ憂鬱になる。色々の場面が展開されて食卓が用意され山海の珍味が運ばれ、ビールが抜かれる及んで興は益々湧く。すつかり善い氣持になつて雨の中をシヨボ／＼歩いて居た事は忘れて仕舞つた。

六時を過ぎても二人が見えない。今頃迄待つても來ねば大方湯ヶ原へ出たのであらう。或は歸りの汽車で逢へるかも知れぬと、根の生え相な諸君をせき立て／＼自動車で雨上りの道を小田原驛に着き、ホームで待てば進入して來る列車の最前部の車窓から長半身を乗り出して居る兩君の姿を發見した。居たく／＼と子供の様に喜んで早速飛び乗り「見透しが利かないで困つたでしょう」と聞けば、小池君、「聖岳なんぞ問題

ではありません」とエライ鼻息に辟易して一同黙つて聞いて居れば藤枝君の丈けより高い藪を押し分けて聖岳の頂上を極めてから白銀山にも廻り、夫れより曰く十二年の震災に根府川村を押し流したる山津浪の發生地たる幕岩、曰く直下四百五十米突の大斷層、曰く吉野山に劣らざる一目十本の満開の山櫻等々を發見して湯ヶ原へ出たのだと得意になつて辯じ立てる。聖岳迄登るだけでも雨中では困難なのに夫れ以上の難路を踏破されたのであるから如何程威張られても一言も無い、未見の地であれば飽くまで研究しようとする眞剣な態度と雨をも厭はず登山される壯者を凌ぐ元氣には何時もながら敬服する次第で、流石は「不遇の山河を訪へ」と叫ばれるだけあると頷かれた。其精細に就いては小池君より御發表ある筈であるから御覽の上是非登山されん事を御奨めする。夫れにしても偶然に同じ列車に乗り合はせられたのは、雨を冒して登つた一行の熱誠に感激した聖岳の山靈の加護に依るのであらうか。斯くて硬軟夫々に満足して八時四十分品川驛歸着、我家へと急いだ。

聖岳より新崎川の谷へ（紀行）

梨 萃 子

大閣道も『大閣の笠置き場』迄は、山麓の人々が山仕事の爲めに往來するので相當に立派な間道だったが、それから先は俄然小徑と變り（地圖にもさう明記してはあつたが）加ふるにスズダケの密生で、纔に切開けられた所を潜つて行くので、降る雨に濡れるよりは、その葉に溜つた露に濡れる方がひどいのでその困難は一方ではない。でも流石に植物の豊富を以て天下に鳴る、箱根山彙の一角だけに、ミツバツジやトウゴクミツバツジは到る所に燃え盛り、スマレは、私達の貧弱な植物知識では分類に苦しむ程多種なものが咲き亂れてゐて、その困難を慰めてくれるに充分だつた。五六百m行くと左に分岐する小徑があつたがそれを見送り、更に七八百mの所に再び左への分岐小徑があつたがそれも澤へ下る様な形なので見送り、三度目の分岐點に出たとき、左の方の小徑が稍登り勾配なので、これを探つて行くこと八九百mで、どうやら

左手が聖嶽（ヒジリダケ）の頂上らしい感じがしたので、四邊の地形を案ずると確にさうらしい。が、さて一面にスズダケの密生で、何所から取附いてよいのやら見當がつかない。藤枝君が勇を鼓して、上着の釦を全部掛けて身仕度甲斐々々しく『ヨウシ飛込むぞ』

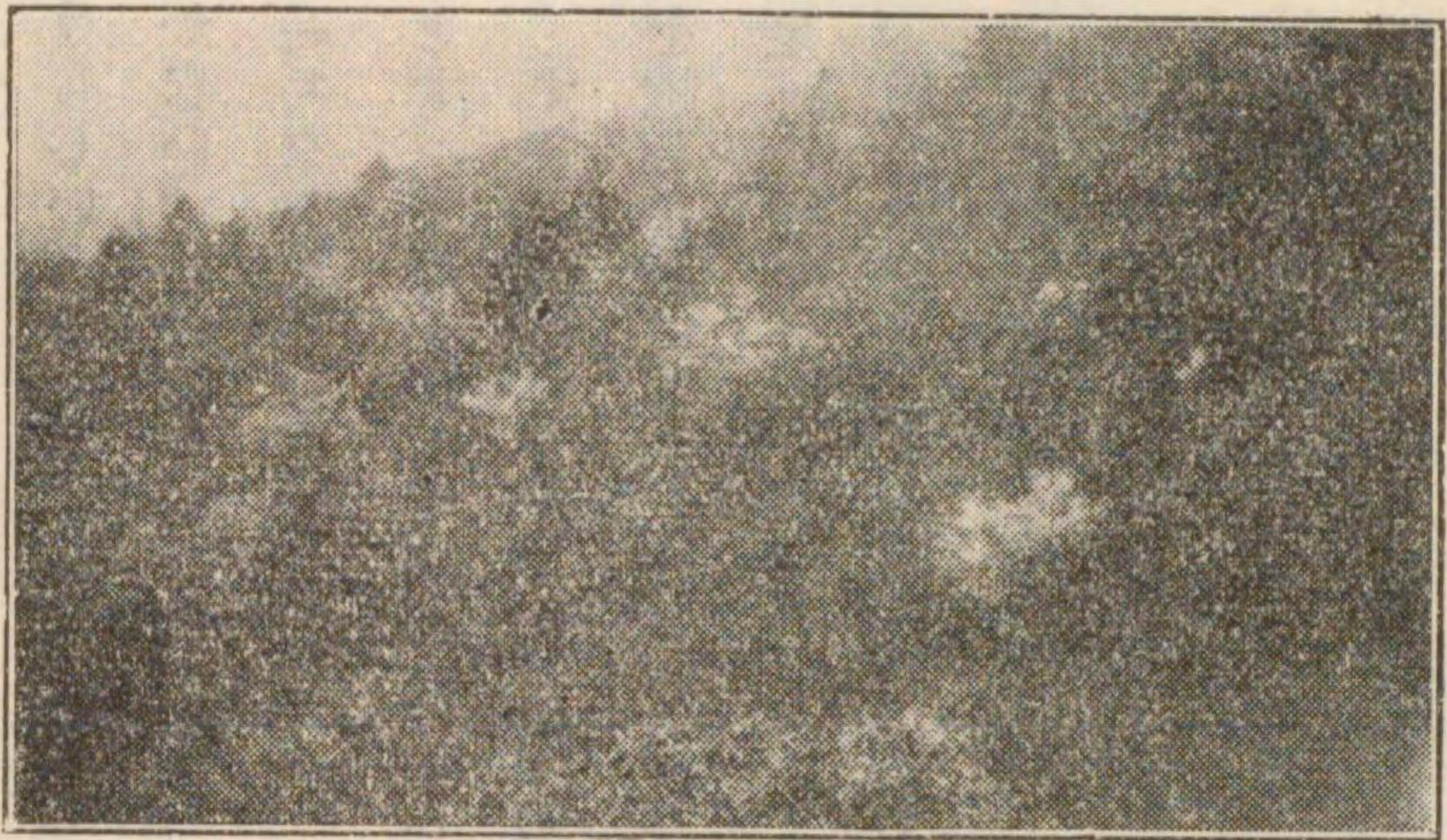
とサツと身を躍して藪のなかに突入した。私も後れじとこれに續いた。

すると何のことだ、五六歩先きは不毛の砂礫地で、それを横ぎり、また一跨程の藪を越した所に苔蒸したかすかながら古い踏跡らしいものが頂上迄附てゐて、何の獸の足跡か點々としてゐる。

馬酔木が五六本立つた、頂上らしい所に着たのが一時五十分今日の氣壓に正確に整正したバロメーターを検すると正に八四〇mを指してゐるので、こゝが獨立標高點八三八m 聖嶽の頂上であることを確め得た。

最近人の訪れた氣合もなく、塵一つない頂に立つた氣分は實に格別であつた。が、眺望を得られないのは残念だつた。唯、こゝより眺望がよいと云はれてゐる、高ソネ山（六六九m）の頂が僅に窺はれるだけであつた。頂を辭して、もとの道に引返し、西

南を指して小徑を進むこと二三百mで、藤枝君が、



山を埋めためママサクラ

『アッ』

と歎嘆聲を揚げた。見よ、左側八二〇m峯の山稜が南微東に走る、北側の山谷を埋め盡した、一面のママザクラの美觀、それを點綴する針葉樹、闊葉樹の新緑美、その間を去來する雨雲の變化、唯、茫然と魅了されて立盡す頭上には、馬酔木の白花が房々と雨に惱んでゐた。山を行く者』の幸を満喫して行くと小徑の四辻に出た。左の小徑の地震の龜裂らしい所を進むと再び小徑に會したので、今度は右にとつて進む。白銀山(シロカネヤマ)を指して行つたのである。二三百m行くと左に小徑が分岐してゐた。それを越して、バロメーターが九六〇mを指しめざす白銀山の峯頭が薄雲を距て、間近に仰

がれる地點迄進んだのであるが、時は既に豫定を超過し、雨も亦倍々烈しく降り注ぐので歸路を慮つて之を他日に期して踵を返し、先の左の分岐小徑に入った。

最初の四五百mはスズダケが切開かれてあつたが、それから先はもう切開がしてゐないので遮二無二身の丈けよりも高いスズダケの密生を押分けて行くので其困難と努力は一方ではない。九〇三m獨立標高點の西側を通過しスズダケの鹿砦と闘ふこと約一軒半で漸く之を切抜け、今度は地圖に水線の記入してあるヨウゾチボウノ澤(要僧坊ノ澤?)の西の檜の植林地の山稜を一直線に降つた。頗る急傾斜で約七十度に近く五百mの下方、高距四百mの地點を見ると、足も竦まんばかりである。加ふるに地震の爲めに生じたる龜裂、斷層は縦横に走つて、足許の危きこと此の上もない。でも自然は雄大である。馬酔木や檜などの葉の若葉が雨に潤つて、到底繪具などでは現し得ない色彩を放つて私達を慰めてくれた。

ヨウゾチボウノ澤の新崎川(ニイサキガハ)への合流點に降り着いた私達はホットー息ついて食べ残しのパンを分けあつたり、少し許りウキスキーなどを飲んで元氣を附けた。

新崎川を左岸に徒渉した所、暮山(マクヤマ)(△六一五m)が一大崩壊を起して河中に乗出した爲め、河身は急角度にヘシ曲げられてゐる。これは去大正十二年の地震の際に起したものでらしい。然るに左岸、杉(相)山(四八〇m)の山腹が去年の地震で之亦一大崩壊を起して新崎川に乗出した爲め、河身は再びヘシ曲げられて實に無慘な有様を呈してゐる。

瘠せ畑や、蜜柑畑などが現れ纏て吉濱村鍛冶屋の部落を過ぎ白藤の花が美しく咲き亂れてゐる下などを通つて、湯河原驛へ着いたのが午後五時四十五分。

小田原驛で『太閤の笠置場』で別れた諸君と合した。列車は私達の疲れた體を乗せて一路東京へ！

(参照地圖 陸測五萬分ノ一 小田原 熱海)

此經費一人當り三圓五十五錢。

【五月之部】

風薫る伊香保温泉と榛名山の新緑美

期日 五月三日(第一日曜)

集合 二日午後五時上野驛

發車 午後五時四十分

下車 澁川驛夜八時四十一分

行程 伊香保の五月は一ヶ年の最好季だ、山中には未だ處々山櫻が咲いてゐる、眼

にしみる様な若葉の薫る林には駒鳥が銀の鈴を振つてゐる。

驛前から直ぐ自動車で榛名山腹の温泉郷に到つて一浴すれば心氣爽快、伸びくした氣分となる。斯くて平凡らしき伊香保の名も遊行の意義を覚えやう。其の夜はサ

ービス本位の横手館に宿つて都會の雑音を避けて快遊し、靜かに安眠することゝせ

上野驛

澁川驛

伊香保

五月

一六〇

翌日は附近の散策地を一わたり遊覧した後、目標たる榛名山に登ることにする。ケ
ーブルでも膝栗毛でも御勝手次第、榛名湖、榛名神社にかけての青葉に匂ふ山路は
漫歩的には絶好である。時間に餘裕あれば附録として相馬嶽ぐらゐは登り度い。山
上の湖畔で晝食して徒歩下山、午後三時半頃の伊香保電車に乗る。

歸路 午後四時五十八分澁川驛發夜八時半頃上野着
天候 不論晴雨

新緑の伊香保(紀行)

K T 生

發車前廿分に上野驛へと馳せ付けた。汽車は随分混んで、一泊旅行の人が多いら
しい。僕等のグループの側に十七八の女學生らしい女が二人居る。
「何處迄行くのですか」

「高崎へ参ります」

「歸省ですか？ 遊山ですか？」

「……………」

讀んでる本で産婆君の玉子らしいとの推定だ。大石氏の説明によれば高崎市で産婆
の検定試験を受ける方が萬事に都合なのだ、扱ては要領のよい方なのであらう。

「宿屋へ着く迄何も食べないのか」と誰か云ふ。

「空腹の方が後で旨いぜ」

いつも六時頃食事する僕は腹がすいた様な気がする、九時迄はとても保ちさうもな
いよ、小松原氏が何か三越の包を解いてる、大阪壽司！

忽ち平らげてしまった、なんだか物足りない、ホームで「そば」を立食した、七錢
では割合旨い、すぐ賣切れてしまったらしい。

◇

澁川から十六人乗のバスで伊香保へと向ふ、白襟嬢は切符の心配ばかりしてる。
「切符をお切りしませう、片道五十錢往復九十錢、往復の方がお得です」

五月

一六一

往復の得な位は誰だつて知つてゐる。

「後の七人さんはクーポンをお持ちですか」

うるさい奴だ。癪だからとうとう降りる迄切符を買はなかつた、運轉手も新參と見えて一番先に出たのに後から来たのに全部追ひ越されてしまった。

九時二十分伊香保の町へ入つた。横手館から番頭さんが二人出迎へに来てくれた。同勢七人なので、

「お後から未だお出になりますか」

と怪訝な顔付だ、荷物も何もないので手持無沙汰の様だ。

「先に幾人來てるね」

「お二人さん」

「おやく」

少なく共三人は先發して居ると思つたのに。

宿では一番上等な見晴しのよい室を當てゝくれた。四階の次の間付の室三室も取つ

てある。夜だつたので室迄昇つて行くのは大變な様に思はれた。

「随分高いね、いつたい梯子段は幾段あるのだね」

「五十段からあります」

「四階にお湯があるといふな」

先着の二人は食事が済んで町へ出掛けたらしい。早速襦袍に着替へて風呂場へと行く。大きい湯殿の外に「松」「竹」「梅」の三つの家族風呂がある。各々湯槽の形が異つてゐるが「竹の湯」が一番氣持がよい。

晚餐の最中に先着の二人が町から歸つて來た。豊間根、杉山兩氏だつた。新婚旅行の若夫婦が一緒に來たさうだ。何んでも六十一番とかの室で湯殿へ行く通り道に當る丁度僕等の室の向ひ側の三階の角だと、餘計な心配は無用、食後十一時から町へと繰出す。

伊香保の町は温泉としては特色のある町だ、多量の湯が上の山の中から湧き出すので温泉宿は斜坡の上から下へと階段の様に並んでゐる、だから何れの旅館からも眺望は

い、譯だ、大通りは下から見ると石の階段になつて居る、石段を上り切ると伊香保神社がある。夜で分らないが此處からは伊香保の町は一目に見渡せる筈だ。

二三人の八釜敷い女の聲で目醒めた、宿の女中連かと思つたら伊香保の名産を出張賣する女共だつた。羊羹、寄木細工、湯花等と温泉場の物産は定まつてる、大分賣れたらしい。神代杉の下駄を東京へ歸つて夜店でも出せる程しこたま買ひ込んだ人があつた。

横手館の四階からの眺望は實によい、町の櫻花は今が丁度満開だ。遠くの山は未だ雪を戴いてるのが快晴なので手に取る様に見える、氣持のい、朝だ。



湯に浸りに行く、昨夜噂の新婚の夫婦が松の湯に這入つてゐるとか、皆が騒いでるの

で中々出られないらしい。



朝食後襦袢掛けて見晴しから物聞山へと出掛けた。伊香保神社の左手から登り始める、五月でも朝は寒い、霜解けのして居る個所がある、櫟の林を抜けると登りはやゝ樂になる、處々に山躰躑が咲いてゐる、未だ少し早い此邊は秋草の名所で八月末頃からは實に綺麗だ、それからだら／＼登りて「上の山」の絶壁の所へ來た、所謂見晴しである。狭い平らな土地に柵を廻らした所に一軒の茶屋がある、展望は一〇〇%だ。近く伊香保の町や濹川、前橋あたり迄眼下に見える。赤城山が吾妻川と利根川の合流してゐる所迄裾を引いてゐる。遠く信越國境の連峰の白く雪を著てるのが一望の中だ。後には二つ嶽に相馬ヶ嶽とが重つて立つてる。

「來てよかつたなあ」

茶店のお婆さんが麥湯を入れてくれた。

「水は何處から持つて來るの」

「御用邸の下から、汲んで來ます」

「それは大變だね」

其處から一町程で右へ折れ石のごろくした下りにくい路を辿る、三町程で物聞山に來た。石の小祠が二つある、琴平と秋葉の兩神社だ、此處からの眺望も中々いゝ、浴客の散歩には丁度頃合の場所だ。

◇

十時半から榛名へと向ふ、町を中程迄下り宿屋の中庭を通つて「ケーブルカー」へ乗りに行く。湯の澤の谷川を暗渠にして其處に立派な停車場が出來た。

三十分毎に發車する、可成な急勾配だ。「ワイヤーが切れたら大變だ」と心配して乗客もあつた、十二三分で峠の上に着く。大抵自動車を飛ばして行つて仕舞ふ、高原には勿體ない位に廣い直線の路を進む、如何にも氣分のよい處だ。左には相馬ヶ嶽が高く聳えて中腹にはスキ一のチャンプ臺が残つてゐる、冬期スキーヤーの活躍が偲ばれる、十町程行くと撞球場やテニスコートがある。

どうしたのか先刻出た「バス」が止まつてゐる、故障らしい、中の人々は僕等が追越すのを羨ましさうだ。それから四五町で榛名湖が眼の前に展けてくる。靜かに澄んだ湖

面には烏帽子ヶ岳だの、榛名富士だのが倒さに寫つてゐる。

「榛名富士に登つて見ないか」

「登らう」

時間がないので割愛した。

榛名神社の大華表が立つ天神峠から谷を縫ふて下つて行く、いやになる程下りるのである、だんくゝ水の音が聞えて來た。有名な葛籠岩が谷の向ひに見えて來ると榛名神社はもうぢきだ、伊香保からは丁度神社の裏から行く様になるので本社迄行くには石段を後戻りして登る形になる譯だ、時季が良いせいかな參詣人で一杯だ。近在の小學生の遠足が幾組もあつた、母親をつれた女教員も居た、まるでお祭の時の様だ。神社の入口には名物や繪葉書等を賣る店が五六軒ある、山椒のステッキは珍らしいので買った、其處から石段を登ると双龍門がある、境内には奇岩が多い。本社の後に御姿岩と云ふ巨岩がある、その中程に御幣が立てゝある。

『どうしてあんな高い所へ登つて行つて立てたのだらう』
と誰しも思ふ位である。

榛名神社は昔から相當に榮えたものだが今は社格が低い縣社なので寂びれた様に思はれた。祭神はとても讀方が六ヶ敷しい爲め特に社務所に振り假名の付いた木札が置いてあつた。

◇

つい最近迄榛名へ來ると老人や都會の婦人達が駕籠で來て居るのを見受けたものだが今では裏山を自由に通ふ様になつたので東京からでも日歸りで來られる様になつた。

神社から榛名の町へ下りる、あちこちに山櫻が満開だ、自動車を待つたが中々來ない。客が多いので乗合にはとても乗れさうにもない。聽て幹旋子が何か向ふの方で運轉手風の男に掛合つて、やつと一臺つかまへたらしい。迎ひに戻つて來ることにして六人だけ先發する、十五分で湖畔亭に着く。往きに會旗まで預けてしかと帳場へ頼んで置いたのに食事は未だ出來て居ないとはなんのことだ。見晴しのよい室で榛名富士が逆さに寫つて澄んだ湖面を望みながらビールを引く、なんとも云へぬいゝ氣持だ。十分ばかりで御膳が出た。

隣の八人組は僕等よりずつと前から待つて居たらしいが却つて僕等の方がお後からお先の様に成つたので、

『もういゝよ勘定だ〜』

とぷり〜怒つて出て行つて仕舞つた。氣の毒な事をした。三十分程したら後發の大石・豊間根・小松原三氏が來た、中食後湖岸でも記念撮影をする。

榛名湖は周圍三十町計りの小さいものだが明るい陽氣な湖水である。ボートでも浮べて遊びたい氣がする、山中の湖水の様に陰氣で凄味などは少しもない。

豫定より遅れたのでヤセオネ峠まで自動車を奢る。東京なら五十錢で『OK』だが此處では三倍だ、然し湖畔をドライブするのは意地悪るさうな交通巡査に遭はないだけでも氣持がいゝ。

『ケーブルカー發車迄に十分ある、氣のきかない驛員は中々入れてくれない。發着のホームが異なつてゐるのだから差支ないと思ふが、たうとう下から車の來る迄駄目だつた。急勾配を車が下るのは餘り氣持のよいものではない。』

『ケーブルカーは後方へ乗るにかざるね』

と何處かの臆病者が云つて居たのも滑稽だ。

町を通り抜けて横手館へ戻つたのは午後三時十分、四階の一番眺望のよい一室で小憩。出發までに四十分ばかり間があるので入浴する。伊香保のお湯は實際温つたまるので以前から子供のない連中が此温泉に湯治に来て子供の出來た例は澤山あるとか。すつかり疲が癒つた、もう一晩泊りたい様な氣がした。

午後五時四十五分の汽車に間に合ふ様に電車停車場へ向ふ。

『此次來たら復四階の室を頼みますよ』

『どうぞ復御出掛け下さいませ』

『今度はネ、二人づれで来るよ』

『ハ、……………』

『さようなら』

『さようなら〜』

『關東旅行クラブさん萬歳!!』

此經費一人當り十圓。

新緑の大菩薩峠附近

期日 五月十日(第二日曜)

集合 九日午後十時半飯田町驛

發車 午後十一時四十分

下車 十日朝四時廿分鹽山驛

行程 此の頃の日曜には新緑の大菩薩や秩父をを目指して下車する人は中々多い。改築された道路を自動車で奥迄進めば上下小田原を経て雲峯寺山門も程近い、こゝで一ふくしながら朝飯を済まし長兵衛小屋のある上日川峠へ向ふ。峠から上は眺望もよい、足下には若木

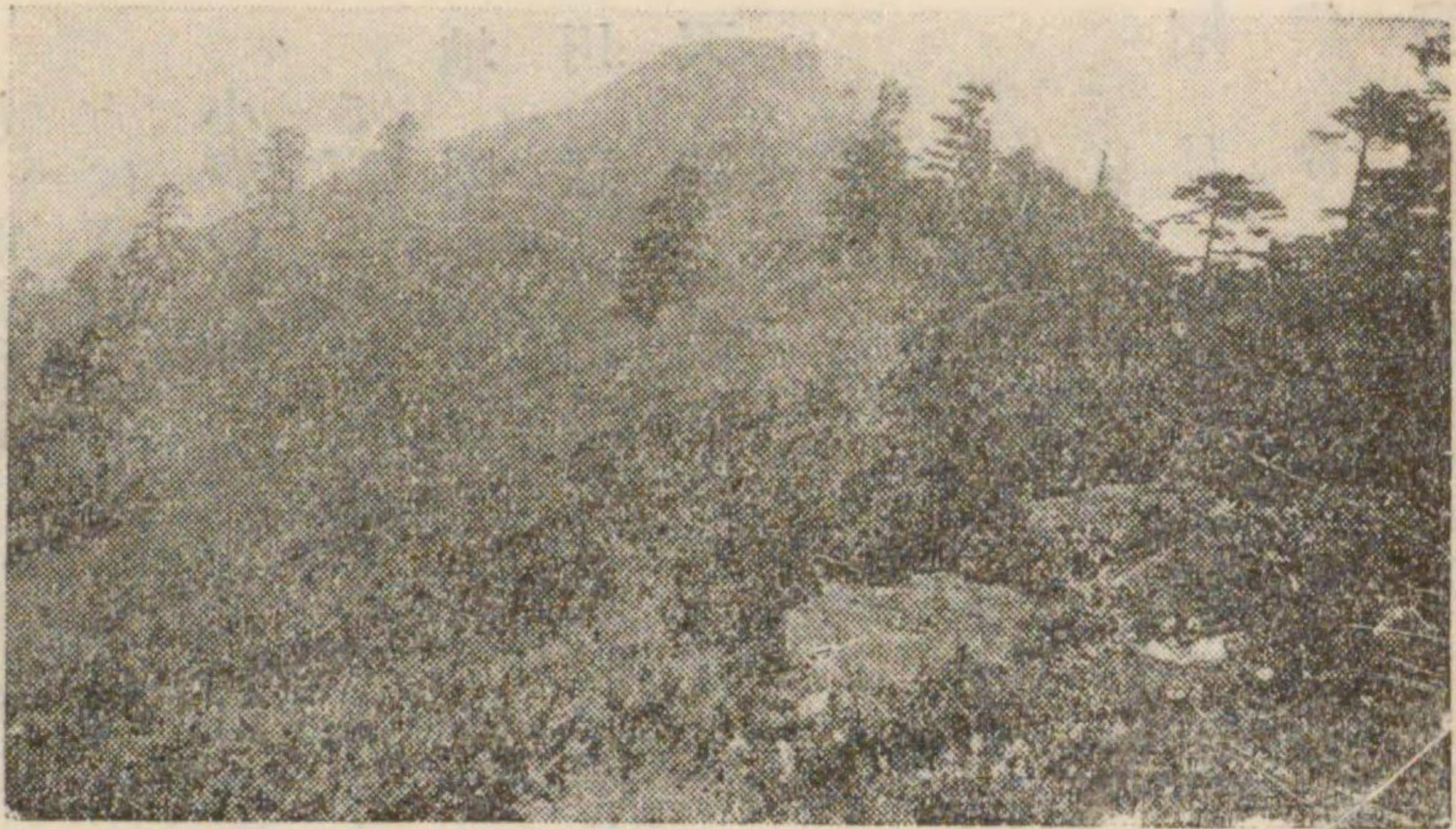
飯田町驛

鹽山驛

大菩薩

上下小田原

雲峯寺
長兵衛小
屋上日川峠



霞にあけし大菩薩峠

の躑躅が草叢に蕾を持つて居る頃であらう。

日初鹿野川
小橋
多摩川

上野驛

五月

二七二

大菩薩嶺へ十時頃着、それより少し下つて妙見の見晴臺あたりから四方の展望を樂む、前面春靄にかすむ南アルプス及秩父大觀は實に雄大な姿である。早く歸り度い方は鹽山へ下り、他の組は日川溪谷を初鹿野へ下るか、分水嶺山脈を猿橋に出るか小菅の溪谷を経て多摩川上流に出るかは天候と時間と足の都合により相談して決める事とします。強いと思ふ方も弱いと思ふ方も御参加下さい。

地圖 五萬分、鹽山、丹波

用意 食事二食、水筒、雨具

天候 雨天中止

雲雀啼く香取鹿島の水郷

期日 五月十七日(第三日曜)

集合 午前六時二十分上野驛

發車 六時四十五分(成田行)

下車 午前八時廿四分佐原驛

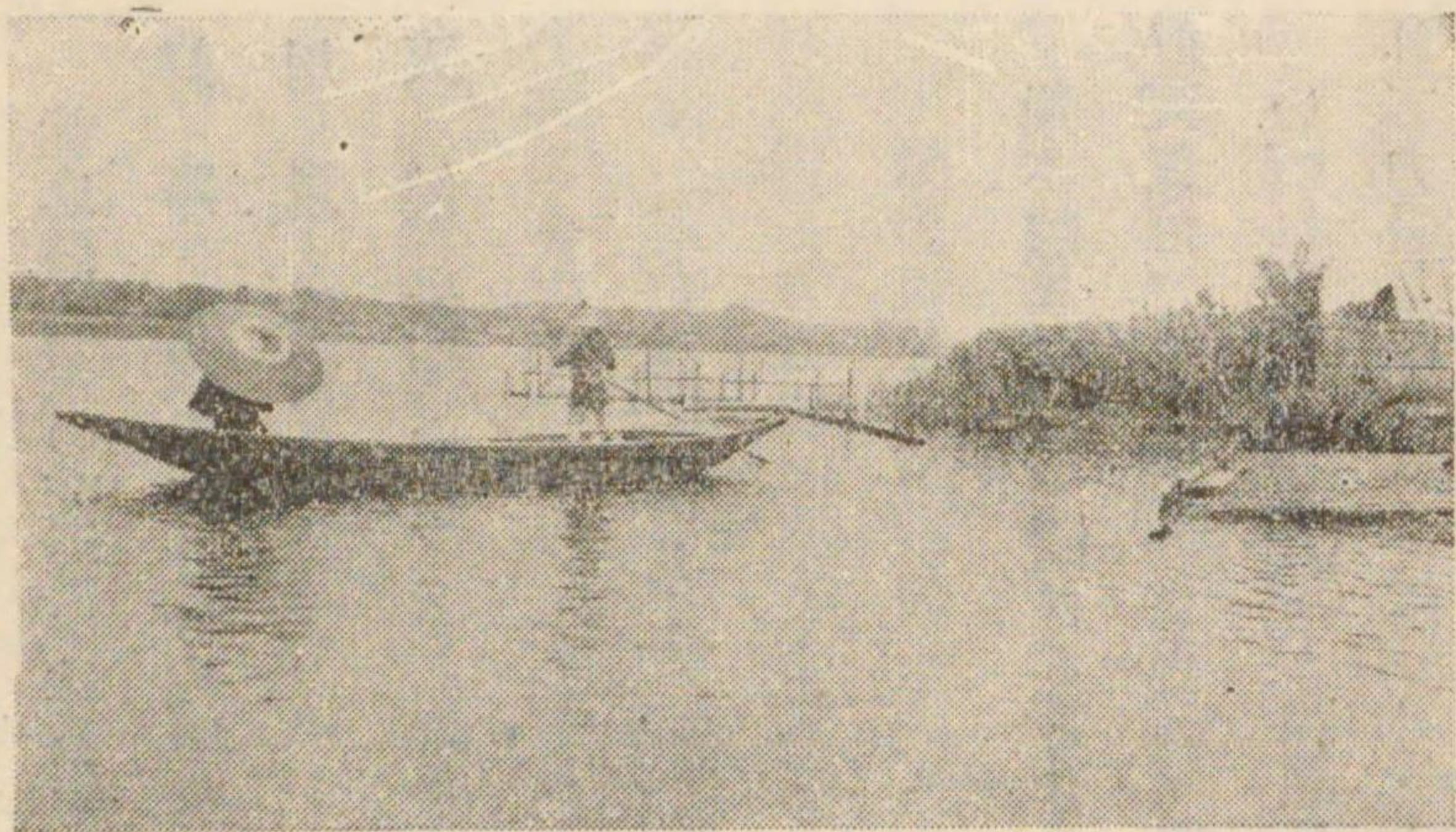
行程 驛前から自動車で香取神宮を參拜後川

口から我等の舟は悠々たる大利根の清流に出る、やがて狭い水路へそれる十六島を過ぎる頃道はいよ／＼細く、初夏のもや／＼とした天地の間に自分だけが此の世の中に取り残された様な氣持になつて古風な木橋十二を一つ／＼とつて行くと、やつと民謡の潮來に着く。

春 雨 煙 る 水 郷

潮來出島!! 名によつてその幻影を思ひ浮べ美しい粹なものとして舟は大舟津へと流されて行く、鹿島神宮は紀元々年の創建と傳へられ、國寶の三殿要石一本杉を拜し全國一の長

橋神宮橋から舟は再びポプラの並木續く牛堀附近に近づき、筑波山、霞ヶ浦飛行場



五月

一七三

佐原驛 香取 大利根 十六島 潮來 大舟津 鹿島神宮 牛堀山 霞ヶ浦

傳説の浮島を望見し別路を取りパナマ運河に型どつた大開門を通過し佐原に歸り伊能忠敬先生の舊跡を尋ねてゐると丁度汽車の時間になる。

歸路 午後五時九分佐原驛發午後七時三十二分兩國驛着解散

用意 辨當

天候 雨天中止

風薫る大和根の水郷(紀行)

稻保生

飛び起きて窓を開けるとさつと輝しい緑の光、澄み切つた空氣、とても素晴らしい好天氣だ。

いづれ發車きりくくと豫想して居た小松原氏が早くからニコニコ顔を驛頭に見せられて力強く嬉しかつたが、今日は若輩の自分が幹旋役は任重い。一同打揃つて午前六時四十五分出發と云ふ處だが、發車間際に馳せ付けられた一名にも割引廻遊券をと努める内、自分だけが寸秒の差でたうとう乗り残されて仕舞つた。早速タクシーを驅つて三河島の茶葉車を右によけ左に避けて北千住驛へ先廻りして漸く汽車はキヤツチ出來たが、汽車組は深切にも後一人では淋しからうと戸田氏が途中からバックして居たので一喜一憂。結局、全部の揃ふ爲め俄かに次列車を待つ事とし、其の時間を利用しては勿體ないが成田へ途中下車して御參詣と極める。

不動様の境内は何時もながらの混雑には流石に偉いなと感心する。公園は最近手入れが行届き新緑の氣分も非常によかつた。成田驛に歸れば都合よく次列車の戸田氏を發見一同先づ歡呼の聲をあげ、佐原行に乗込む。花火がポン／＼上る、署長さんや町代表の有力者らしいのがずらりとホームに整列して見送て居る何々協會とかの分をクラブに流用してすつかり氣持をよくする。圖らず車中で市野氏の御友人稻茂登氏が入會されて最後まで我等とコースを續けられた、不動明王の御利益は實にあらたかなことである。

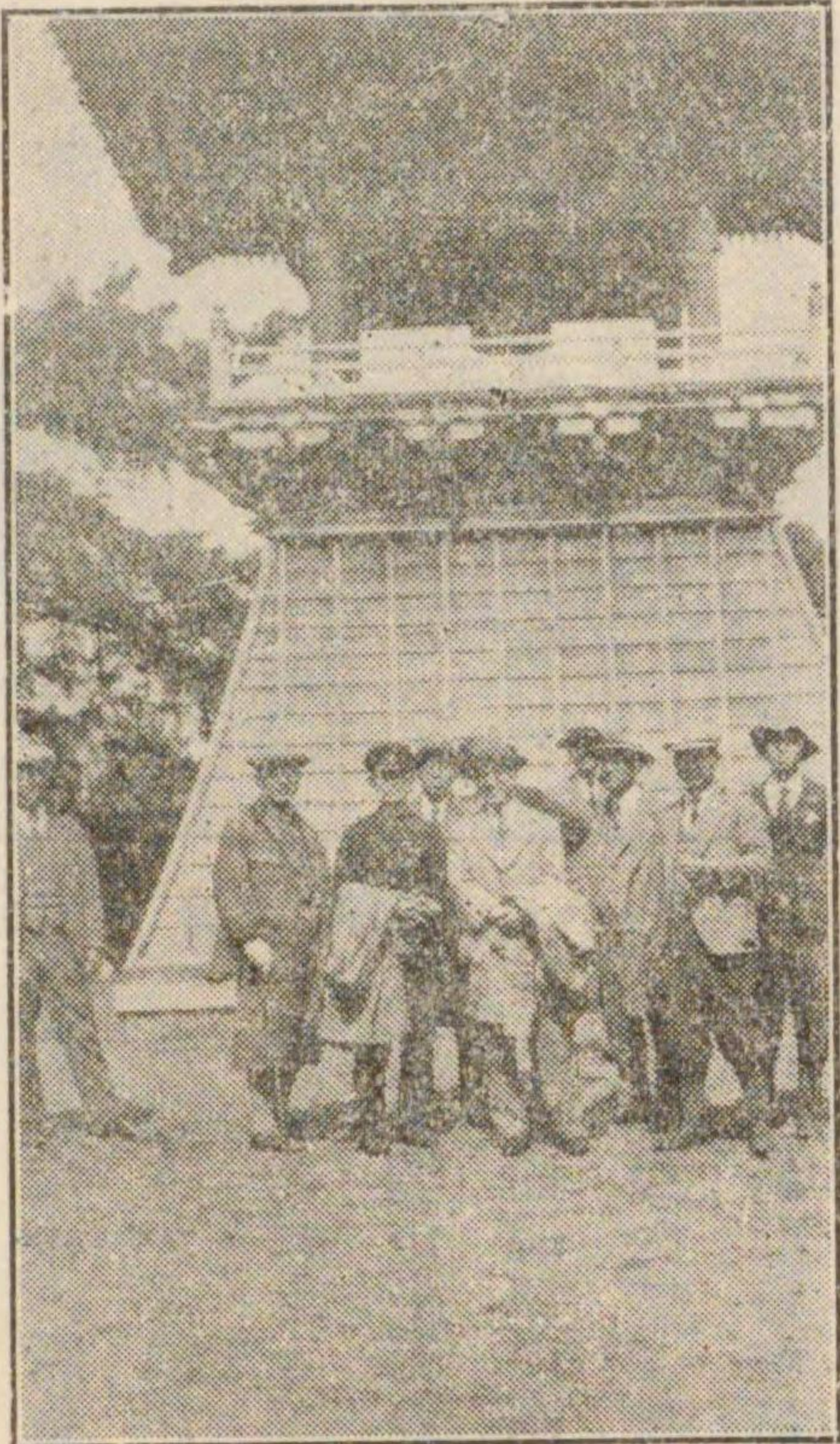
『色も香取の神路の春は

ほんのり美人の櫻色 　　よいやなく』

と謡はれる美人櫻のトンネルはもう青葉になつて毛虫がポタポタ落ちて居たが花の盛りの頃美観が偲ばれる、錦を綴る眞赤な山躑躅は目醒める許りに美しい香取神社参拜後川口から特別仕立のモーターがポツポツポーと喇叭を吹きながら利根の本流へ出る時に十二時半であつた。

關東山地北部の諸流を集めて八十餘里洋々として太平洋に注ぐ大利根は本邦有数の大河であり又た珍しく大陸性で下流に幾多の大湖沼を有する外水郷としての趣は他に比類がない。佐原を中心に霞ヶ浦北浦の風趣は別して其の代表的なものである。古來水に乏しかつた關東の地に之を貫く唯一の大動脈として悠久幾千年交通用水に或は農耕漁獵にその廣大な恩澤を憶ふ時、阪東太郎の名は一段と尊敬と親愛の念を懐かしめる。

津の宮を過ぎる頃愉快な食事が始まり、長閑な漫談が續く。遠くポプラの並木の見える與田浦あたりさては香取の森、風もなく舟はグン／＼水郷の静けさに入る。此處は丁度霞ヶ浦と北浦と連なる所へ利根が緩かに流を注ぎ、上から押寄せて來た土砂で砂洲を作つたので悉く豊沃な田となり面積數千町歩、村人は皆平和な農業にいそしんで居る、眞菰のそよぐ田で手拭姿の娘さんが、牛をせき立てゝゐる。思ひがけない小徑から農夫がスイ／＼と器用に船子を押して出て來る。友を訪ねるにも野良へ行くにも此の農村は舟が唯一の交通機關なのだ。



長勝寺の寶國の鐘を背に景

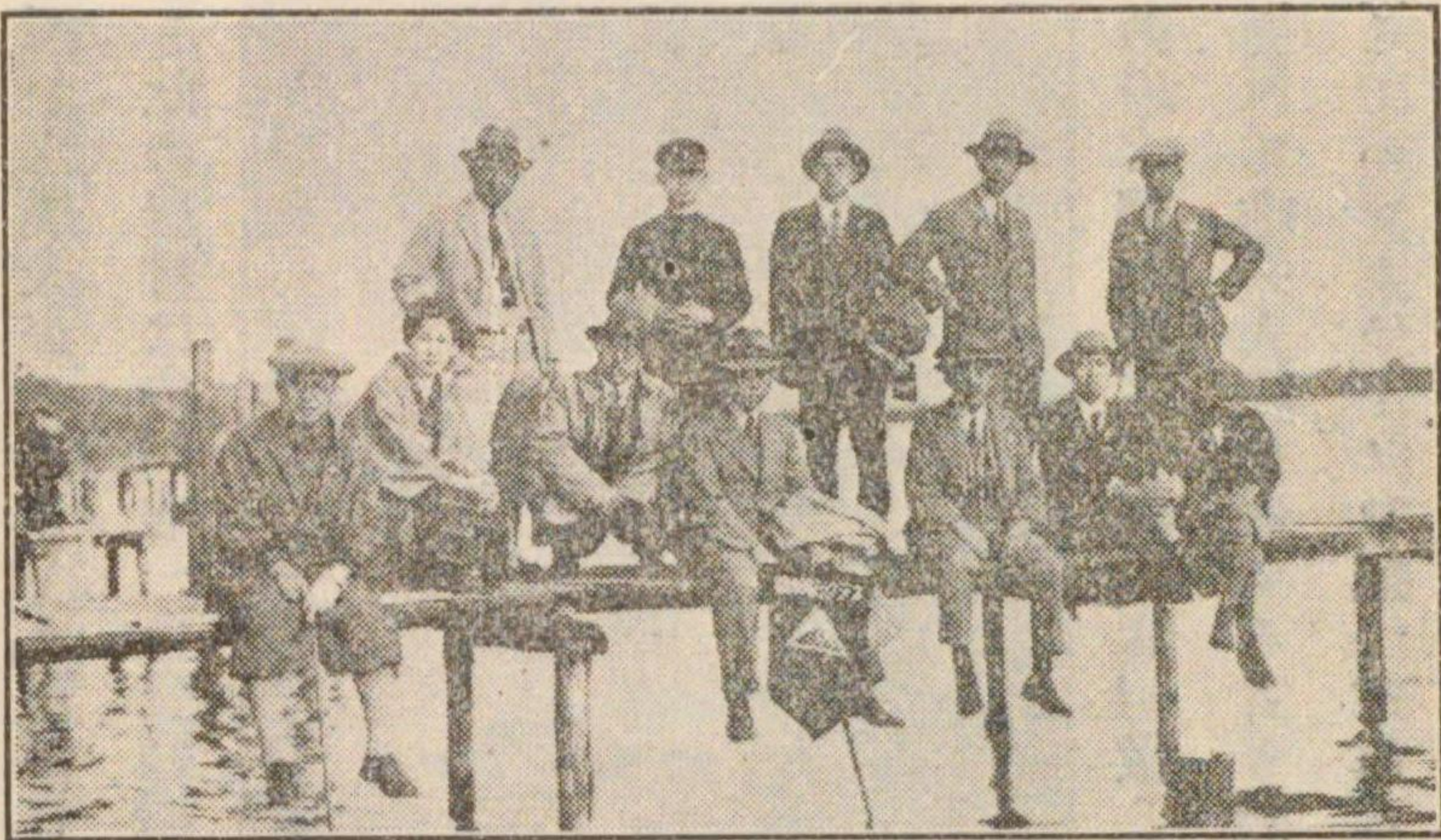
加藤洲の人々は流を飲料として居るので十二橋附近ではエンジンを止めて靜に棹さして行く。ぼちや／＼と水面を滑べる棹音にまじつて水岸で地蟲の鳴くのが聞える、柳の緑、躑躅の紅、桐の紫が散る下では悠然と牛が寝そべつてゐる、平和な静けさに包まれて唯一人聲を發する者も無い。突如あたりの靜寂を破るK氏の大喊聲『ヤーあしこでハンカチーフを振つてゐる振つてゐるんだ』。其の昔仙臺藩士がお江戸へ上る旅愁を慰めたとかの可憐なあやめが咲いたこともあつた潮來が見えたのである。一行十三

名とも潮來はついぞ見物したことのない連中ばかりなので忽ち舟を捨て、上陸する。

大 舟 津 に て

先づ禪利長勝寺を訪ふた、寺は稻荷山の麓にあり頼朝の建立したものと云ふ。國寶の鐘がある北條高時の寄進したものだ、此處で記念寫眞を撮つてから新緑の稻荷山に登る。牛堀、十六島あたりから霞んだ佐原、銚子方面へかけての展望は甚だ上々である。眞晝中とて潮來の町は太鼓も響かず郭のあたりも静かだった、先を急いで土浦通ひの乗合汽船に乗り大船津から自動車に乗った。

鹿島の神域は老杉巨松に包まれいつも静寂な氣溢れた處だが今日は中々賑つてゐる、社務所へ『關東旅行クラブ』の名刺を出したら宮司が深切に神殿の御講話をしたり案内して呉れた、御手洗池で復た記念撮影をやる、要



石への裏山道は奥深い山を歩いて居る様だ。切茸狩によいから、それから息栖神社に出で銚子へ渡つたら山と水との旅でさぞ好からうと後日のコースを考へてゐるのはT氏であつた。

大舟津の神宮橋でゆつくり寛ろいで五時の定期船に乗り、静かな水面を歸りを急ぐ。農夫の舟が忙しげに往來する、ポプラの並木が黒く浮出して來る、眞菰の中では水鳥が切りに鳴き騒いでゐる。

『こんな處に別荘も静かでないね』

『しかし直ぐ寂しくなるぜ』

『それもそうだな』

水郷の黄昏は靜に寂しく暮れて行く。舟が與田浦に入れば忽ちモーターは故障となる、應援船に曳かれてホットした頃は佐原の灯が明滅してあたりは全く夜のベールに包まれてゐた。伊能先生の舊家は後日の再遊に譲り舟着場から直ぐに自動車で佐原驛へと急ぎ十時には明るい兩國驛に着くことが出來た。此經費一人當り四圓四十七錢。

家族連れの行樂日吉臺の苺摘み

期日 五月廿四日(第四日曜)

集合 午前九時半澁谷驛(東横電鐵改札口)

發車 同十時半發電車

下車 東横電鐵日吉驛十時三十分頃

行程 苺園は日吉驛附近一帯の丘陵地。武藏野の新緑につつまるゝ處、丘からは遠く富士の靈峯をも望まれます。小鳥囀る丘一面の苺畑は緑の葉陰にちら／＼と紅い實を覗かせて皆様の御遊歩をお待ちして居ます。小さな御子様方にも少しの危氣なく、御摘みになりました苺は奇麗に洗ひミルクをかけて其の場で召上がる事も出来ます。斯くて園内で晝食後、解散随意行動とする。

附近には加瀬山夢見ヶ崎、下田地藏尊、桃で名高い綱島のラヂウム温泉もあり、杉本の毘沙門、西明寺、影向寺、丸子園、龜甲山の古墳等それ／＼に興味がありま

澁谷驛
東横電鐵
日吉驛

加瀬山、
夢見ヶ崎、
下田地藏
尊、綱島
杉本、毘
沙門、西
明寺、影
向寺、龜
丸園、龜

す。

又奥澤の九品佛を葉櫻の陰深き處に訪づれて見るも面白い散策の一つでありませう。

用意 辦當、水筒等

天候 雨天中止

樂しかつた苺摘み(紀行)

斗柄生

家族連れのスポーツ? としての兎狩が大好評でクラブコースに既に二回取入れられた後を受け、今度は目先を變へて東横日吉驛附近の苺摘みと云ふ事になった。

前日來の快晴に恵まれてか、集まりは定刻前から豫想以上の大盛況。小松原氏を始め半田幹旋主任、大野提案子、等々同人諸氏澁谷驛頭を目眩るしく活躍人數の整理に切符の買入れに、全員の連絡に……其の間クラブの小旗が、腕章が、來會者の人波を